

平成30年度

史跡古津八幡山 弥生の丘展示館
企画展関連講座・講演会

記録集



2019

新潟市文化財センター

目 次

第1章 企画展関連講座・講演会の記録

企画展関連講座（第1回）

- 律令祭祀の基礎知識（金田 拓也）…………… 1
- 越後平野における古代の祭祀関連遺跡とその様相（相田 泰臣）……………13

企画展関連講演会（第2回）

- 古墳時代の集落と豪族居館－東日本を中心に－（菊地 芳朗）……………29

企画展関連講演会（第3回）

- 弥生の「鉄」がつなぐ日本海沿岸流域の交流（林 大智）……………43

第2章 企画展の概要と企画展関連講座・講演会アンケート結果

- （1）平成30年度「史跡古津八幡山 弥生の丘展示館」企画展の概要……………60
- （2）企画展関連講座・講演会アンケート結果……………62

本書は、新潟市文化スポーツ部歴史文化課文化財センター（以下、市文化財センター）が、平成30年度に催した「史跡古津八幡山 弥生の丘展示館」企画展関連講座・講演会の記録集である。

スライドは講座・講演会で使用されたものを基本収録した。また、当日紙で配布された資料については紙幅の都合上省略した。

第2章には企画展の概要と関連講座・講演会のアンケート結果を収録した。



講座風景（第1回）



講座風景（第1回）



講演風景（第2回）



講演風景（第2回）



講演風景（第3回）



講演風景（第3回）



企画展1 展示風景



企画展1 展示解説風景



企画展2 展示風景-1



企画展2 展示風景-2



企画展2 展示解説風景



企画展3 展示風景-1



企画展3 展示風景-2



企画展3 展示解説風景

律令祭祀の基礎知識

金田拓也（新潟市文化スポーツ部歴史文化課）

はじめに

ただいまご紹介がありました新潟市文化スポーツ部歴史文化課の金田と申します。今回の企画展には、企画段階から携わらせていただきましたので、その企画展に向けた中で調べたことについてお話します。

本日の講座ですが、私のところでは律令祭祀とは何かということについてお話します。展示を見ていく上でなかなかわからないこともあるかと思うので、そういった教科書的なお話、基礎的なことを最初にお話させていただき、次の講座で新潟県の実際の祭祀の様相についてお話できればと思っております。よろしくお祈りいたします。

基礎知識、教科書的なお話と言いましたが、歴史学では鎌倉時代の成立が1192年から1185年に変わったというように、学問の進展などによって定説も変わることがあり、今回言っていることが絶対というわけではないことを初めにご了承ください。

本日の内容ですが（スライド1）、まず1番目として古代の祭祀について、最初にそもそも古代とは何かということからお話させていただいて、さらに当時の祭祀についてお話します。2番目に律令的祭祀の様相についてお話させていただきます。最後に、今回は古代の祭祀の話が中心なのですが、では古代、律令的祭祀の前の古墳時代の祭祀とどうつながるのかということなどを、少しお話させていただければと思っております。

1. 古代の祭祀について

まず古代の祭祀についてですが（スライド2）、主に考古学というよりも歴史学や文献史学などの話を中心にさせていただきます。最初に古代についてお話します（スライド3）。今回の企画展のタイトル自体が「古代の祭祀」と銘打たさせていただきました。ただ古代といっても人によって認識に違いがありまして、最初にそれについてお話させていただきます。

古代について 国語辞典的に古代と言いますと、簡単に言えば古い時代、むかし、いにしえ、という

意味があります。必ずしもどの時代かということ限定しておりません。よく古代米という言葉がありますが、ああいうときに使われるものはこういった意味です。

一方で日本の歴史学、主に文献史学の時代区分の意味になりますと、おおよそヨーロッパの時代区分の考え方から、それを日本の時代区分に当てはめており、いわゆる奴隷制の社会構造がある時代のことを古代と指します。要は階級社会が発生した時代になります。そのため、現代では古代は大体弥生時代からムラ長という首長が現れてきて、明確な階級制社会が成立してきたと考えられてきているため、おおむね弥生時代からその後律令制社会へ中世封建制社会に至るまでの間の平安時代までと、大きく考えられております。ただし、この時代区分も実際日本の社会制度がどの時期からできたのかという考え方や、いわゆる封建制社会にいつ変わるのか、要は律令制の社会がいつ崩れていくのかということ、人によっては、時代の切り方というのは変わってきているところです。

それとはまた別に、いわゆる日本の考古学の分野で見ますと、主に飛鳥時代から平安時代というふうにあります。これは日本の文献史学では、いわゆる中世、古代という区分の前が原始時代というふうに一括していて、その次に古代というふうに分けていますが、日本の考古学ですともっと細かく時代が分かれていて、旧石器時代、縄文、弥生、古墳というふうに分かれていく中で、律令制の制度が主に機能していた時代を古代として、飛鳥時代から平安時代というふうに、主に使われています。

ただ、この飛鳥時代についても全国的に見ると、東北などの北のほうや、沖縄などの南のほうですと、必ずしも同じような社会体制になっていなかったもので、それを飛鳥時代と呼ぶかどうかによって違いますが、今の一般的な日本の考古学の時代区分ですと、大体飛鳥時代から平安時代になります。

次に年表で見ると、このような形になっております（スライド4）。先ほど言ったように、飛鳥時代と

いうものは、東北のほうですと終末期古墳という古墳がまだつくられている時代ですので、人によっては古墳時代終末期と言ったりしますが、全国的に見ると、飛鳥のほうに都が移ってきて、律令制社会の基盤が畿内を中心にでき始めた時代のため、大体飛鳥時代から平安時代というものを、古代としています。今回の企画展についてもそうですし、今日お話しする全体の流れも、基本的にはこの飛鳥時代から平安時代を古代として考えてお話させていただきます。

律令について 以上が古代の定義についてです。次に、律令についてお話しします（スライド5）。律令というものは、もともと中国で成立した成文法典、いわゆる実際に文字で起こされた法律、法典になります。日本はそれを学んで、日本独自の律令として、新たにつくったものがあります。律令は、もともと律・令とそれぞれ法典の種類があります。それを合わせて律令と呼んでいます。律というものが、いわゆる刑罰法、現在でいうところの刑法にあたっていて、令というものがそれ以外の法律です。しかし、令は当時の内容で言うと、大体国家の行政機構と、その運用の基本を役人に示した行政法になります。現代ほど法の内容が細分化されていないため、おおまかに言うと、刑法と行政法というものが律令になります。そういった律令が、国の中心として重要な位置を占めていた国家を、律令国家、または律令制国家と呼んでいます。

律令という言葉のほかにも、格式という言葉もあります。いわゆる律令が実際の法典なのに対して、格式の格というものがその修正法になり、式というものがさらに細分化した、現在でいうところの施行令になります。日本では、基本的には律令が定められたのちに、格式もつくられていく形になっている状況です。

日本の律令の歴史を、簡単な年表でまとめてみました（スライド6）。いわゆる中大兄皇子、のちの天智天皇や中臣鎌足などが中心になって起こった大化改新というのが645年ですが、これによって新しい政権が、改革を進めていくわけですが、天智天皇の時代に大津宮に移り、その後その大津宮のある所で近江令というものが制定されます。ただ、この近江令というものは、文章や文面が現存していないため、本当につくられたかどうか定かではありません。その後、飛鳥浄御原宮へと遷都して、天智天皇の2代あとの持統天皇の時代に、都の名前を取った飛鳥浄御

原令というものが施行されます。こちらの飛鳥浄御原令についても、文面が現存しておりませんので、実際どれほどの内容だったかがわかっていません。その後、藤原京に移ったあとの文武天皇の時代に、大宝律令というものが完成します。大宝律令については、大宝律令自体の原文は残っていませんが、その後に出されている令集解で、大体どんな文面があったかということも書いてあります。それまでの近江令や飛鳥浄御原令の時代は、そもそも実在したかも定かではないのですが、まだ律というものが制定されておりませんでした。一方、大宝律令の場合は内容も残っており、律と令、どちらも完成したということで、このときをもって日本は律令が正式に制定されて、律令国家として大成していくと考えられています。その後平城京に遷都しまして、次の養老律令が制定され、施行されていくという流れになっております。

唐と日本の律令について 日本の律令は、中国の律令を遣隋使や遣唐使などから情報を学んで、つくられていきましたが、唐と日本の律令には違いがあります（スライド7）。律については刑法であり、かなり概念的なところも多く含んでいたため、中国と日本で内容は大きく変わりませんでした。一方で令は、実際に行政法になりますので、かなり自分の国に即した内容というものが求められてくるということで、中国の内容とは異なり、日本独自の、日本に即した内容に変わっているところが見られます。一番大きな例としては、神祇官という存在です。次の祭祀にもかかわるお話ですが、中国の令には存在しない祭祀を統括する神祇官が、日本の大宝律令には存在しています。

こちらが、律令で制定されている官制を表に表したものになっています（スライド8）。中央の役人では、太政官というものが一番トップにあります。日本の律令では、それと並ぶ形で、神祇官というものが存在します。要はトップが2官いるというものになっています。実際の行政を行う官僚のほかにも、祭祀を執り行う人がかなり重要視されていたという構成になっています。それは日本の祭祀の状況というか、その当時の現状というものが、そういうものを重視する政策をとっていたと見受けられるわけです。そして、太政官の下は役職や役割ごとに細かく分かれ、さらにそれが地方では、国ごとに役職や役割が分かれています。

いわゆる神祇官というものが、神祇令などに則っ

て祭祀を執り行う役職になります。それとは別に、中務省には暦とか天体とか、そういったものを執り行う部門があります。この部門が行うものが今でいう陰陽道につながるもので、神祇官とはまた別の道教などの影響を受けているものです。

神祇祭祀について 古代にあった祭祀について、まず神祇祭祀というものについてお話します（スライド9）。古代には、古墳時代以前からある日本古来の祭祀や、それとは別に渡来系の人などによって伝わった、いわゆる仏教や道教、そういうさまざまな祭祀があるような状況でした。日本古来の祭祀というものは、神祇とって、神祇祭祀などと呼ばれ、研究の中で分類されています。今ですと神道という言葉がありますが、このころはまだ神道というものが体系的に成立していない時期と考えられておりました。神道ができる前の日本古来の祭祀ということで、神祇という言葉をあてています。神祇というのは、天津神と国津神、天神地祇で神祇という言葉を使っています。この神祇祭祀は、日本古来からの祭祀が律令制によって新たに再編されて、中央集権的な神祇体制として構築されたものです。もともと日本の国々、それぞれの国という言い方もおかしいですが、集団が信仰していた祭祀、神様などを、天皇の権力、体制を支持するために、今の神道の、まさしく天照の子孫である天皇を頂点として、全国一律に宗教体制がまとめられたと考えられています。

伊勢神宮が天照大神がまつられている神社になりますが、祭祀研究の中で伊勢神宮は、昔は国家の中央になるとは考えられないというような研究があったりしますが、この律令制の制定によって、伊勢神宮を頂点として、新たに今につながるような神社形態、神祇祭祀の形態、神道につながるものがつくられたと考えられています。これが、いわゆる律令制の国家体制の1つと考えられているわけです。

先ほど言った、三重県の伊勢神宮です（スライド10右）。こちらが高天原の天津神の中心的な神である天照大神をまつっています。一方でこちらが葦原の中つ国の国津神の代表的な神である大国主命をまつっている、鳥根県の出雲大社になります（スライド10左）。こういった各国々それぞれでまつている神様などをまとめて、伊勢神宮を頂点とした、天皇を頂点とした宗教体制というものを、律令制によって定めて、国家権力の説明につなげていったと、そういう意味で、まさしく日本の律令制においては、こういった祭祀というものが大変重要視されていた

と言えるわけです。

仏教について そういった日本古来からある祭祀の形態とは別に、中国から仏教も伝わります（スライド11）。先ほどお話しなかったのですが、日本の神祇祭祀を再編した理由としては、先ほどの大化改新のお話のように畿内で大きな政変があり、天皇が変わり、新たな天皇と各勢力とのつながりから権力の構造が変わる中で、新しい概念というか、より自分たちの権力を説明できるように再編したというふうに言われています。そういった中で、仏教についても新興の宗教ということで、まさしく新たな宗教として取り入れることで、中央集権的な国家を成立する意味で、利用されたというふうに考えられているわけです。

仏教自体は国家が主導して伝えられました。伝えられたあとは、全国に国分寺、国分尼寺が建てられ、寺院体制が確立されていきます。ただ1つ大きな問題としましては、仏教というのとはもと外来の宗教ですので、神祇祭祀の天皇を頂点とした祭祀の考え方は、当初乖離（かいり）したものにならざるを得なかったわけです。そうすると、天皇を頂点とした権力の構造というものの説明にも不具合が起こります。そういったものを解決するために、いわゆる護法善神や神身離脱などの概念が生まれました。すごく大雑把に言いますが、護法善神というものは、神祇祭祀の神様が寺を守るための神になっているのです。また、神身離脱は、神様が自身の苦悩を開放するために、仏教に帰依したりする考え方になっています。そういったものによって、必ずしも神祇祭祀と仏教祭祀というものが対立するものではなくて、交ざり合っていて、それがその後どんどん進んで、神仏習合の解釈というものに進んでいくという流れになります。神仏習合の解釈が一番進んでいくと、本地垂迹説というようなものになり、すごく簡単に言いますと、神道の神様というものは、実際の仏教の神様が姿を変えただけのものだというような解釈に変わっていきます。そのように、宗教でも考え方が変わるということが起こっていきます。

これが国分寺跡の復元のイラスト、香川県讃岐の国ですね（スライド12）。日本全国各国に、このような国分寺や国分尼寺を国の指導で建てていくわけです。

道教について 仏教自体はインドから伝わったものです。中国には、仏教とは別に中国古来の宗教として、道教があります（スライド13）。道教は、いわ

ゆる中国の民間信仰であり、老子が最初に興したと言われています。それについてもまだ諸説があつてわかっていないのですが、いわゆる土着、民間信仰で呪術的な宗教でした。神仙思想という仙人や神様などの信仰によるものです。この道教については、仏教とは異なり、国家として道教自体を宗教として持ち込むことはしませんでした。それについては、道教についても祭祀形態を持ち込むことによって、神祇祭祀等の内容に不具合を生じることを恐れたという説もあります。実際として道教が1つの宗教として持ち込まれることはありませんでした。しかし、当時は渡来系の技術者が大変多く来て、古墳時代中期のカマドのように、技術が持ち込まれている中で、この道教的な信仰や祭祀行為自体も渡来系の人を中心に伝わり、さらに日本に着いた渡来系氏族の人を中心に、民間の信仰として広がっています。そういった信仰として広まる中で、道教の道具や実際の祭祀の方法、そういったものが、神祇祭祀、日本古来の祭祀のほうにも影響を与えていきます。律令制祭祀というものの中には道教的な祭祀、要は呪術の方法など、そういったものがすべからず影響を与えていて、祭祀具や祭祀の方法を見ると、さらに道教的な要素が見受けられるというようなものになっています。

律令的な祭祀について このように律令制の施行によって、国家主導の祭祀形態が整備されていきました(スライド14)。国家主導の祭祀形態が整備されていくのは、まさしく国家の権力を強くしていくために、祭祀の面でも整理されたということになります。考古学では、このあとお話ししますが、古代の都城などでも、大宝令の中の神祇令および格式やそのあとに出された延喜式などの律令の祭祀と比定できる遺物が見つかっています。これらの遺物が古墳時代以前の祭祀と大きく異なることから、律令的な祭祀として評価されてきました。

2. 律令的祭祀の様相

律令的な祭祀の様相について 次に、考古学の面での律令的な祭祀についてお話しします(スライド15)。律令的な祭祀、律令祭祀または、律令的祭祀などと言うのですが、その研究については国立歴史民俗博物館が1985年に出した報告の中で大きな画期がありました(スライド16)。金子裕之氏が都城の出土例を検討して、大宝令の神祇令に規定されている国家的な祭祀というものを、律令的な祭祀と定義しま

した。検討によって、祭祀行為の中での大祓などで使用する祭祀具を比定して、その祭祀具というものが、それまで言われていた古墳時代の祭祀の道具と異なるということで、律令的な祭祀というふうに定義しています。律令的な祭祀具には、木製模造品(形代)や人面墨書土器・土馬・模型カマド・金属製祭祀具があげられています。

祓について 祓について若干説明します(スライド17)。祓というのは律令的な神祇祭祀で重要な考えでして、神祇祭祀ですと、罪とか穢、病氣・災厄などをはらい除くことが重要だと考えられておりました。この考えというのは道教的な考え方でもあるのですが、そういったことをはらい除くことを、祓というふうに呼んでいました。この祓の儀式を行う場所というものを、祓所(はらえど)や祓所(はらえしよ)というふうに呼んでいたと考えられています。その中でも大祓というものは、神祇令や延喜式に規定されておりまして、6月と12月の晦日(つごもり)、要は月末ですね。晦日(みそか)とも言いますが、晦日(つごもり)などに行った儀礼です。月の末を晦日(つごもり)、晦日(みそか)と言うので、年の終わりをその大きい版ということで、大みそかというふうに言っています。この大祓や祓のときに、律令的祭祀具が用いられたと考えられているわけです。

律令的祭祀具について 実際にその道具を見ていくと、こちらが平城京で出土した木製の模造品、木製の人形代です(スライド18左)。模造品は、考古学の定義では古墳時代などの律令祭祀以前の祭祀から使われた祭祀具の一つです。材料は石製や金属製などがあり、その中の木製のものが木製模造品となります。一方で形代という言葉は、人の代わりになったものや馬の代わりのものであるという意味になっていて、若干定義が異なります。考古学の研究者の中でも、前の時代とのつながりで考えている人は木製模造品と言ったり、律令祭祀だけで考えると形代という呼称を使っていたり、なかなか統一できていません。私も、形代と呼んだり模造品と呼んだり、混同して申し訳ないのですが、一応そういう違いがあります。

先ほど言ったように、木製模造品の人形とか、人形代とかというような模造品がこちらです(スライド18中央上)。実際に人の全身を模したものが多くあります。顔が墨で書かれたりしています。それと同じようなものですが、今度は銅製の形代(模造品)

です（スライド18中央下）。畿内や、あとでお話しますが、沖ノ島では、金属製のものも見つかっていません。

藤原京では、律令の形代（木製模造品）は細かく分けるといくつも分かれますが、大きく見ると数種類に分けられます（スライド18右）。主要なものは、まず、先ほど言ったように人形のもの、馬形や鳥形のもの、刀形のもの、舟形のもの、そういったものが一般的には多く見つかっております。それらは、それぞれ祭祀の内容で分けて使われていると考えていまして、人形についてはそれぞれ自分の身代わりに、息をかけることによって穢れとかそういった自分の汚れ、汚れというおかしいのですが、神道の考え方ですと、災いなどそういったものを移し、川に流すことによって、祓というか、穢れを流したと考えられています。馬形という馬の形代というものは、そういった人形代が馬に乗って一緒に流れるのを手伝うような意味や、船についても、そういった穢れを乗せて流す、人形代が乗って流れていくような考え方ということで、まさしく祓の場で多く見つかるものになります。刀形についても、邪気を祓うなどそういった意味合いを持っているというふうに考えられています。

斎串というものもあります（スライド19左上）。この斎串についても、地面に刺して囲って、結界などをはることによって、まさしく汚れなどを入らないように防ぐといった意味合いで打たれています。また人面土器や人面墨書土器と呼ばれるものですね。こちらが、土器に墨で人の顔が書いてあるものになります（スライド19左下）。この書いてあるものについては、なかなか文献等にも出てこないのわかりませんが、中国やそちらのほうの神の顔を書いていたのではないかと考えられています。こちらについても、壺の中に人が息を吹きかけたり、そういうことによって自分の穢れを中に入れて、紙のようなものでふたをして封じ込めて川に流して、邪気を祓うというようなことをしていたと言われております。こちらについても、かなり道教のほうで見られる祭祀の形態ではないかと言われているわけです。

あと、全国で多く見つかるのが、この土の馬、土馬です（スライド19右上）。土馬については、先ほど言ったように、馬の形代のほうでもお話したのですが、この馬に形代、穢れを持った人形が乗って、邪気と一緒に流れていって邪気を逃がしてくれる、そういったふうな意味合いで考えられるものもありま

す。ただ一方で、土馬については古墳時代から見ついているものでして、人によっては律令的な考えの前に、そもそも水辺の祭祀において多く見つかることから、日常的なそういった穢れを祓う意味合い以外にも宗教的な意味があるのではないかというふうに言われています。しかし、それについてもまだよくわかっていないという状況です。

模型カマドについては、こちらも道教のほうでカマド神というような考え方がありまして、穢れを祓ったり、そういった道教的な思想が入ってきたことによって、律令祭祀の道具として使用されたのではないかというふうに考えられています（スライド19右下）。

これは、祭祀具の使用状況を想像したような絵になっております（スライド20）。先ほど言ったように、このように人面墨書土器に自分の息を吹きかけて、その中に穢れを封じ込めて流しています。また、この絵では形代を流しています。顔など描いて、それをなでて自分の代わりに汚れを持ってどこかに流していくということをしているわけです。そういった想像、復元ができる理由としましては、長岡京で発掘された大きな溝などの水路の跡に、いくつも人面墨書土器や形代（木製模造品）などが出土していることからです（スライド20右）。このことから川で祓って流した状況というものがイラストのように復元できたということになります。

3. 古墳時代の祭祀と律令的祭祀について

律令祭祀についてはお話しましたが、それとは別に、それ以前の祭祀との関係について最後にお話させていただきます（スライド22）。律令祭祀とそれ以前の祭祀との関係については、近年國學院大學の笹生衛氏の研究があります。こちらの研究成果を紹介する形でお話いたします。

古墳時代の祭祀について 古墳時代の祭祀は、昔の研究ですと、石製模造品というものが古墳時代中期にかなり多く見つかるような状況でしたので、この模造品を用いて祭祀を行っていたという考えが、長らく言われていました（スライド23）。しかし、最新の研究で見ますと、鉄製品や木製品など多彩な道具を用いつつ、その中で祭祀専用である模造品と呼ばれる祭祀具も用いて祭祀を行ったと言われております。国家祭祀や地域首長、まさしく地域の一番力を持った人たちのような祭祀ほど、権力、力がありますので、鉄製品や木製品を多数使った祭祀というも

のが行われたと考えられています。それが地域の一般の集落になると、そういった貴重なものが使えなくて、模造品だけ、簡単に作成できる祭祀具だけ、そういったものだけが残ってしまうというような状況というふうに考えられています。

祭祀の立地については、祭祀は場所というものが大変重要になってきます。まさしく、何のためにやるのかというのがあるのですが、交通の安全を守ったり、水辺の川のはん濫を防いだり、水の恵みを感謝してなど、そういった意味合いで言われますので、まさしく立地というのが重要になってきます。古墳時代の祭祀では、水辺付近に立地するものや、交通の要所に立地するもの、また、普段の生活である集落内の祭祀というものが、主要なものとしてあげられます。

こちらが、地域首長が行っていたと考えられるような祭祀になります(スライド23左上)。大阪府の小阪合遺跡では、このような鉄製品(スライド23左下)などのほかに、土器(スライド23右下)、これは石製模造品という鏡を模した道具ですが(スライド23右上)、そういったものが見つかっています。こういった祭祀具などを複合的に使いながら、祭祀をしていたと考えられております。

石製模造品についてもう少しお話をすると、模造品というものは、こちら左側は鉄製の道具なのですが、実際の道具を祭祀専用というか、実際に使わないで古墳に入れて、死者が死んだときに申ったり、おまつりの道具として使うためだけに、実際の使用を想定しないものとして、実用品の形を模してつくったものになります(スライド24)。古墳時代では、先ほどお話しした木製模造品や石製模造品のほかにも、土製模造品というものも見つかっています(スライド25)。このように、いろんな材料によって模造品というものがつくられていました。古墳時代の土製模造品では、人形もありますが、これは律令制の祭祀で見ていただいた形とだいぶ形が違うのがわかりいただけると思います。そういった律令制の形代というものについては、これとはまた別の流れで、中国にあった人を模した形代というものが、7世紀前後に日本に伝わって用いられたというふうに考えられていて、古墳時代のころの人形とは、また違った流れというふうに考えられているわけです。

古墳時代と律令的祭祀具 古墳時代と律令的祭祀具についてですが(スライド26)、先ほどもお話させていただきましたが、律令的祭祀具には、木製の形

代(木製模造品)や人面墨書土器、土馬、模型カマド、金属製祭祀具があげられます。その中で、木製模造品(形代)や金属製祭祀具、土馬などについては、律令制が入ってすぐ使われたというよりも、古墳時代のころからすでに渡来系の人などによって、馬が伝えられたりしており、そういった中で古墳時代の後期ごろからすでにその祖形となるもの、さらに木製模造品など言えば、古墳時代中期までさかのぼるような、そういった古墳時代からその祖形や系譜がたどれるというものが見つかっています。

古墳時代の祭祀から律令祭祀へ 古墳時代の祭祀具には、武器・武具、農具・工具、鉄素材、銅鏡、玉製品、紡績具、楽器、模造品、器材類、容器類などが実際に出土した遺物からあげられます(スライド27)。これらは基本的には、古墳の副葬品という死者を弔うのに供えたものと大きな違いはなく、まさしく古墳の副葬品が基礎となって、それが祭祀の道具として、そのまま引き継がれたというふうに考えられているわけです。さらに、律令祭祀における、文献資料で確認できる神への捧げものである幣帛(みてぐら)、幣帛(へいはく)とも言いますが、幣帛(へいはく)を見ると、武器・武具・農具・工具・馬具・紡績具・布帛類、布などの、多様なものであったということがわかります。基本的には大体内容が一緒ということがわかりいただけると思います。そういったことから、この律令祭祀における祈年祭などで使われる神にまつるための幣帛につながる基本的な組み合わせというものは5世紀、まさしく古墳時代には成立してしまっていて、その後、時代とともに種類が増えたり、金銅製になったりと、材料が変わって装飾性が高まることによって完成したというふうに、現在のところは考えられているわけです。

人の形代については律令期からという話をしました。先ほど刀形の話をしたのですが、古墳時代ですとそういった刀を模したものなどの木製模造品も多く見つかっていて、首長の祭祀などでも使われていたと考えられています(スライド28)。このような律令祭祀につながるものが、すでに古墳時代に道具として出て来始めていて、そういったものが律令祭祀で再編されて、新しく形づくられたというふうに考えられているわけです。だから、律令制になったので、新しい技術をもって祭祀をパッと切り替えたわけではなく、新しい技術も導入しつつ、古来の祭祀の道具を再編していった成立したのが律令制祭祀というふうに現在は考えられています。木製模造品につい

ては、新潟県では佐渡市の竹田沖遺跡で剣形などが見つかっています。

沖ノ島について そういった国家祭祀の移り変わりという、祭祀具の変化を見ていく上で非常に参考になるのが、福岡県の沖ノ島にあります(スライド29)。世界遺産に認定されましたが、沖ノ島というものは、福岡県の北というか、九州と韓国の間にはさまれた離島になっておりまして、宗像三神をまつている場所になります。神聖な場所ということで、人があまり立ち入らない場所です。最近では女人禁制の話とか、世界からも取り上げられたりしていますが、人がほとんど立ち入らない場所です。さらに、古墳時代から祭祀というものがすでに行われておりまして、まさしく当時の祭祀の状況を、色濃く現在まで伝えてくれるような場所になっています。

沖ノ島がなぜ、国家の祭祀として重要視されたのかを考えていく上で重要なのが、沖ノ島で古墳時代の石製模造品が見つかっていることです。韓国の竹幕洞遺跡でも石製模造品が見つかっていて、まさしく韓国と九州の間を結ぶ海上交通ルートとして沖ノ島が重要であったとか、海上の安全を願う祭祀の場とか、そういった意味で重要だったために、国家祭祀の場所として使われたというふうに考えられているわけです(スライド30)。

沖ノ島の祭祀は、このように沖ノ島の中でもいくつかの場所に分かれております(スライド31)。調査が進んでいく中で、祭祀の形態というものが岩上、岩陰、半岩陰、半露天、露天というふうに変化していったというふうに考えられています。それがまさしく古い時代から新しい時代へ移り変わる中で、祭祀の形態、方法なども変わっていったというふうに考えられているわけです。

こちらが古墳時代中期ごろの岩上祭祀が行われた場所で、そういった場所ではこういった石で結界など、祭壇をつくっていました(スライド32左)。こういった祭祀の場で、石製模造品なども見つかっているわけですが、さらに1号遺跡という新しい時代、律令制に近い時代の祭祀の場では、こういった滑石の祭具が見つかっています(スライド32右)。石製模造品も滑石ですが、同じ滑石の素材を使いつつ、古代の律令制につながるような馬の形だとか、舟の形だとか、今度はそういったものをつくるような祭祀に変わっていくということです。まさしく時代の変化で祭祀具が変化していく様子、旧来の要素も交じりつつ変化していく様子というものが、沖ノ島の出

土した遺物からは見受けられるというわけです。まさしく国家祭祀が成立していく中での、祭祀の変化というものを追えるということで、沖ノ島が相当重要な場所ということがおわかりいただけるかと思います。こういった簡単な滑石以外にも沖ノ島ですと、金銅製のもので、高機や紡績の道具などあって、簡易なものから貴重なものまで見つかっており、まさしく国家祭祀の祭祀場として評価できるような場所になっているわけです。

おわりに

最後に、律令の祭祀の基礎知識とまではいかないですが、簡単な内容について、私のほうでお話させていただきました。かなり突拍子もない話に飛んだりして、お聞き苦しいところもあったかと思いますが、これで私のほうの発表を終わらせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

平成30年度 史跡古跡八幡山 弥生の丘歴史館
企画展1「古代の祭祀」関連講座「鏡後平野の古代律令祭祀の様相と歴史」
平成30年6月27日
於 新潟市文化財センター

律令祭祀の基礎知識

新潟市文化スポーツ部歴史文化課 金田拓也

本日の内容

1. 古代の祭祀について
2. 律令的祭祀の様相
3. 古墳時代の祭祀と律令的祭祀について

スライド1

1. 古代の祭祀について

スライド2

古代について

- 古代という言葉の意味や時代区分にはさまざまのがあります。
- 一般的な意味：
古い時代。むかし。いにしえ。
『日本国語大辞典 第二版』〔小学館2006〕
- 日本の歴史学の時代区分の意味：
弥生時代から平安時代(論者により異なる)
『國史大辭典』〔吉川弘文館1985〕
- 日本の考古学の時代区分の意味：
飛鳥時代から平安時代

スライド3

時代名称	日本・東アジアのおもなできごと
古墳時代	前期 奈良県橿原市に首長古墳が築造される
	中期 古墳八幡山古墳が築造される
	後期 大塚前寺古墳(佐仁徳天皇皇陵)が築造される
飛鳥時代(古墳時代終末期)	592 推古天皇即位(飛鳥浄御原宮) 593 聖德太子・推古天皇の摂政に 647 万葉集の成る 648 新羅の滅亡 660 百濟が滅びる 668 新羅が唐・新羅連合に敗北 701 大嘗神の制定 710 平城京に遷都、律令に都を定める 712 古事記編纂、継体天皇の崩逝が現在とほぼ同じになる 743 聖德太子私財法が制定される 784 藤原京に遷都 784 高市・空海が唐にわたる 804 高市が天台宗を伝える 806 高市が養老令を伝える 894 遷都後廃止 990 宋がおこる
奈良時代	710 奈良に都が置かれる
平安時代	1016 藤原道長が摂政になる 1086 院政の開始(白河上皇) 1185 鎌倉幕府の成立で平安が滅びる 1192 源頼朝が鎌倉幕府をひらく
鎌倉時代	

- 奈良時代：奈良に都が置かれた710年～794年までの間。
- 平安時代：京都の平安京に都が置かれてから鎌倉幕府が成立するまでの間
飛鳥時代・奈良時代・平安時代(古代)を対象とする

時代とおもなできごと

スライド4

律令について

- 日本の律令は中国の成文法典を学んで、制定された法典です。
律：刑罰法
令：国家の行政機構とその運用の基本を役人に示した行政法
- 律令が国の中心として重要な位置を占めていた国家を律令(制)国家と呼びます。

スライド5

日本の律令の歴史

年代	天皇	できごと
645	孝徳	大化改新
667	(天智)	大津宮へ遷都
668		近江令を制定
670	天智	庚午年籍をつくる
672		飛鳥浄御原宮へ遷都
684	天武	八色の姓制定
689	持統	飛鳥浄御原宮施行
694		藤原京へ遷都
701	文武	大宝律令完成
710		平城京に遷都
718	元正	藤原不比等ら、養老律令を撰定
743	聖武	墨田永年私財法
757	孝謙	養老律令を施行

『もういちど読む山川日本史』(山川出版社2009)を基に作成

スライド6

唐と日本の律令について

- 日本の律令は中国(唐など)の律令を基に作られました。
- 律については中国と日本で、内容に大きな違いはありませんでした。
- 一方、令では中国の内容と異なり、日本に即した内容になっています。
例：神祇官の存在

スライド7

『もういちど読む山川日本史』(山川出版社2009)

『漢語が語る古代のい』(新潟県教育委員会)

スライド8

神祇祭祀について

- 古代には日本古来からある祭祀や中国などから伝わったさまざまな祭祀があります。
- 日本古来の祭祀は、神祇祭祀と呼ばれます。この神祇祭祀が律令により、再編され、中央集権的神祇体制として構築されました。
- これが律令制の国家祭祀の1つと考えられます。

9

スライド9



鳥根県出雲大社正殿（左）及び三重県伊勢神宮正殿（右）

写真の出典：大阪府立近つ飛鳥博物館2012『王と酋長の神まつり』
10

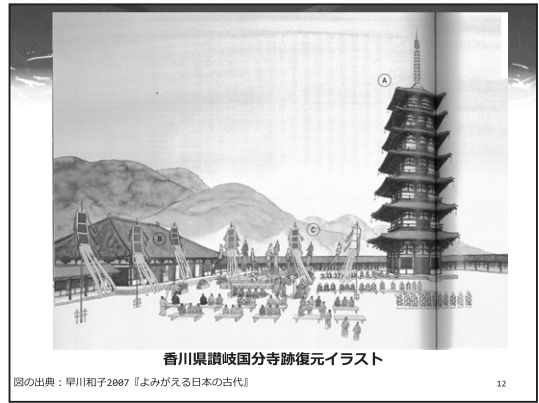
スライド10

仏教について

- 神祇とは別に中国から仏教が伝わります。
- 仏教は国家が主導して伝えられ、全国に国分寺・国分尼寺が造られる寺院体制が確立されます。
- 仏教が広まる一方で、神祇と仏教の関係が大きな問題となりました。
そこで、護法善神や神身離脱などの概念が生まれ、神仏習合の解釈が進みました。

11

スライド11



香川県讃岐国分寺跡復元イラスト

図の出典：早川和子2007『よみがえる日本の古代』
12

スライド12

道教について

- 仏教とは異なり、道教は道教自体が一つの教えとして伝わりませんでした。
- しかし、道教的な信仰や祭祀行為は渡来系氏族を中心に民間信仰として広まり、また神祇祭祀の祭祀具などに影響を与えました。
- このように道教的な祭祀は律令制の祭祀において、祭祀具や祭祀の方法などに深く影響を与えています。

13

スライド13

律令的な祭祀について

- このように律令制の施行により、国家主導の祭祀形態が整備されていきました。
- 考古学でも古代の都城などで、この律令（大宝令）および格式（延喜式等）の祭祀と比定できる遺物が見つかっています。
- これらの遺物が古墳時代以前の祭祀と大きく異なることから、律令的な祭祀として評価されてきました。

14

スライド14

2. 律令的祭祀の様相

15

スライド15

律令的な祭祀の様相について

- 金子裕之氏は、大宝令の神祇式（神祇令）に規定された国家的祭祀を律令的祭祀とし、平城京の出土事例を検討することで、大被などで使用する祭祀具を比定し、古墳時代の祭祀と律令的な祭祀は異なる祭祀と考えました。
- 律令的祭祀具には、木製模造品（形代）・人面墨書土器・土馬・模型カマド・金属製祭祀具があげられます。

16

スライド16

祓について

- 祓は罪・穢・病氣・災厄などをはらい除くことです。この祓の儀式を行う場所を祓所と呼びました。
- 大祓は神祇令や延喜式に規定された6月と12月の晦日などに行った儀礼です。
- この大祓や祓の時に、律令的祭祀具が用いられたと考えられています。

17

スライド17

平城京出土木製・金属製形代（左）及び藤原京出土木製形代

写真の出典：左：朝日新聞大阪本社企画部1989『平城京展』
右：奈良県立橿原考古学研究所付属博物館1997『大和の考古学』

18

スライド18

平城京出土木製形代及び人面墨書土器、土馬、模型カマド

写真の出典：朝日新聞大阪本社企画部1989『平城京展』

19

スライド19

祭祀具使用状況の復元

図・写真の出典：早川和子2007『よみがえる日本の古代』

20

スライド20

3. 古墳時代の祭祀と律令的祭祀について

21

スライド21

古墳時代の祭祀について

- 古墳時代の祭祀では鉄製品や木製品などの多彩な道具のほか、模造品と呼ばれる祭祀具が用いられていたと考えられています。国家祭祀や地域首長に関わる祭祀ほど多くの道具が用いられたと考えられています。
- また、祭祀はその立地が深く関わっており、水辺付近に立地するもの、交通の要所などに立地するもの、集落内での祭祀場などが主要なものとして挙げられます。

22

スライド22

大阪府小阪合遺跡祭祀遺構及び祭祀遺物

写真の出典：大阪府立近つ飛鳥博物館2012『王と首長の神まつり』

23

スライド23

大阪府紫金山古墳出土鉄製品と三重県石山古墳出土石製模造品

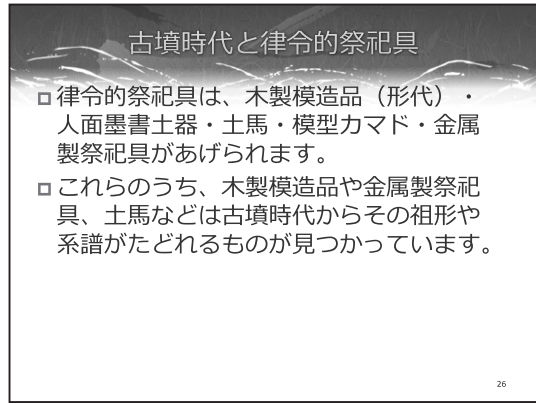
写真の出典：京都大学文学部博物館1993『紫金山古墳と石山古墳』

24

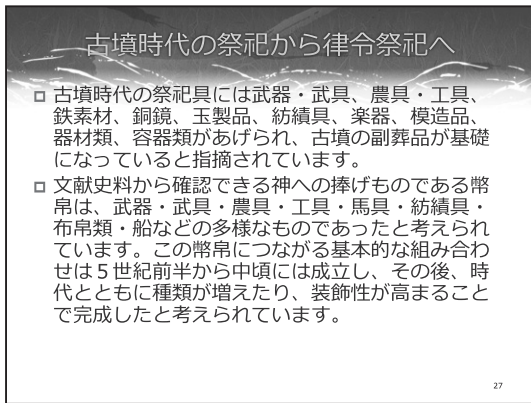
スライド24



スライド25



スライド26



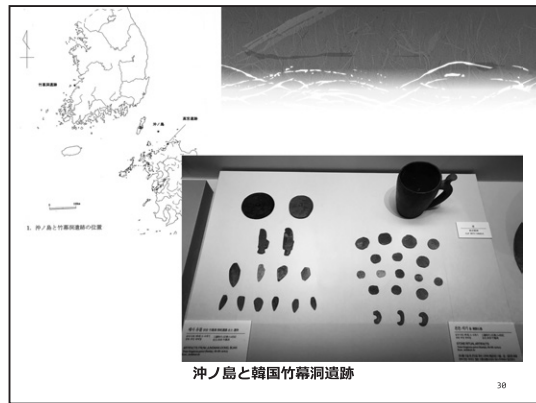
スライド27



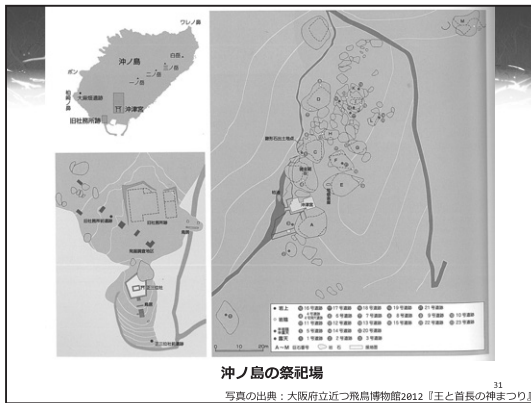
スライド28



スライド29



スライド30



スライド31



スライド32

図・写真の出典

スライド8左：山川出版社2009『もういちど読む山川日本史』

スライド8右：新潟県教育委員会2012『遺跡が語る古代のいがた』

スライド10、24、25、28、29、31、32：大阪府立近つ飛鳥博物館2012『王と首長の神まつり』

スライド12、20：早川和子2007『よみがえる日本の古代』

スライド18左、19：朝日新聞大阪本社企画部1989『平城京展』

スライド18右：奈良県立橿原考古学研究所付属博物館1997『大和の考古学』

越後平野における古代の祭祀関連遺跡とその様相

相田泰臣（新潟市文化スポーツ部歴史文化課文化財センター）

はじめに

新潟市文化財センターの相田といいます。よろしくお願いたします。私は後半ということで、新潟市を中心とした越後平野の古代の祭祀遺跡について、実際の遺跡の状況などを見ていきたいと考えております。

今回の講演会は、文化財センターで行っているのですが、企画展自体は秋葉区の古津八幡山遺跡という国の史跡の麓にある弥生の丘展示館というところで行っています。本来でしたら実際に展示品などを見ながら説明させていただくとより良かったのですが、向こうは講演場所がないということでこちらのほうでさせていただいております。

本日の講座の構成ですが、最初に越後平野における古墳時代の主な祭祀関連遺跡を見ていきたいと思っております(スライド1)。そのあと2つ目に越後平野における飛鳥時代の祭祀関連遺跡を、3つ目に越後平野における奈良・平安時代の主な祭祀関連遺跡ということで、時代順に見ていきたいと考えております。

1. 越後平野における古墳時代の主な祭祀関連遺跡

それでは最初に越後平野における古墳時代の主な祭祀関連遺跡を見ていきたいと思っております。こちらの表ですけれど、これは新潟県内の主な古墳を地域別に並べた表でして、赤く塗ってあるのが竪穴系と呼ばれる埋葬施設を持つ古墳、白抜きが横穴系の埋葬施設で、古墳の横に入口があり通路を設けて奥に棺などを納める形態の古墳です(スライド3)。左端にはおおむねの年代が西暦で入れてあります。上から下に行くにつれて新しい年代になります。先ほど金田のほうからも説明がありましたけれど、一般的に古墳時代は西暦の300年より少し前くらいから600年くらいまでが該当します。また、古墳時代は古墳時代の前期・中期・後期と3時期に分けるのが一般的で、前期が西暦300年代くらい、中期が西暦400年代くらい、後期が西暦500年代くらいということになります。そのあと、西暦の600年より少し前くらいから飛鳥時代と呼んだりしますが、人によっては古墳時

代の終末期と呼ぶ方もいます。表を見ていただいてもわかりますように、飛鳥時代に入ってもまだ古墳はつくられ続けておりますので、その古墳を重要視する研究者の方は古墳時代の終末期と呼んだりもするということになります。

新潟県もそうなのですが、飛鳥時代に入ると古墳はつくられ続けるのですが、前方後円墳と呼ばれる鍵の穴のような形の古墳は全国的につくられなくなります。新潟県でも古墳時代の後期、西暦500年代の半ばくらいにつくられたと考えられている前方後円墳の上越市菅原31号墳がつくられたのを最後に、それ以降の前方後円墳は見つかっていないということになります。ですので、飛鳥時代になると古墳はあるのですが前方後円墳はつくられなくなるという大きな変化があります。

次に古墳時代の祭祀関連遺跡について見ていきたいと思っております。これは御井戸遺跡という遺跡で、旧巻町の角田山麓にある遺跡です(スライド4左)。この矢印のところに山谷古墳という前期古墳があり、その山谷古墳に関わる集落だろうと考えられています。

この写真の範囲から少し外れますが、右側には山へと向かう道路があり、真っすぐ行くとじょんのび館という施設があって、その先をさらに行き角田山を越えると日本海が広がっています。この御井戸遺跡で2002年に調査をした際、矢印のところになりますが、このように古墳時代の前期、ちょうど山谷古墳がつくられたのと同じくらいの時期のおびただし数の土器が見つかっています(スライド4右)。

御井戸遺跡ですが、集落の中心はこの破線のところにして、この中で竪穴住居や掘立柱建物が見つかってきます(スライド4左)。ちょうどその集落の中心部と古墳とを結ぶ位置で、このようなおびただし数の土器が帯状に見つかったということで、集落から山谷古墳までの通路が存在し、その通路に沿って何らかの飲食行為を伴う祭祀行為をした痕跡ではないかと推測しています。

これは新潟市の北区にある葛塚遺跡でして、線刻

の人物画土器が出土しています(スライド5)。焼き物の外側はこのように赤く色を塗ってあり、絵が線刻で土器の外側に描かれていました。この線刻画については諸説あるのですが、腰に手を回して、スカート状のような衣装を身に付け、顔が鳥のように見えるという意見があります(スライド6)。このような線刻土器が出ております。これは想像のイラストですが、このような鳥の衣装をまとして祭祀を行った可能性を示す資料になります(スライド7)。

あと先ほども出てきましたが前方後円墳の菖蒲塚古墳、古墳時代の前期の終わりくらいの時期の古墳になりますけれど、これが真上から撮った写真です(スライド8左)。ここに円丘があり、細長い長方形の高まりがついた前方後円の形をした古墳になります。この古墳からは副葬品としてこのようなヒスイの勾玉ですとか管玉が7点、そしてだ龍鏡と呼んでおります大型の鏡も出土しています(スライド8右)。ちなみに管玉の一部には鉄のサビが付着しており、鉄製品も一緒にあったらと考えられています。古墳の副葬品、埋葬施設で亡くなった方に添えたお供え物ですが、このだ龍鏡の分布を見ますと図の1番が菖蒲塚古墳になります(スライド9)。そして金田の話の中にも出てきましたが、2番の沖ノ島の祭祀遺跡ではこのだ龍鏡が祭祀具として使われております。菖蒲塚古墳は古墳時代前期の終わりくらいの時期の古墳ですが、そのくらいの時期には古墳の副葬品と祭祀具とで共通する場合が多かったということが、この菖蒲塚古墳のだ龍鏡からうかがえるということになります。

これは最近円筒埴輪が見つかった新潟市東区にある牡丹山諏訪神社古墳です(スライド10上)。菖蒲塚古墳よりも若干新しい時期、古墳時代の中期前半くらいの古墳ですが、管玉や土でつくられた土製の勾玉などが見つかっております(スライド10下)。

そしてまた御井戸遺跡ですが、先ほどは山谷古墳をつくった時期と同じくらいの土器が非常に多く出土していましたが、さらに時代が新しくなって牡丹山諏訪神社古墳よりも若干新しい時期、西暦の400年代の半ばから後半になりますと、金田の話の中にも出てきた石製模造品と呼ばれる石で剣や玉などを模造した品物が出土しています。石製模造品が出土した位置ですが、ここに谷があり、その谷の縁から石製模造品が見つかっております(スライド11)。これがその石製模造品ですが、鏡形や剣形、そ

れと勾玉の形をした模造品が出土しています(スライド12)。古墳時代の中期という時期になると、このような石製模造品の祭祀具が出てくるということが新潟県でも確認できるということになります。ちなみにこれは想像のイラストですが、御井戸遺跡の石製模造品はいずれも穴があいているので、このように石の模造品を木に吊るして使用していたのかもしれない(スライド13)。

あと古墳時代の祭祀遺物では、阿賀野市の腰廻遺跡でもこういった石製模造品ですとか手持勾玉、土製の勾玉や鏡形の土製品、それと金田の話の中にも出てきましたけれど、ミニチュア土器や手づくね土器など土で簡単な模造をした土器などが見つかっております(スライド14)。これらは古墳時代の後期と呼んでいる時期が中心の資料になります。

2. 越後平野における飛鳥時代の主な祭祀関連遺跡

続いて古墳時代のあとの飛鳥時代の主な祭祀関連遺跡について見ていきたいと思います。

飛鳥時代ですが、おおむね7世紀、600年代の時期となります。新潟市内はもとより新潟県内では遺跡数が少ない、遺跡があまり見つからない時期と言えます。新潟県では飛鳥時代の646年には淳足柵が、その翌年には磐舟柵がつくられたことが文献に記載されているなど非常に注目される時期ではありますが、県内においては遺跡数が非常に少ない時期となっています。その中で、秋葉区にある大沢谷内遺跡という遺跡、それと田上町になりますが行屋崎遺跡という遺跡で7世紀の半ば以降の遺構や遺物が見つかっております(スライド16・17)。

大沢谷内遺跡 こちらは大沢谷内遺跡の7世紀以降の土器を年代順に並べたものです(スライド18)。出土した土器などから遺跡の年代がわかるのですが、大沢谷内遺跡は一番古いものでは縄文時代の土器も見つかっております。そのあとはあまりはっきりしなくなり、7世紀後半から再びはっきりとしてくるというような遺跡であります。7世紀後半からまた再び集落が活発になり10世紀、平安時代まで続く遺跡になります。

これは飛鳥時代の資料で円面硯と呼ばれている丸い形の硯になります(スライド19左上)。こちらは九九木簡と呼ばれている、算数の九九を練習した木簡です(スライド19右)。このような硯や九九木簡などから非常に有力な人物がいた集落だろうと考えられております。他にも鉄づくりに関連する資料であ

る炉の中に空気を入れるためのフイゴの羽口や、紡錘車と呼んでいる糸をつむぐ道具なども見つかっています(スライド20左)。これらの資料からは、役所的な機能を持ち、官人、役人の存在が考えられます。

また、大沢谷内遺跡では木製品の未成品なども出ているので、木の加工なども行っていたんだろうと言われています(スライド21上)。

また、こちらは縄文時代の資料になりますけれど、この遺跡では縄文時代にアスファルトが非常に盛んに使われています(スライド22)。飛鳥時代に該当するアスファルトは今のところ見つかりませんが、奈良・平安時代や鎌倉時代にもアスファルトを使用しているので、飛鳥時代にも縄文時代や奈良・平安時代と同じようにアスファルトを利用していたと考えています。

このような資料などから大沢谷内遺跡は役所的な遺跡と考えています。大沢谷内遺跡ではここに大きな谷がありまして、その谷の縁辺部で祭祀遺構、遺物が見つかっています(スライド23)。少し見づらくて申し訳ありませんが、上が7世紀後半、飛鳥時代後半の遺構の平面図で、下が8世紀代、奈良時代が中心となりますが、その時期の遺構の平面図です(スライド24)。遺跡の南側に先ほど写真で見ていただいた大きな谷があり、その谷の縁辺部、色が塗ってある範囲で祭祀関係の遺物が見つかっています。川辺の祭祀の痕跡です。

これはSX945という名称がついていますが、SXというのは性格が不明な遺構に対してつけられていて、そういったSX945という範囲の中でこのように祭祀遺物がまともに出土しています(スライド25)。祭祀具を見ますと、先ほどの金田の話の中でもあった律令的祭祀具の1つである斎串が出土していたり(スライド26)、鏃形の木製品も見つかったりしています(スライド27)。

これらは須恵器の杯と呼んでいるお椀で、ほぼ完全な形で正位に置かれた状態で出土しました(スライド28下段)。こちらは高杯と呼んでいる脚のついたお椀ですが、その脚の部分だけが見つかっていて、上の部分を意図的に壊している可能性があります(スライド28中段左)。このように大沢谷内遺跡では祭祀の際に土器を使用していたようです。

また、同じようにこの谷の斜面から出た飛鳥時代の遺物ですけれど、真ん中に穴のある円盤形の土製品ですとか、先ほど出土状況の写真がありました鏃形の木製品や斎串、あとは舟形の木製品も出土して

います(スライド29)。

これはSX945の土製有孔円盤と斎串の出土状況の図ですけど、ある程度のまとまりを持って出土していることがわかります(スライド30)。土製の有孔円盤には穴があいているので何かを刺して使用したと推測されます。こちらが想像のイラストになります(スライド31)。

行屋崎遺跡 次に同じく7世紀後半の遺跡で、大沢谷内遺跡の近くにある田上町の行屋崎遺跡を見ていきます。この遺跡では調査区の南端に川跡があり、その川の縁辺部から非常に大量の木製品が出土しています(スライド32)。これはその調査風景です(スライド33)。スライドの左側が南で川跡となります。その川の縁辺部で大量の木製品などの遺物が出ています。これは弓の出土状況です(スライド34)。あと鈴も出土しています(スライド35)。

この表は古墳時代と飛鳥・奈良時代と奈良・平安時代というふうに、上から下に時代が新しくなりまして、どの遺跡でどの時期にどういった遺物が出ているのかを比較した表になります(スライド36)。小さくて申し訳ありませんが、黄色で囲ったところが大沢谷内遺跡で、紫色で囲ったところが行屋崎遺跡になります。沖ノ島の祭祀遺跡についても入れてあります。例えばここは石製模造品の列ですが、古墳時代にはそういった石の模造品が一定量出ていますが、飛鳥時代以降減少し、かわりに木を使った形代ですとか、そういったものが多くなるということがこの表からわかります。

大沢谷内遺跡と行屋崎遺跡を比較してみると、どちらの遺跡でも木の斎串が見つかっています。金田の話の中で結界などの役割で使ったのではないかという話がありましたが、古代のいわゆる律令的な祭祀具を代表する斎串が見ついているということで、ここ新潟にもその律令的な祭祀が7世紀後半にはすでに伝わっているということがうかがえます。また、どちらの遺跡でも刀形の木製品が見つかっております。

このように共通する遺物がある一方で、大沢谷内遺跡では鉄の鏃や刀子が見つかるのに対し、行屋崎遺跡ではそれらは出ておらず、先ほど見ていただいた銅製の鈴や耳飾りである銅製の耳環が見つかるといった違いがあります。

あと土製品ですが、行屋崎遺跡では手づくね土器が見つかっていたり、また金田の話の最後のほうでも話がありました人形や動物形の土製の模造品など

も見つかっております。それに対し、大沢谷内遺跡では先ほど想像イラストもありましたが円盤形の土製品が見つかっているといった違いも見られます。

以上をまとめると、共通するものとしては斎串や刀形の木製品、また弓などがどちらの遺跡でも見つかっているということです(スライド37)。繰り返になりますが、斎串については飛鳥時代から新たに加わった律令的な祭祀遺物であり、いわゆる律令祭祀が地方へも急速に伝わった状況を示す資料と言えます。

異なるものとしては、表で確認したように土製品ですと、大沢谷内遺跡で有孔円盤が見つかっているのに対して、行屋崎遺跡では人形の土製品だとか、動物形の土製品だとか、あと手づくね土器などが見つかっているという違いがあります。さらに金属製品では、大沢谷内遺跡では鉄鏃とか刀子が見つかっているのに対して、行屋崎遺跡では銅製の鈴や耳環が見つかっているといった違いもあります。

行屋崎遺跡も大沢谷内遺跡も同じ7世紀後半の遺跡で、距離も1.5kmほどしか離れていないのですが、このような祭祀関連資料の違いというのは、遺跡の性格によるものなのか、あるいは7世紀後半の中の微妙な時期差によるものなのかということも今後検討していく必要があるのかなと思います。

3. 越後平野における奈良・平安時代の主な祭祀関連遺跡

次に奈良・平安時代の主な祭祀関連遺跡について見ていきたいと思えます。

まずは新潟市の西区にある的場遺跡と緒立遺跡について見ていきたいと思えます(スライド39・40)。これは1976年に撮影された的場遺跡と緒立遺跡の遠景です(スライド41)。的場遺跡も緒立遺跡も調査で遺構を確認できた標高が-4mという非常に低い立地にあります。地盤沈下の影響によるものですが、もともと低湿な場所の中の若干高い土地を利用して集落が営まれていたと考えられます。

的場遺跡 こちらは1989年に撮影した的場遺跡の調査風景です(スライド42)。左側が高い場所で、低い方へ行くと低湿な環境にあるという状況がわかります。的場遺跡では木の沓が出ていたり(スライド43)、鈴や太刀につける金具が出ていたり、非常に有力な役人がいたと考えられています。これが太刀金具の出土状況です(スライド44)。また、帯金具と呼んでいるベルトの金具が出ていたりすとか、先

ほどの木沓、それと琴柱と呼ぶ木製の琴の道具ですとか、あと独楽なども見つかっていて、一般集落ではなかなか見られない資料が出土しています(スライド45)。

的場遺跡では他にも魚を捕るときのおもりに使った大小の土錐(スライド46)ですとか、木製の浮き(スライド47左上)なども見つかっており、魚をとっていたことがわかります。的場遺跡で出土した木簡の中に「枚人鮭」と記された木簡(スライド47右)があることや、またサケの骨(スライド47左下)が出土していることなどから、サケを中心に漁撈活動をしていた集落で、役人が関与していた役所関連施設であると考えられている遺跡です。

その的場遺跡ですが、北や西側の湿地部分から祭祀関連の遺物が見つかっています(スライド48)。これは木製品の出土状況です(スライド49)。これは木の形代で、人の形をした形代が出土している状況です(スライド50)。これは的場遺跡から出土した木製祭祀具の一部です(スライド51)。左側は人の形をした形代で、右側は災いを払いのける結界のような役割だったのではないかと考えられている斎串になります。

また、金田の話にもありました馬形の木製品も出土しています(スライド52上2つ)。これは中央に鞍が表現されていて馬だろーと考えられています。また、舟の形をした木製品も湿地から出土しています(スライド52下)。金田の話にもありましたが、水に流して使ったのではないかと考えられています。

他に、水辺ではありませんが掘立柱建物の柱の穴の中からこのように和同開珎が20枚束になった状態で見つかっています(スライド53)。これは建物の地鎮に関係する可能性が指摘されていますが、そのような祭祀も行われていたようです。

緒立遺跡 次に緒立遺跡を見ていきたいと思えますが、的場遺跡と緒立遺跡は直線で500~600mと非常に近い位置関係にあり、互いを補完し合うような関係であったと考えられています(スライド54)。

これは緒立遺跡の調査風景です(スライド55)。こちらも的場遺跡同様、標高の低い低湿地の中の高い土地を使って営まれた集落です。

緒立遺跡では、先ほどの金田の話の中でカマドの模造品という言葉がありましたが、このようなカマドの形をした土製品が見つかっています(スライド56)。

この緒立遺跡は調査区の北側で低湿地が確認され

ていて、調査区中央から南側では掘立柱建物などが見つかっています(スライド57)。この中の黒い点が杭列で柵と考えられます。青く塗ってあるのは齋串が出土した場所です。あとこの黄色い四角は人面墨書土器が出土した場所になります。こういった集落の縁辺部から湿地に至る場所で人面墨書土器が出土しております。いずれも水辺の祭祀に伴う資料と考えられています。

これが緒立遺跡の人面墨書土器です(スライド58)。先ほどの金田の話にもありましたが、顔を土器に描き、それを水に流すことで穢れなどを祓ったと考えられている遺物になります。

こちらは胎内市の船戸桜田遺跡の人面墨書土器です(スライド59)。ひげが描いてあります。これはその展開写真です(スライド60下)。同じ土器に4面、4つの顔が描かれています。新潟県内の人面墨書土器はこの緒立遺跡と船戸桜田遺跡、それと長岡市の浦反甫東遺跡という遺跡でも、破片資料ですが目ではないかと言われている人面墨書の可能性のある土器が出ています(スライド60右上)。県内ではこの3遺跡で人面墨書土器が見つかるという状況です。

これは緒立遺跡での水辺の祭祀風景の想像イラストです(スライド61)。後ろに柵列があり、カマド形の土製品があり、カマド形の土製品は実際に煮炊きをしたのか、置いて真似だけしたのか、なかなかわかりませんが、あとは人面墨書土器や齋串を水辺に流したのではないかとということです。

山形県の俵田遺跡という遺跡では、人面墨書土器や馬形の木製形代、人形の形代などが出土しており、おおむね使用した痕跡を残す出土状況なのではないかということで使用時の復元案が示されています(スライド62)。人面墨書土器などは水辺の縁の部分で見つかっていますが、人面墨書土器の中に人形などを封じ入れ、さらに周りを齋串などで結界をし、馬形の木製品と一緒に穢れなどを水に流して祓ったのではないかと考えられています。

以上、緒立遺跡と的場遺跡を中心に祭祀の様相について見てきましたが、どちらも水辺の周辺で齋串や人形、舟形、馬形、刀形など多くの形代が出土しており、災いや穢れなどを木の形代に移して水に流す儀礼を行ったと推測されます。人面墨書土器は先ほどお話したように、県内では緒立遺跡など3遺跡で出土しています。緒立遺跡や的場遺跡ではそういった祭祀具と一緒に琴柱や独楽、鈴、またサイコ

ロなども見つかっており、場合によってはそういった道具は祭祀の際のまじないなどに使用した可能性もあるのではないかと考えられています。

井戸の祭祀 井戸に伴う祭祀も行われていたようで、これは秋葉区にある大沢谷内遺跡の井戸の断面です(スライド64)。この井戸ですが、丸木舟を井戸の側板として再利用していました。その井戸の下からほぼ完全な形の土器が見つかっています。これがその井戸の底から見つかった須恵器のお椀が出土した状況です(スライド65)。壊れていない状態で2つ出土しています。これは井戸の祭祀に伴うものだろうと考えております。

これは別の井戸になりますが、これも丸木舟を井戸の側板として再利用していた井戸です(スライド66)。この井戸の底からも、少し割れてしまっていますが、須恵器のお椀が出土しています(スライド67)。

この表は、大沢谷内遺跡における奈良時代と平安時代の井戸の大きさと深さを示した表です(スライド68)。横軸が井戸の幅で、縦軸が深さを示しています。右に行くほど径が大きく、上に行くほど深い井戸ということになります。表の中で赤く塗って少し記号の大きいものが、底から残りの良い土器が出土した井戸です。また三角や四角の記号のものは、先ほど写真で見ましたが、井戸の側面を木材で囲っている井戸です。比較的径が大きく深い井戸において側面を木材で囲っていることが分かるとともに、そういった径が大きくて深い井戸の底から残りの良い土器が出土している傾向がうかがえます。これらの事からは、全ての井戸で祭祀を行ったのではなく、集落の中で核となる特別な井戸に限って祭祀行為を行っていたことが推測できるかと思えます。

井戸の祭祀についてまとめますが、井戸での祭祀事例については古くは弥生時代から確認されており、弥生時代にも井戸の底から完全な形の土器が出土する事例があります(スライド69)。これらは水や水脈をもつその土地に対する畏敬の表れだろうと考えられます。現代でも井戸を掘ったり廃棄する際にお祓いをするがありますが、そういった祭祀行為は弥生時代から見られるということになります。

7世紀後半以降になると、土器に加えていわゆる律令の祭祀具である齋串や形代などの祭祀遺物が井戸の中から出土する例が多くなります。

大沢谷内遺跡における井戸の事例からは、繰り返しになりますが、規模の比較的大きな特定の井戸のみ、完形土器を用いた井戸祭祀が行われていたと

ということが言えるかと思います。

おわりに

以上、越後平野における古代祭祀遺跡について幾つか見てきましたが、それらについて若干の比較を行いたいと思います(スライド71)。緒立遺跡と的場遺跡は、どちらも8・9世紀、奈良時代・平安時代の公的な機能をもった遺跡で、サケなどの漁撈活動を行っていたと考えられています。

人面墨書土器や手づくね土器、カマド形土製品、また各種形代や大量の齋串などの祭祀遺物が出土しており、水辺において公的な祭祀が行われていたことが推測されています。

スライドには出てきませんでしたが、新潟市西区の赤塚にある四十石遺跡は8・9世紀の遺跡で、倉庫群や帯金具、「津」と書かれた墨書土器が見つかることなどから、公的機関が管理した港と考えられている遺跡です。四十石遺跡は緒立遺跡や的場遺跡と同じ時期の遺跡ですが、こちらでは明確な祭祀遺物や祭祀を行った痕跡は確認されていません。

また、胎内市にある蔵ノ坪遺跡では「少目」と書かれた荷札木簡が出ています。金田の話の中でも出てきたように「少目」は国司の名称で、蔵ノ坪遺跡周辺に国司がいたのではないかという研究者もいます。その「少目」と書かれた荷札木簡や、四十石遺跡と同じく「津」と書かれた墨書土器などが出土していることなどから、8・9世紀の公的機関が関与した港と考えられている遺跡です。ただし、こちらも四十石遺跡と同様、明確な祭祀遺物や祭祀を行った痕跡は確認できていません。

以上のことから、同じ時代であっても遺跡によって出土遺物が異なる場合があることがうかがえ、遺跡の機能や役割によって、出土する祭祀具の種類や多寡、祭祀のあり方などが異なっていた可能性が推測されます。

祭祀にはいろいろな種類のものであり、国家レベルのものや地方の役所レベルのもの、あるいは農民が雨乞いをしたり、井戸を埋めたりする際に行うものなど、さまざまな祭祀があったことが推測されます(スライド72)。また祭祀具についても、石製模造品など祭祀専用のものであれば、日常使用しているものを祭祀に使用する場合もあります。井戸の祭祀のところで見た井戸底で出土した完形の土器などは、通常、食事の際に使用したのですが、井戸底から完形で出土した状況から祭祀遺物と判断された

ということになります。

祭祀遺物の認定や、祭祀遺物の出土がどのような背景で行われた祭祀行為を反映したものかなど、まだ不明な点が多いのが実情で、今後検討していかなければいけません。先ほど確認したように、同じ時期の公的な遺跡であっても祭祀遺物の種類や出土量などに違いが見られるなど、非常に多様な祭祀のあり方が認められ、さまざまな要因によって祭祀のあり方が異なっていたことが推測されます。今回は公的な遺跡を中心に見てきましたが、そうではない一般集落の遺跡も含めてその違いや背景などについて今後検討していく必要があるといえます。

また、最初に古墳時代から飛鳥時代の遺跡について話をしました。7世紀後半では大沢谷内遺跡と行屋崎遺跡の事例を紹介しましたが、越後平野では6・7世紀の遺跡が少ない状況です。大沢谷内遺跡などの7世紀後半の遺跡も少ないのですが、特に6世紀後半から7世紀前半の遺跡が非常に少ない状況であり、そのため古墳時代の祭祀から古代のいわゆる律令祭祀へと至る過程の実態についても不明な点が多いといえます。

今後の検討課題が多く、なかなか結論めいたことは言えませんでした。以上で終わらせていただきます。ご清聴どうもありがとうございました。

企画展1関連講座「越後平野の古代律令祭祀の様相と展開」 2018年5月27日(日)

越後平野における古代の祭祀関連遺跡とその様相

新潟市文化財センター 相田泰臣

構成

1. 越後平野における古墳時代の主な祭祀関連遺跡
2. 越後平野における飛鳥時代の主な祭祀関連遺跡
3. 越後平野における奈良・平安時代の主な祭祀関連遺跡
4. まとめ

スライド1

1. 越後平野における古墳時代の主な祭祀関連遺跡

スライド2

白旗きは槻穴系の埋葬施設・石数値は規模(m)

時期	新潟県	新潟県	新潟県	新潟県	新潟県	新潟県	新潟県	新潟県	新潟県	新潟県	新潟県	新潟県	新潟県
名称	名称	名称	名称	名称	名称	名称	名称	名称	名称	名称	名称	名称	名称
1期													
2期													
3期													
4期													
5期	TK220												
6期	TK23												
7期	TK29-305												
8期	TK29-347												
9期	TK29-347												
10期	TK29												
	TK217~												

古墳時代前後の時代名称と新潟県における主な古墳

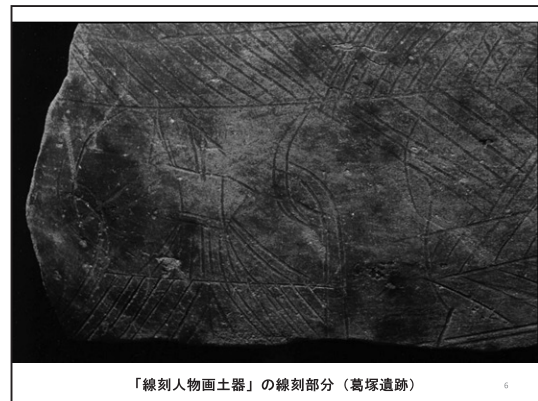
スライド3



スライド4



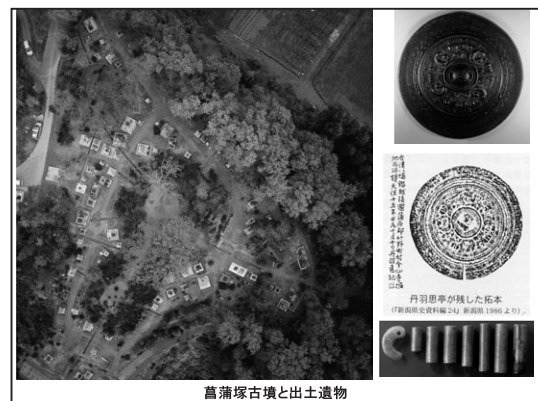
スライド5



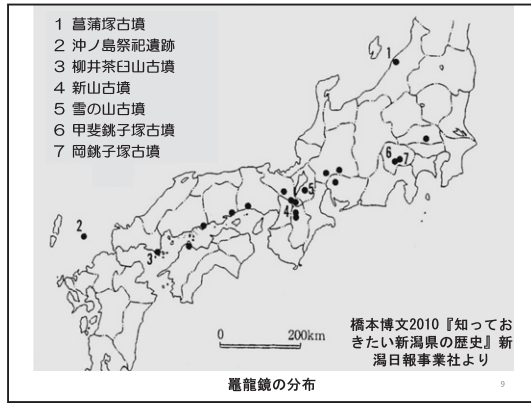
スライド6



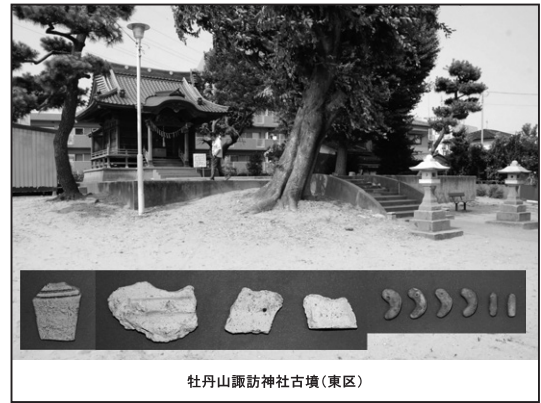
スライド7



スライド8



スライド9



牡丹山諏訪神社古墳(東区)

スライド10



御井戸遺跡遠景

スライド11



御井戸遺跡出土の石製模造品

スライド12



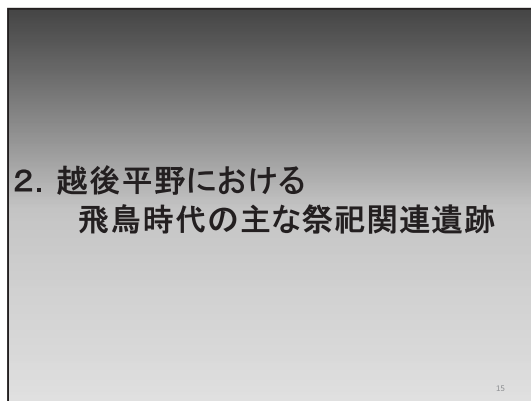
御井戸遺跡における石製模造品を使った祭祀風景想像イラスト

スライド13



阿賀野市腰廻遺跡出土の古墳時代の祭祀遺物

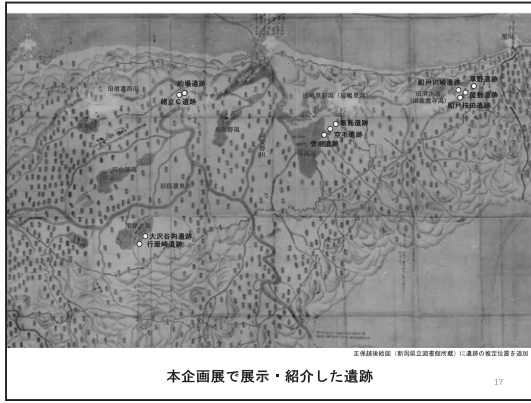
スライド14



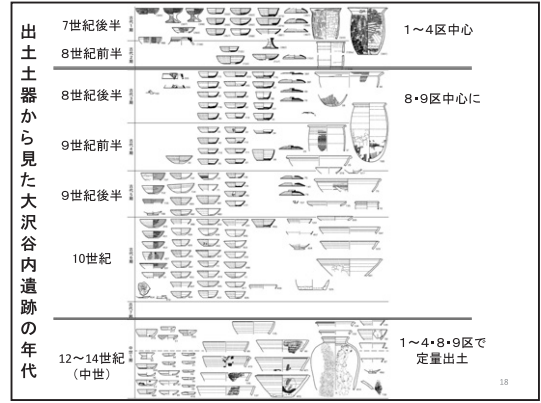
スライド15



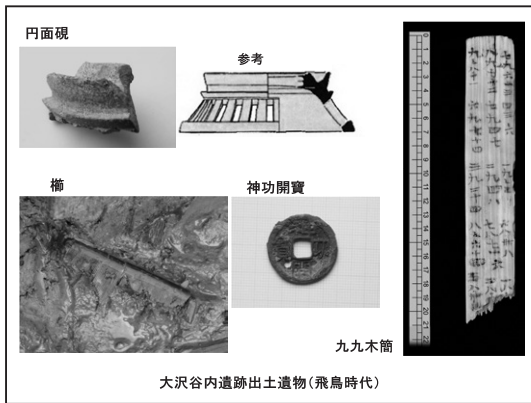
スライド16



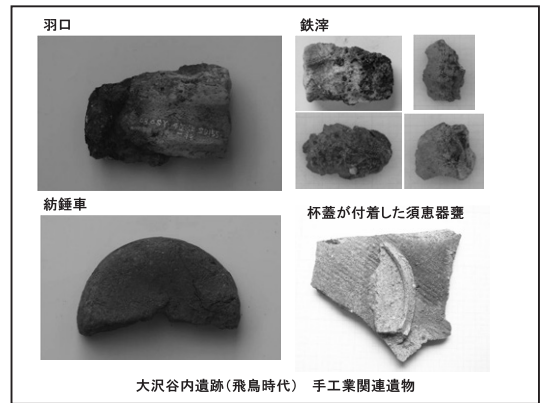
スライド17



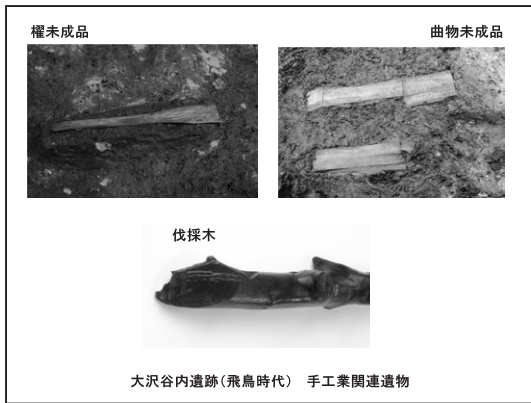
スライド18



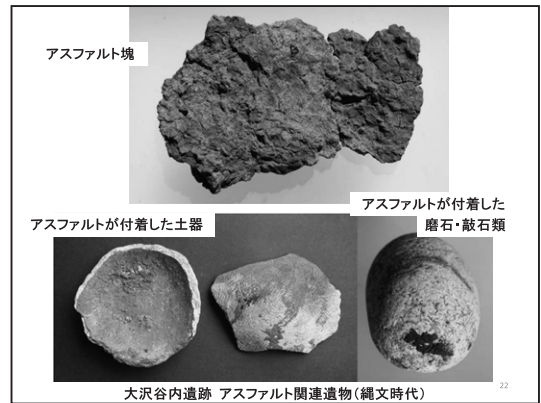
スライド19



スライド20



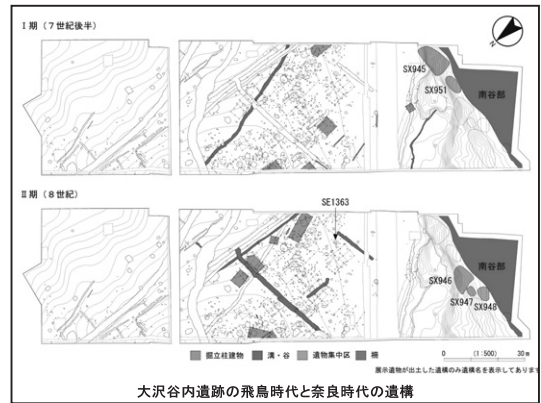
スライド21



スライド22



スライド23



スライド24



大沢谷内遺跡遺物出土状況 (SX945)

25

スライド25



大沢谷内遺跡斎串出土状況 (SX945)

26

スライド26



大沢谷内遺跡鐵形木製品出土状況 (SX951)

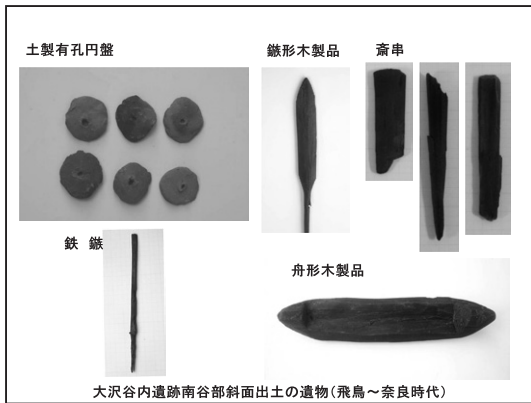
27

スライド27



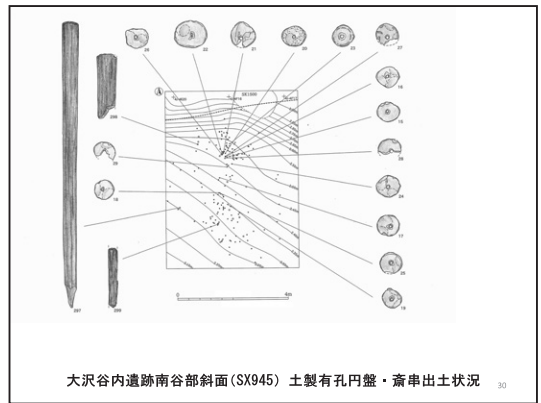
大沢谷内遺跡南谷部斜面 (SX945) 出土の土器 (飛鳥時代)

スライド28



大沢谷内遺跡南谷部斜面出土の遺物 (飛鳥～奈良時代)

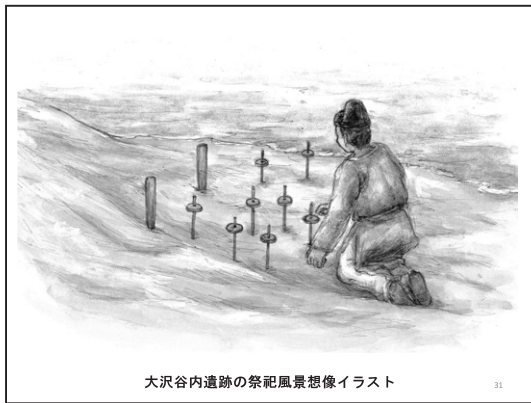
スライド29



大沢谷内遺跡南谷部斜面 (SX945) 土製有孔円盤・斎串出土状況

30

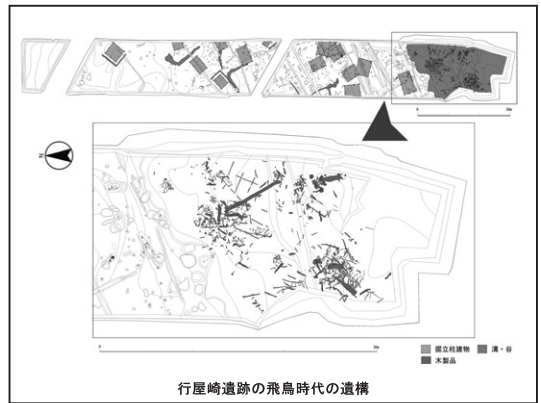
スライド30



大沢谷内遺跡の祭祀風景想像イラスト

31

スライド31



行屋崎遺跡の飛鳥時代の遺構

スライド32



行屋崎遺跡流路(SR400)の調査風景

33
田上町教育委員会提供

スライド33



行屋崎遺跡弓出土状況

34
田上町教育委員会提供

スライド34



行屋崎遺跡鈴出土状況

35
田上町教育委員会提供

スライド35

沖ノ島と行屋崎遺跡・大沢谷内遺跡・延命寺遺跡（上越市）におけるおもな祭祀遺物

遺物	沖ノ島		行屋崎遺跡		大沢谷内遺跡		延命寺遺跡	
	遺物	出土状況	遺物	出土状況	遺物	出土状況	遺物	出土状況
土製有孔円盤								
土製土製品								
動物形土製品								
手づくね土器								
金属製品								
鉄製								
銅製								
石製品								
木製品								

36
田上町教育委員会提供

スライド36

行屋崎遺跡・大沢谷内遺跡出土の祭祀関係遺物の比較

①共通するもの

- 斎串
- 刀形木製品
- 弓

斎串 ⇒ 飛鳥時代に新たに加わった律令的祭祀遺物。
律令祭祀が地方へも急速に伝わった状況を示す。

②異なるもの

- 土製品
 - 土製有孔円盤(大沢谷内遺跡)
 - 人形土製品・動物形土製品、手づくね土器(行屋崎遺跡)
- 金属製品
 - 鉄製・刀子(大沢谷内遺跡)
 - 銅製鈴・耳環(行屋崎遺跡)

◆祭祀遺物の違い⇒遺跡の性格によるものなのか、あるいは7世紀後半の中の時期差によるものなのか、今後検討していく必要あり。

37

スライド37

3. 越後平野における 奈良・平安時代の主な祭祀関連遺跡

38

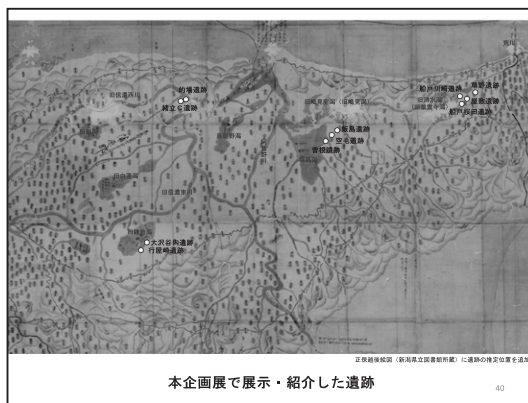
スライド38



本企画展で展示・紹介した遺跡

39

スライド39



本企画展で展示・紹介した遺跡

40

スライド40



的場遺跡・竪立遺跡遠景 (1976年頃撮影)

41

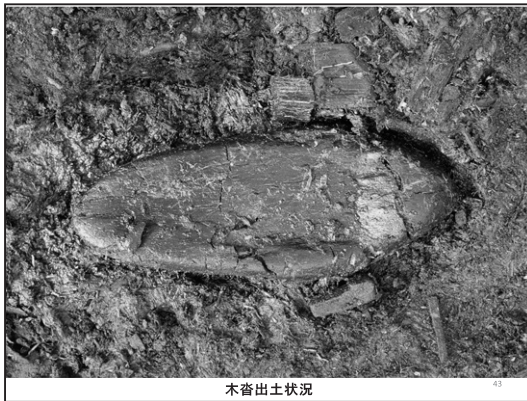
スライド41



的場遺跡調査風景 (1989年撮影)

42

スライド42



木沓出土状況

43

スライド43



木刀出土状況

44

スライド44



的場遺跡出土の金属製品・木製品

45

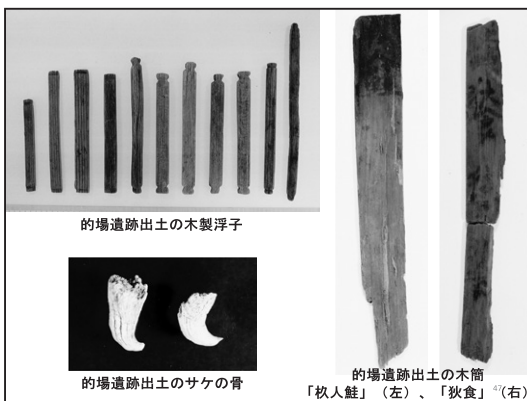
スライド45



的場遺跡から出土した土埴

46

スライド46



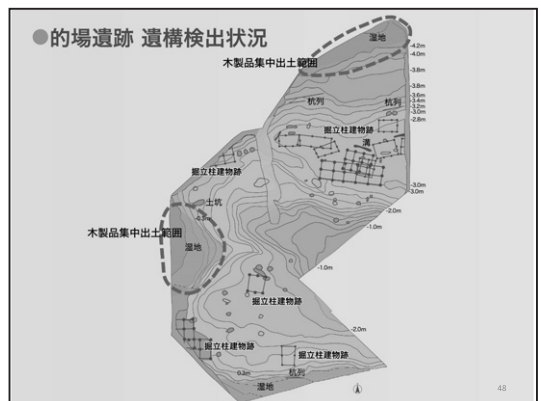
的場遺跡出土の木製浮子

的場遺跡出土のサケの骨

的場遺跡出土の木筒
「秋人鮭」(左)、「秋食」(右)

47

スライド47



●的場遺跡 遺構検出状況

48

スライド48



的場遺跡の木製品出土状況 49

スライド49



形代(人形木製品)出土状況 50

スライド50



的場遺跡出土の木製祭祀具(人形・畜串) 51

スライド51



的場遺跡出土の木製祭祀具(馬形・舟形) 52

スライド52



和同開珎出土状況(的場遺跡) 53

スライド53



的場遺跡・緒立C遺跡 位置図 54

スライド54



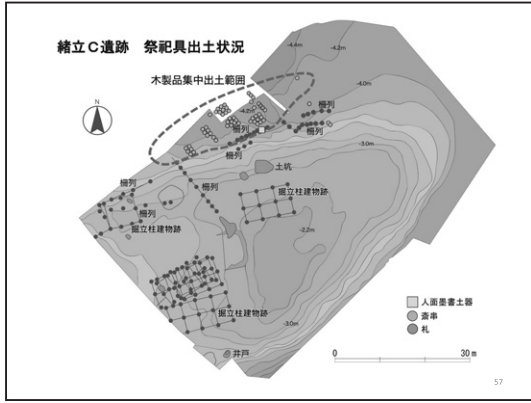
緒立C遺跡の調査風景 55

スライド55



緒立C遺跡出土のカマド形土製品(上)・推定復元イラスト(下) 56

スライド56



スライド57



スライド58



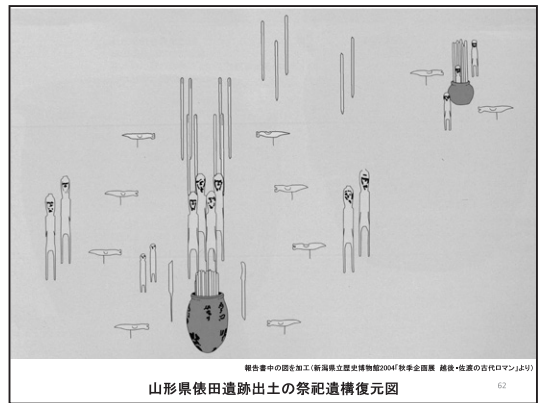
スライド59



スライド60



スライド61



スライド62

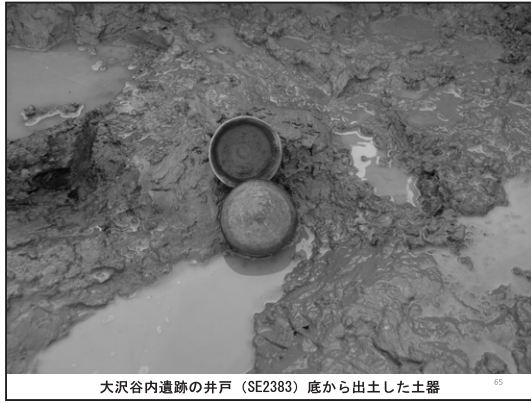
緒立遺跡・的場遺跡の祭祀の様相

- 水辺周辺で斎串や人形・舟形・馬形・刀形など多くの形代が出土
⇒災いや穢れなどを木の形代に移して水に流す儀礼を行ったと推測される
人面墨書土器：緒立C遺跡など3遺跡で出土
- 木製の琴柱や、的場遺跡出土の独楽や鈴、緒立C遺跡出土のサイコロは
斎串や形代と一緒に出土
⇒祭祀の際のまじないなどに使用した可能性
- 的場遺跡では、掘立柱建物の柱の穴から和同開珎20枚が重なった状態
で出土。貨幣の一部には布の付着が認められる。
⇒布に包まれた状態で埋納された可能性あり。
建物を造る前の地鎮祭？

スライド63



スライド64



大沢谷内遺跡の井戸 (SE2383) 底から出土した土器

スライド65



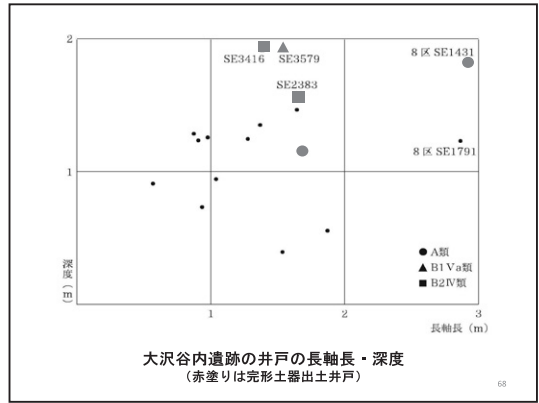
大沢谷内遺跡の井戸 (SE3416) の断面

スライド66



大沢谷内遺跡の井戸 (SE3416) 底から出土した完形土器

スライド67



大沢谷内遺跡の井戸の長軸長・深度 (赤塗りは完形土器出土井戸)

スライド68

井戸の祭祀

- 古くは弥生時代
 - ...井戸底から完全な形の土器が出土する事例あり
 - ⇒水または水脈をもつ土地に対する畏敬の表れか
- 飛鳥時代の7世紀後半以降
 - ...土器に加えて斎串や形代などの祭祀遺物の出土も多くなる

☆大沢谷内遺跡における奈良・平安時代の井戸の事例

- ...20基のうち5基で井戸底から完形土器が出土
- 完形土器が出土した井戸は、他よりも幅が大きくかつ深い井戸
- そのうち2基は井戸側を木で囲うなどの特別なつくりの井戸 (丸木舟の転用など)

⇒奈良・平安時代の大沢谷内遺跡では、規模の比較的大きな特定の井戸でのみ完形土器を用いた井戸祭祀が行われていた

スライド69

4. まとめ

スライド70

越後平野における古代祭祀遺跡の比較

<p>緒立遺跡・的場遺跡 (新潟市西区) の性格</p> <ul style="list-style-type: none"> ・8・9世紀の公的機関が関与する流通漁業基地 ・人面墨書土器や手づくね土器、カマド形土製品 ・各種形代や多量の斎串などの祭祀遺物が出土 <p>⇒永刃において公的な祭祀が行われた</p>	<p>四十石遺跡 (新潟市西区) の性格</p> <ul style="list-style-type: none"> ・8・9世紀の倉庫群や帯金具 ・「津」と書かれた墨書土器 ・8・9世紀の公的機関が管理する港 ・明確な祭祀遺物や祭祀を行った痕跡は未確認 <p>蔵ノ坪遺跡 (胎内市) の性格</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「少目」と書かれた荷札木簡 ・「津」と書かれた墨書土器 ・8・9世紀の公的機関が管理する港 ・明確な祭祀遺物や祭祀を行った痕跡は未確認
--	---

◆同じ公的機関が関与する遺跡であっても、その遺跡の機能や役割によって、使用する祭祀具の種類や多寡、祭祀のあり方などが異なっていた可能性

スライド71

おわりに

- 祭祀
 - ・国家レベルのもの
 - ・国司や郡司といった地方の役所レベルのもの
 - ・農民が雨乞いや井戸を埋めたりする際に行うもの などさまざまな祭祀あり
- 祭祀具
 - ・祭祀専用のもの
 - ・日常使用しているもので、祭祀を行う時にも利用したもの

◆同じ時期の公的な遺跡であっても、祭祀遺物の種類や多寡に違いが見られ、遺跡の役割や機能、そのほか様々な要因によって、祭祀のあり方が異なっていた

◆一般集落の遺跡も含め、祭祀遺物や祭祀のあり方は多様であり、その背景については今後の大きな検討課題

◆6世紀後半から7世紀前半の遺跡が越後平野では少ないこともあり、古墳時代から古代への過渡期における祭祀具の変遷や祭祀の実態の解明についても今後の検討課題

スライド72

図・写真の出典

スライド1、12、31、61：画 野崎裕美氏

スライド3：新潟市文化財センター2013『弥生の丘展示館ガイドブックNo.3（古墳・奈良・平安時代編）』

スライド7：画 早川和子氏

スライド8右中央：新潟県1986『新潟県史』資料編24

スライド9：橋本博文2010「新事実から読み直す新潟の前期古墳」『知っておきたい新潟県の歴史』新潟日報事業社

スライド17、40：正保越後絵図（新潟県立図書館所蔵）に遺跡位置を追加

スライド24、30：新潟市教育委員会2012『大沢谷内遺跡』Ⅱから作成

スライド32：田上町教育委員会2015『行屋崎遺跡』から作成

スライド33、34、35下：田上町教育委員会提供

スライド33右上：新潟県教育委員会2008『延命寺遺跡』

スライド58左、右：黒埼町教育委員会1994『緒立C遺跡発掘調査報告書』

スライド59：中条町教育委員会2001『船戸桜田遺跡 2次』

スライド60下、62：新潟県立歴史博物館2004『平成16年度秋季企画展 越後・佐渡の古代ロマン』

古墳時代の集落と豪族居館 － 東日本を中心に －

菊地芳朗（福島大学行政政策学類）

はじめに

皆さん、こんにちは。ただいまご紹介いただきました菊地と申します。今日はこういった機会を頂戴しありがとうございます。私は古墳時代が専門で、これまで東北を中心にさまざまな研究・調査を行ってまいりました。私の研究テーマの1つが古墳時代の村についてであり、今回の企画展に関わって、古墳時代の集落と豪族居館について話をさせていただきます。

今回のテーマの「豪族居館」とは何かといいますと、一般的には大きな前方後円墳に葬られるような人物の住んだところ、という理解かと思えます。しかし、「豪族」をどう定義するかは実は非常に難しい問題で、何を以て「豪族」と呼ぶかは、研究者によって一致していません。今回は大きな前方後円墳だけでなく、古墳全般に葬られる人々の住んだ場所、あるいは活動した場所という意味で、「豪族居館」を使いたいと思います。

話の前提として、今日はどういう時間軸の中で話をするかですが、スライド2は私の暦年代や土器の位置づけを示したものです。細かな説明は省きますが、私は古墳時代を大きく早期から終末期まで5つの時期に分け、それぞれの時期が西暦で大体どのくらいにあるかを示してあります。随時この図をご覧くださいながら聞いていただければと思います。

1. 群馬県黒井峯遺跡の調査成果

まず群馬県渋川市にある黒井峯遺跡の調査成果を紹介したいと思います(スライド4)。なぜ今回の講演で群馬県の遺跡を取り上げるかといいますと、ご存じの方も多と思いますが、群馬県は村や豪族居館の研究で非常に大きな役割を果たしています。それは、古墳時代の火山噴火で村などが埋まってしまうためです。当時の地表がいわばそのままパッキングされて残っているため、群馬県の古墳時代の遺跡の調査成果は、当時の村の研究や豪族居館の研究に対し非常に大きな役割を果たしているのです。

黒井峯遺跡は、6世紀中ごろ、古墳時代後期の

中ごろに廃絶した村です(スライド5)。上毛三山の一つの榛名山が黒井峯遺跡の南西にあり、これが古墳時代の中期の終わりごろと後期の中ごろに大爆発を起こし、その6世紀中ごろの大爆発による火山灰で黒井峯遺跡は埋まってしまいました。そのため、当時のさまざまなものがそのままの状態で見つかり、この遺跡は「日本のポンペイ」と呼ばれています。

黒井峯遺跡は、調査当時は子持村でしたが、今は市町村合併で渋川市になっています。関東平野北西の最奥部から少し奥の場所にあり、利根川の本流と支流の吾妻川の合流点近くにつくられた村跡です。

さらに拡大した図を見ますと(スライド6)、利根川本流と吾妻川の合流点の北の段丘上に黒井峯遺跡があります。南の対岸には、近年、甲を着た人物が火山被害に遭ってそのままの状態で見つかった金井東裏遺跡があります。ただし、金井東裏遺跡は黒井峯遺跡と同じ6世紀中ごろの遺跡ではなく、榛名山のその前の爆発、5世紀末から6世紀初め頃の爆発で被害に遭った遺跡です。ですから、黒井峯遺跡と距離は近いのですが、時間的には関係ないことになります。この金井東裏遺跡は、甲を着た人物以外にもさまざまな貴重な遺構と遺物が出ており、また、金井東裏遺跡の近くには豪族居館に関係する遺跡も見つかっていて、この辺りは榛山の噴火によってさまざまな情報がパッキングされている地域です。

黒井峯遺跡は非常に重要な遺跡であることから、古津八幡山遺跡と同じく国の史跡になっています(スライド7)。基本的に開発の手は加わず永久に保存されていくことになっているのです。

スライド8は報告書に掲載されている写真です。FPという6世紀中ごろの榛山の爆発によって降下した火山灰が、人の背丈を超えるほどの厚さに堆積しています。その下には、FAという半世紀前の爆発の火山灰もありますので、この辺りにはものすごい厚さの火山灰が堆積し、その下から古墳時代の村が当時かなり近い状態で見つかります。

発掘調査によって火山灰をはいでいくと、四角い

輪郭が浮かび上がってきますが（スライド9）、これが当時の火山灰によって押しつぶされた建物の跡です。ポンペイのように建物がそのまま残っているわけではありませんが、さまざまな遺構や遺物が6世紀中ごろに近い状態で出てくるわけです。

スライド10は堅穴建物です。一般に堅穴住居、あるいは堅穴式住居と言いますが、必ずしも住居として使われていたのではないため、厳密には堅穴建物、あるいは堅穴式建物と言うべきです。堅穴建物は、地面に穴を掘って出た土を建物の周囲に盛り上げ、地面より低い場所に床を設ける形式の建物なので、建物の周りにあたかもドーナツのように高まりがめぐります。それを周堤と言いますが、それによって天井までの高さが高くなります。堅穴建物は基本的に壁をつくらずに柱を立て、梁をかけて、屋根を葺く形式なので、周堤を設けることによって建物の高さを確保するということもあるわけです。

スライド10左下は群馬県高崎市かみつけの里博物館の図録からお借りした堅穴建物のイラストで、周堤が描かれています。近年、残りの良い遺跡では土が建物の屋根の上に積まれたり、土が屋根材にサンドされている事例も見つかっています。恐らく保温のためと思われるのですが、そうすると窓もないですし、内部は真っ暗ではないかと思うのですが、そういう形式の建物に黒井峯遺跡の人たちが住んでいたと考えられます。

スライド10右下は、黒井峯遺跡で非常に多く見つけた平地建物です。平地式というのは、地面をほぼそのまま床にしている建物のことで、なおかつ内部には柱がありません。周縁にごく細い柱のようなものが立っていた痕跡はあるのですが、それほど立派な柱ではありません。スライド10右上がその復元図です。一部に溝が掘られたものはありますが、基本的に掘り込みはなく、壁を細い柱状のものでつけて屋根をかける非常に簡素な構造です。黒井峯遺跡では平地建物の方が多く見つかっており、堅穴建物1に対し5くらいの割合であります。

平地建物の“こわい”ところは、発掘調査において地面を少し掘り過ぎてしまうと、見つけれないということです。堅穴建物は、少し地表を削ったくらいで無くなることはないのですが、平地建物は10cmも掘り下げたら遺構が無くなってしまいくらいの基礎ですので、下手をしたら発掘調査で見つけれないのです。平地建物は榛名山の噴火によって埋まった古墳時代の村でしばしば確認され、群馬県は日本

列島の中で初めて古墳時代の平地建物が見つかった地域です。これが見つかるまでは堅穴建物が使われていると推定されており、平地式建物の存在は考えられていなかったため、そのような意識で各地の発掘調査は行われていませんでした。

先ほど堅穴建物1に対して平地建物が5くらいと申しましたが、これをふまえると他の遺跡でも本当はそのような割合なのではないかという疑念が生じます。他の県や地域でも堅穴建物は建物の主体ではないのかもしれないという疑念が、黒井峯遺跡などの調査によって研究者の間に生じたのです。実際に平地建物の方が多いのかということについては、決着がついていません。また、堅穴建物が密に見つかる遺跡もあって、そのような集落で平地建物が多数を占めると考えるのは難しいので、先ほどの建物形式の比率は群馬県の地域性である可能性も否定できません。しかし、黒井峯遺跡で普段は見つからない形式の建物が見つかったことで、古墳時代の集落研究は大きな再考を迫られるようになりました。その意味で、黒井峯遺跡は大きな成果であったと同時に、研究者にショックを与えるものでした。

黒井峯遺跡では、ほかに円形の平地建物が見つかっており、これも古墳時代ではほとんど例がないのです（スライド11左上）。この建物からは壺類が多く出土しており、調査担当者は酒づくりに利用した施設ではないかと推定しています。

それから、やはり普段は検出されない畑の跡も黒井峯遺跡では見つかっています（スライド11左下）。スライド11右上も平地の建物で、平面が長方形で長辺の一方に窪みが設けられ、家畜小屋ではないかと推定されています。近くの白井遺跡群で同じ時期の馬の蹄跡がたくさん見つかることから、馬などの家畜を飼っていたのではないかと推定もなされています。

スライド12左は黒井峯遺跡を上空から見たものです。畑や当時の人々が歩いた道まで見つかっています。このような道が見つかることによって、当時どのように土地が区画され利用されていたのかということも推定できます。このことは単に道の問題にとどまらず、財産がどのように管理されていたのかという方向などにも研究が進む可能性のある成果です。

スライド12右は、黒井峯遺跡の調査結果を踏まえて、村の中でどういう建物のまとまりがあるかを研究された杉井健さん作成の図です。道やさまざまな

施設を勘案しての色分けのようなまとまりがあったと推定されています。例えばI・VI群というまとまりを見ると、竪穴建物は1棟しかなく、他の10数棟は全て平地建物です。一方、榛名山の6世紀中ごろの爆発は、さまざまな状況を踏まえて恐らく初夏、5月・6月に発生しただろうと推定されています。I・VI群の1棟の竪穴建物の中には何も残っておらず、後で掘り返されたような跡もないことから、初夏のころこの建物は使われていなかったと推定されます。一方、平地建物にはそれなりに家財が残っていました。このような成果を踏まえ、竪穴建物の面積が大きいということも勘案して、竪穴建物は主に冬の住まいで、平地建物はそれ以外のスリーシーズンの住まいと推定されたのです。建物が使われていた季節を確かめる方法は考古学的には非常に難しいのですが、平地建物と竪穴建物が季節によって使い分けがされていたという可能性が黒井峯遺跡の調査やそこからのさまざまな研究から推定されることになりました。

以上のように、黒井峯遺跡の調査は、建物の構造にとどまらず、古墳時代の村の研究、さらにはそこから発展するさまざまな社会の研究に、非常に大きな影響を与えるものであったのです。

2. 古墳時代の建物

スライド14左は古墳時代の非常に著名な遺物である家屋文鏡という鏡です。奈良県広陵町にある佐味田宝塚古墳という墳長110mあまりの前方後円墳(スライド14右)から出土したもので、今は宮内庁に所蔵されています。年代は4世紀中ごろ、古墳時代前期後半と推定されます。鈕を中心に放射状に4棟の建物が表現されており、4世紀ごろの建物の姿がわかる非常に貴重な資料です。

鏡に表現された建物を拡大してみますと(スライド15)、4棟それぞれ違う構造で表現されています。スライド15左上は竪穴建物と考えられるものです。壁がなく、屋根が入母屋形式のもので、床は恐らく地面より低い場所にあります。入り口の戸が支え棒によって跳ね上げられていて、中に入れる状態になっています。よく見ると屋根の上に鳥が止まっており、シンボリックな意味合いのものと思います。

スライド15右上は平地建物と考えられるものです。少し規模が大きいと考えられ、やはり入母屋形式の屋根ですが竪穴建物と違い壁が表現されています。さらに、基壇が表現され、その上に建物が立て

られているのではないかと推定されます。やはりこの屋根の上にも鳥が止まっています。

スライド15左下は掘立柱建物です。穴を掘って立てた柱を基本に、床や屋根を設ける形式の建物を掘立柱建物と言います。この建物は床が地面より上にある高床式で、階段を使って上がっていくことになります。恐らくこの床下も何らかの利用があったと思います。この建物にも鳥の表現があります。

スライド15右下も掘立柱建物ですが、柱が4本表現され、スケール感が大きいですね。高床式で、欄干のような表現もあります。また、建物の前に蓋(きぬがさ)が表現されています。今でも平安貴族の儀式の再現などで貴人に従者が傘を差しかけるようすが見られますが、蓋は古墳時代の埴輪にしばしば見られるもので、その場所に身分の高い人がいることを示すシンボルになっています。これによって、この掘立柱建物は宮殿のような身分の高い人の居住を示すものと考えられます。

以上のように、家屋文鏡は単に建物が表現されているにとどまらず、それぞれ違う構造の建物形式が表現され、さらに身分なども表示されている可能性があります。古墳時代の建物や社会をうかがう上で大変重要な資料といえ、このような資料から古墳時代の建物や身分の高い人たちの住まいを推定することが可能になっているのです。

3. 古墳時代の集落

ここからは集落や豪族居館の話になります。私の研究テーマの1つが古墳時代の集落と申しましたが、私はもともと古墳や副葬遺物の研究をしていました。そういったなかで、当時の人々の住まいや村はどのようなもので、古墳に葬られる人はどのようなところに住んでいたのだろうかという疑問が湧くようになり、集落の研究を始めたのです。

このあとで話をする豪族居館の研究は、私が研究を始める以前から盛んでした。ただ、当初から、豪族居館は一般の村とは違うものであると区別されて論じられる傾向があることに疑問を感じていました。ですから、恣意的に豪族居館を抜き出すのではなく、古墳時代の村をすべて拾い上げ、その中でランクの違いがあるのか、建物の構成の違いがあるのかなどを見ることによって豪族居館を分離できたらよいという考えのもとで、集落の研究を行おうと考えました。

ただし、古墳時代集落を広く見るといっても数は

膨大ですし、地域による違いも大きいため、すべてを対象にするのは難しいと考えられましたので、普段研究対象にしている東北の検討可能な遺跡を集成し比較してみることにしました。そうしたところ、建物の数、遺構のあり方、出土遺物等から東北の古墳時代集落が5つのパターンに分けられるのではないかと考えるにいたりしました。それをこれから紹介したいと思います。

山崎タイプ 1つ目は山崎タイプと名づけたもので(スライド17左)、あまり多くない数の建物からなる村の類型になります。福島県天栄村の山崎遺跡が代表例であることから命名しました。

村の研究の難しさは、黒井峯遺跡とは違い、長期間にわたって存続した村が結果として現代見つかることが普通です。そのため、遺跡には村の廃絶時には使われなくなっていた建物も含まれており、同時に存在した建物が実際にどのくらいあったのかを識別するのが非常に難しいのです。

山崎遺跡では建物が9棟見つっていますが、出土土器を見るとこれらが同時に機能していたとは考えにくく、2～3時期におよんでいます。結果として9棟が確認されたということで、同時に存在した建物は恐らく3棟前後と考えられます。したがって、非常に小規模な村であるということが推定できるわけです。山崎タイプは古墳時代に見られる集落としては最も小規模で、なおかつ最も一般的な形の村と考えています。

スライド中の斜線が入っている遺構は、柱が存在しない建物です。柱で屋根を支えていないということですから、先ほどの黒井峯遺跡で見ついているのと同じく、壁で屋根を支える形式の建物ではないかと考えられます。隣の建物では柱がしっかり見つかっていますので、たまたま見つからないのではなく、ここには柱で屋根を支える形式の竪穴建物、壁で屋根を支える形式の竪穴建物、そして掘立柱建物の3種類の建物があることがわかります。このように、同じ形式の建物だけで村が構成されているのではなく、規模の大小や建物形式に違いがあることになります。

落合タイプ 2つ目は、福島県小野町の落合遺跡で見つかった村で(スライド17中央)、山崎遺跡に比べだいぶ規模が大きい類型です。この村についても、出土遺物などから見て同時に存在していたのは恐らく10数棟と考えられます。また、やはり柱のある建物とない建物があり、長方形の建物もあることから、

村の建物に構造・形・大きさの違いがあることがわかります。なお、この遺跡では掘立柱建物は見つかっていません。4世紀、古墳時代前期の比較的多くの建物からなる村は、決して多数存在するわけではありませんが、広く分布しています。

樋渡台畑タイプ 3つ目は、福島県会津坂下町の樋渡台畑遺跡にみられる類型です(スライド17右)。この遺跡の大きな特徴は、西側に堀が掘られていることです。段丘の縁辺に営まれた村なのですが、堀によって段丘から切り離され、なおかつ堀には張り出しが設けられ、城のような構造をもっています。掘立柱建物は少ないのですが、内部にはかなり多くの数の竪穴建物が見つかっており、柱穴のある建物とない建物がありますし、規模の違いもかなりはっきりしています。

遺跡の中の特に大きな建物跡からは、首飾りや腕輪、須恵器の器台や飾りのある壺など、さまざまなものが出土しています。それらは古墳の副葬品になっても不思議でないものです。このように樋渡台畑遺跡は、10棟以内ほどの建物からなる集落ですが、単純に比較的小規模な村とは言えず、比較的高い身分の人々が住んだ村といえます。

古屋敷タイプ 4つ目は、福島県喜多方市の古屋敷遺跡に代表される類型です(スライド18左)。この遺跡はその重要性から国史跡になりました。スライド中のスケールが100mなので、これまで見てきた類型と規模が大きく違います。最も注目されるのは、二重の堀で囲んだ方形区画が形成される点で、堀は単に方形であるだけでなく突出部が各辺につくられています。さらに、堀の内側には柵が回っています。

これがただならぬ遺跡だということは直ちにわかりますが、発掘調査の結果、区画の内部には比較的小規模な竪穴が見つかっただけでした。この点は古屋敷遺跡の悩ましいところですが、それにしても、これほどの遺跡が一般農民の村とは言えないと思います。

一方、堀の外側の北西側で掘立柱建物群が見つかりました。建物はコの字状に配置され、その中のいくつかは倉庫として使われたと考えられます。また、ここは低丘陵上に営まれた遺跡なのですが、丘陵の落ち際に大きな穴が見つかり、そこではマツリに使ったさまざまな遺物がまとめて捨てられていました。ここで何らかの祭祀が行われていたことがわかります。さらに、丘陵全体を外堀が囲んでいた可能性があります。

古屋敷遺跡では史跡指定に先立つ確認調査の際、二重の方形区画の北側に2号方形区画が見つかり、同じ性格のものではないかと考えられました。しかし、近年の確認調査によって2号方形区画は中世の遺構で、古墳時代でない可能性も出てきています。

このように、この古屋敷遺跡は規模が大きく、さまざまな性格の建物や施設が丘陵の南半に配置されていることがわかり、非常に注目すべき内容をもった遺跡であるといえます。また、古屋敷遺跡ほどはっきりとはわからないものの、このような大きな堀で囲まれた区画施設をもつ遺跡が、数は少ないのですが東北あるいは全国にいくつか見つかっています。

上ノ代タイプ 最後の5つ目は、上ノ代タイプと名前をつけた類型で、福島県須賀川市の上ノ代遺跡を標識にしています(スライド18右)。ここは道路を通すための調査によって確認されたため、道路幅の部分しかわかっていないのですが、方形の堀で囲まれた区画が見つかりました。堀の外側に堅穴建物がいくつかある一方、区画の内部については全体の半分弱しか調査されていません。ただし、区画内部で1棟見つかっている堅穴建物は堀とは別の時期のもので、そうすると方形区画の中には何もなくなってしまう。

堀の中からは、マツリに使ったと考えられる石製模造品や土器などが大量に出土しており、この施設が何らかの目的で使われたものであることは間違いないのですが、先ほどの古屋敷遺跡のように、さまざまな機能や役割が与えられたとは考えにくく、今のところマツリが行われたことはわかるものの、それ以外に何が行われたかがよくわからない類型ということになります。何故このような大規模な堀や柵を巡らしたのか、そして内部が何に使われたかははっきりわからない遺跡が、数は少ないですがいくつか確認されています。あるいは古屋敷遺跡のような遺跡かもしれませんが、現時点では性格がよくわからないため区別しておいたほうが良いだろうと考えました。

各類型の性格 以上のように、東北の古墳時代の村を見ると、山崎タイプから上ノ代タイプまで、大きく5つの集落の類型が把握できることがわかりました。

それぞれの類型の性格についてですが、古屋敷タイプは大規模ですし、いろいろな施設や遺物がそろっていることから、まさに典型的な豪族居館で、こ

のようなところに古墳に葬られる人が住んだのだろうと考えられます。しかし、古墳に葬られた人々が全員このような場所に住んでいたのかということになると疑問に思います。というのも、古屋敷タイプのように大規模な区画やさまざまな機能を持った建物をもつ遺跡は、全国的に見ても非常に限定されます。しかも古屋敷遺跡は5世紀、古墳時代中期後半の遺跡ですが、全国的に見てこのタイプの遺跡はほぼそのところに集中しています。

そのようにして見ると、古屋敷遺跡は確かに大規模な古墳に葬られるような人物が拠点にした場所だったと思いますが、古墳時代前期でも後期でも同じような遺跡が存在するかというと、そうではありません。このような例はむしろ中期のあり方であって、そのまま全国やすべての時期に当てはめるのはかえって危険であると考えようになっています。

一方、樋渡台畑タイプや落合タイプのように堀で方形に区画されていなくても、大規模であったり、質の高い施設や遺物をもつ遺跡も、古墳に葬られる人が拠点にしていたのではないかと考えています。樋渡台畑遺跡は西側に堀がありますが全体を囲っていませんし、中に宮殿のような建物があるわけでもありません。しかし、両タイプのように多くの人々が居住し、古墳の副葬品になるような器物をもっている村は、決して多くありません。ですから、このような類型も古墳との対応を考えなければならないと思います。さすがに山崎タイプは小規模で、遺跡数も非常に多いので、このタイプにまで古墳に葬られる人が住んだと考えることは難しいですが、落合タイプや樋渡台畑タイプについては、十分に可能性があると考えています。

上ノ代タイプについてはよくわからないところもありますが、あれだけ大規模な土木事業が行われている遺跡なので、やはり一般農民の村ではないだろうということは言えます。いわゆる豪族のような身分の高い人々が住んでいたのかということについては—そもそも建物が見つからないので住まいということも言えないわけですが—身分の高い人々が何らかの活動に使った場所とは言えるだろうと考えています。

4. 豪族居館(首長居館)

群馬県三ツ寺I遺跡の調査成果 次に紹介するのは、非常に有名でまさに豪族居館の代表と言えるもので、群馬県高崎市にある三ツ寺Iという遺跡です

(スライド20)。豪族居館という言葉は今回私は使っておりますが、「首長居館」と言う場合もあります。意味的にはさほど違いはありません。

三ツ寺 I 遺跡は、上越新幹線の工事に先立つ発掘調査で見つかったものですが、それ以前からここは周りの水田より一段高く、周辺の住民から「島畑」と呼ばれていたそうです。ただならぬ場所ということが調査前からある程度予想されていたところに、発掘調査によってまさに豪族居館が見つかったのです。

調査は基本的に新幹線の路線幅しか行われていませんが、発掘調査が始まると、古屋敷遺跡で見たような深い堀で方形に区画され、張り出しがあって、内部では非常に大きな建物なども見つかりました(スライド21左)。スライド21右上のような堀や古墳の葺石にも似た石を貼った部分など、非常に立派な遺構も出てきました。そして、堀の内側には三重の柵が巡っていましたが(スライド21右下)。張り出し部では、その張り出しに合わせるように柵も張り出していました。規模も非常に大きく、方形区画の一边は90mほどです。

方形区画の内部では、1号掘立柱建物と名づけられた13.5m×11.7mで面積50坪にもなる平地式建物が見つかっています(スライド22)。それほど大規模な建物が柵に沿って整然とつくられていました。建物がどのような上部構造だったかはよくわかりませんが、これだけ内部に広い空間がありますので、高床倉庫のようなものではなく、有力者の何らかの活動が行われた場所と思われる。スライド22右上のように、高床ではなく平地式の大きな建物として推定復元されています。

また、方形区画内部のちょうど中央を多重に区画する柵が通っています(スライド23上)。この柵に沿って石敷きの遺構があり、そこからはさまざまな祭祀の道具も見つかっていて、木の桶のようなものが置かれていたと推定されています。さらに、もう一つ同じような石敷き遺構が南側で見つかり、水路となる溝を外から渡して、石敷き遺構に水を流し込み、さらに南側に流すというように、水を使った何らかの祭祀行為が行われた場所と考えられます。

この区画からは井戸が見つかり、その内部から太い杉の丸太をくりぬいた井戸枠も出土しています(スライド23下)。この井戸は単に水を得るためのものではなく、聖なる井戸として何らかのマツリ

のために使われたものと推定されています。この井戸は1号掘立柱建物のすぐ脇にあって、祭祀空間をなしているものと考えられます。

堀の内部からは非常に大量の遺物が出土しました(スライド24)。注目されるのは、金属を溶かすために使った羽口という道具があり、銅が付着していることから銅を加工していたと推測されることです。スライド24左上の右側は埴塼の破片で、銅を溶かして何らかの型に流し込むためのもので、スライド24左下は鍛冶作業によって出た鉄の遺物です。このように、三ツ寺 I 遺跡では方形区画内部で金属加工が行われていたと考えられます。また、祭祀のために用いられた石製模造品も出土しており(スライド24右)、祭祀行為もこの中で行われていることがわかります。

こういった生産に関わるものや祭祀に関わるもの、それ以外にも木製品も多数出土しており、その中には実的なものや祭祀的なものがあったりと実にさまざまです。これらのことから、三ツ寺 I 遺跡では、生産や祭祀が広く行われていたことがわかります。

三ツ寺 I 遺跡では全体の4分の1くらいしか発掘調査されていないにもかかわらず、これだけのさまざまな遺構や遺物が見つかっています。他に何があるのかはわからないため、いろいろな推定がなされています。未発掘空間が全て空き地ということはないと思うのですが、大きな建物が他にもあるのか、あるいは古屋敷遺跡のような小規模な堅穴建物しかないのか、それについてはまだよくわからないのです。

三ツ寺 I 遺跡は榛名山の南斜面に位置しているため、堀は南側の水がたまりやすいところに大きく掘られていました。ただし北側は標高が高く水をためられないだろうということで、最近の復元では細い川だったのではないかと推定されています。スライド25右は、高崎市かみつけの里博物館にある三ツ寺 I 遺跡の復元模型で、東側の未発掘空間には倉庫があり、1号掘立柱建物の南側では人々が何らかの儀式を行っているという復元がされています。その可能性は十分あると思いますが、絶対そうかと問われると、絶対とは言い切れません。

三ツ寺 I 遺跡の発掘以前は、前方後円墳に葬られる人々がどのようなところに住んでいたのかという問題は、家形埴輪の研究から進められていたのですが、三ツ寺 I 遺跡の発掘調査によって、初めて遺跡

として確認されることになりました。そして、それは誰もがイメージする豪族居館にびたり一致する非常に立派な遺跡であったため、豪族居館の典型として、大きな反響をもって受け止められることになりました。

さらに三ツ寺 I 遺跡の近くには、ほぼ同じ時期の 5 世紀後半から 6 世紀初めごろにかけて、保渡田古墳群と呼ばれる 100m ほどの大きさの 3 基の前方後円墳がつくられました(スライド 26)。井出二子山古墳、保渡田八幡塚古墳、保渡田薬師塚古墳で、コの字に並ぶように大型前方後円墳があります。ここは現在史跡公園になっており、保渡田八幡塚古墳と井出二子山古墳は整備されて見学することができます。保渡田古墳群は、三ツ寺 I 遺跡の北西 1km ほどのところにあります(スライド 27)。歩いて行けるほどの距離に同時期の大型前方後円墳があり、まさに絵に描いたような対応関係が見られるということで、これこそが豪族居館のあり方なのだと誰もが思うことになりました。

三ツ寺 I 遺跡の位置づけ 先ほど私の研究成果で古屋敷タイプを紹介しましたが、これが三ツ寺 I 遺跡に近いと言ったら少し言いすぎかもしれませんが、かなり似た内容をもった遺跡であると言えます。近年、古屋敷遺跡から北西に 2km ほどのところにあるほぼ同時期の灰塚山古墳という前方後円墳が東北学院大学によって発掘調査され、古屋敷遺跡と対応すると言えるようになってきました。

このような非常に典型的なパターンが他にもあるのかということについてですが、三ツ寺 I 遺跡や古屋敷遺跡に似たような内容をもつ遺跡は、先述のとおりそれほど確認されていません。もちろんまだ見つからないだけということもあり得るわけですが、全国どこでもあるわけではありませんし、見ついている場合でも古墳時代中期にほぼ限定されます。古墳時代前期で三ツ寺 I 遺跡のような内容をもった遺跡はゼロとは言いませんが非常に少ないのです。このように、三ツ寺 I 遺跡と保渡田古墳群のような見事な対応関係は、決して古墳時代の全ての時期にどこの地域でも見られるのではないということが次第にわかってきました。

保渡田古墳群の復元整備事業を担当され、古津八幡山遺跡の調査指導部会の委員でもあった明治大学の若狭徹先生は、三ツ寺 I 遺跡が豪族の住まいと言えるのかということについて、否定はしてはもらえませんが、単に住まいにしていた場所というより、祭

祀に代表される首長が活動を行う場なのではないかと推定しておられます。私も三ツ寺 I 遺跡のような遺跡は、どこの地域のどの時期にでもあるのではなく、古墳時代中期に限定される特徴的な首長の活動拠点であると考えています。若狭先生に近い考えを持っているということです。

さまざまな居館 このような豪族居館の研究は、新潟大学の橋本博文先生が第一人者で、先駆的な研究を 30 年以上前から行っておられます。スライド 28 は橋本先生のご研究の成果をお借りしたのですが、居館にはいろいろな形や大きさがあることがわかります。三ツ寺 I 遺跡は確かに規模が大きく、大きな前方後円墳に対応するだろうということが言えるわけです。しかし、堀をめぐらす遺跡や、居館と推定される遺跡でもやや小規模なもの、一辺数十 m ぐらいしかないより小さいものもあり、決してひとつの種類、ひとつの大きさでないことが橋本先生などのご研究でわかっています。

そして、やはり注目されるのは、近畿中央部の巨大前方後円墳に葬られる人々がどのようなところに住んでいたのかという問題です。奈良盆地や大阪平野など近畿中央部では、三ツ寺のような遺跡がまだ見つかっていません。ただし、まったく見つからないのではなく、大阪城のすぐ南にある法円坂遺跡では巨大倉庫群が見つかっています。あるいは和歌山市の鳴滝遺跡でも巨大倉庫群が見つかっています。これらは一人の首長が自分の消費分だけ蓄えていた倉庫ではないわけです。こういった断片的な、しかもただものでないと考えられる遺跡が近畿の各地で見ついているのですが、三ツ寺 I 遺跡のように大きな堀で区画され、内部にさまざまな施設が集まっている遺跡は見つからないのです。そうしてみると、三ツ寺 I 遺跡が実は特殊なのではないかということが考えられるようになってくるのです。いずれにせよ、居館にはさまざまな形、大きさ、内容があり、それぞれのケースに則して考えていかなければいけません。

スライド 28 右は、橋本先生がおつくりになった豪族居館—先生は豪族居館とは言いませんが一の規模の差と古墳の対応関係を示した図です。ピラミッド型の図式を橋本先生は描いておられ、その頂点に立つのはもちろん巨大前方後円墳で、それに対応する遺跡は、先ほどの鳴滝遺跡や法円坂遺跡のような大規模倉庫群をもち、祭りの場や政治の場を備えるものです。

このように、豪族居館と総称されるものにはランクの差があって、巨大前方後円墳から小型の円墳、方墳に対応するくらいまでのあり方があるのではないかという推定を橋本先生はしています。一方で、図のように整然と対応するとは限らないということも書いておられますが、大きく見ると確かにこういった階層性や建物の構成の違いはあるだろうと私も思います。例えば、私が樋渡台畑タイプとした遺跡は、橋本先生の図の2段目や3段目に該当し、三ツ寺Iや古屋敷は図の2段目ぐらいに対応するだろうと思います。どこまで整然と対応しているかはわかりませんが、村の内容と古墳との対応が全国的な傾向として認められるだろうと考えているわけです。村全体や遺跡全体が発掘されることはなかなかありませんので、内部が全てわかる遺跡は決して多くありませんが、このような対応関係を各地域で考えていかなければならないと考えているところです。

5. 新潟の豪族居館と古墳

では、ご当地新潟ではどうなのだろうかということを見てみたいと思います。

今回の企画展でも取り上げられていますが、直径60mと新潟県で最大の古墳である新潟市秋葉区古津八幡山古墳が新潟平野を望む丘陵頂部にあり、その北西麓にある舟戸遺跡が同じころの遺跡であると以前から指摘されています(スライド30左)。果たしてどうなのだろうかというのが私も気になりますし、皆さんも関心のあるところではないかと思います。

この舟戸遺跡は全面が調査されたわけではなく、非常に部分的な調査がこれまで積み重ねられているものです。スライド30右は弥生の丘展示館のパンフレットからお借りした図ですが、第2次調査で1辺が7.5mほどと比較的大きな竪穴建物が見つかっています。同じスライドにグラフがありますが、新潟県内で見ついている古墳時代中期から後期の竪穴建物の中でも舟戸遺跡の竪穴建物がかなり上位に位置することがわかります。さらに、同じ時期と考えられる柵の跡なども見つかり、大量の土器が出土しているということで、ここが古津八幡山古墳に対応する、豪族居館の一部なのではないかという推定がされているわけです。

この2次調査1号建物に古津八幡山古墳の主が住んでいたのかということについて、私としてはその可能性は十分ある一方で、そう簡単には言えないとも思っております。この舟戸遺跡の周囲には、塩辛

遺跡、森田遺跡、高矢C遺跡など、少し時間幅もあります。古墳時代の村がいくつか展開しています。舟戸遺跡の北側には川が流れており、内水面を通過してきた終着点の舟戸遺跡付近に船着場、港があると推定されます。舟戸遺跡も含め、この地域一帯が比較的大きな集落で、その中に古津八幡山古墳に葬られた人物が居住あるいは活動の拠点にした場所がある可能性は非常に高いと考えています。一方で、舟戸遺跡2次調査区そのものと直ちに言えるかということ、そう簡単ではないと思っています。スライド31は舟戸遺跡1号建物の写真です。

新潟の豪族居館の候補として他にどのようなものがあるか見てみますと、古屋敷遺跡や三ツ寺I遺跡のように、しっかりとした堀で囲まれ方形区画をもつ遺跡はまだ見つかっていないようです。ただし、ないとは簡単に言えず、今後見つかる可能性も十分あると思います。一方、旧巻町の新潟市西蒲区御井戸遺跡は、ごく一部しか発掘調査されていないのですが、大量の土器や祭祀に使われた石製模造品、あるいは木製の祭祀具や建築材など、かなり高い地位の人物の存在を感じさせる遺物が出土しており、豪族居館の有力な候補になると考えています。旧巻町周辺には、山谷古墳をはじめとする古墳時代前期から中期の古墳がつくられています。御井戸遺跡からは幅広い時期の遺物が出てきているので、どの時期の古墳に対応するのか簡単には言えませんが、今後その辺がさらに追及されていくと思います。このように、舟戸遺跡や御井戸遺跡は、豪族居館そのものとは直ちに言えないにしても、その有力な候補になることは間違いないと考えているところです。

さらに、胎内市の城の山古墳や、新潟市東区の牡丹山諏訪神社古墳のような有力な古墳が新潟県内で近年確認されていますが、まだそれに対応する村や居館がはっきりとわかっていませんので、これらについても今後追及されていくものと思います。ただし、三ツ寺I遺跡のようなものが見つかる可能性はあまり高くないかもしれないと考えています。

おわりに

今までいろいろな話をしてきましたが、最後に、集落や豪族居館の研究から何が追及できるのかということをお話して、終わりにしたいと思います(スライド32)。

集落と豪族居館で見つかる遺物や遺構から、建物や道具がどのように使われ、そして、どのように変

わったのかということがわかります。当時の衣食住や生業も判明します。また、村跡の研究から判明することですが、黒井峯遺跡のように道が見つかったり、建物のまとまりが把握できると、集落の中の住民同士がどのような関係だったのか、身分の差があったのかなどにも研究を進めていくことができます。さらには、村と村の間にどのような関係があったのか、まったく関係がないのか、あるいはどこかの村が頂点にあってそれに従属する村があったのかなど、そういったことがわかってくる可能性があると思います。

それから、古屋敷タイプを頂点として樋渡台畑タイプと落合タイプが古墳に葬られる人々が居住した村の可能性があると申し上げましたが、当時の身分関係、階層関係、その中で古墳に葬られる人というのはどういうところに住んでいたのか、ということなども、集落の研究をする中で追及することができると考えております。さらに研究が進めば、婚姻関係、家族制度、財産がどのように管理されていたか、農業経営はどのように行われたのかなど、集落の研究は色々な方面に発展可能な分野といえます。単に古墳に葬られた人はどのようなところに住んでいたのかということだけでなく、当時の社会のあり方をうかがうことができる可能性をもっているのです。

古墳時代の研究というと、古墳とその副葬品をはじめとする遺物の研究が古くから行われているわけですが、そういった研究だけでは、今あげたようなことを知るのは困難です。古墳の研究はこれからも重視され、私も続けていくと思いますが、それだけで古墳時代が全てわかることはないだろうと思います。当時の高い身分の人が葬られた古墳の研究は大事ですが、それとともに一般の人々や中間的な身分の人々が住んだ集落の研究をしていくことでわかる部分がかかなりあるだろうと思っています。まさに車の両輪のように、古墳と集落の研究を行っていかなければならないと考えているところです。

今日の私の話はこれで終わりにしたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

古墳時代の集落と豪族居館 —東日本を中心に—

史跡古津八幡山 弥生の丘展示館企画展「豪族居館」講演会
2018年10月14日

福島大学 菊地 芳朗

スライド1

はじめに

◆今回の話の内容

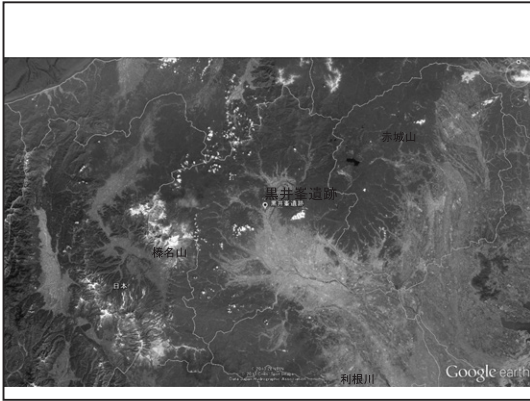
◆時間軸（菊地2010より）
本書でもらいる時期区分・暦年代と土器暦年の対照

時代	古墳時代					変遷時代
	前期	中期	後期	終末期		
年代	AD 200 - 300	400 - 500	600 - 700			
土器	TK 73	TK 216	TK 208	M 47	TK 10	TK 209
土器	須賀	青小泉	引田	佐草林	舞台	栗原
古墳	古墳1期	古墳2期	古墳3期	古墳4期	古墳5期	

スライド2

1. 群馬県黒井峯遺跡の調査成果

スライド3



スライド4



スライド5



スライド6



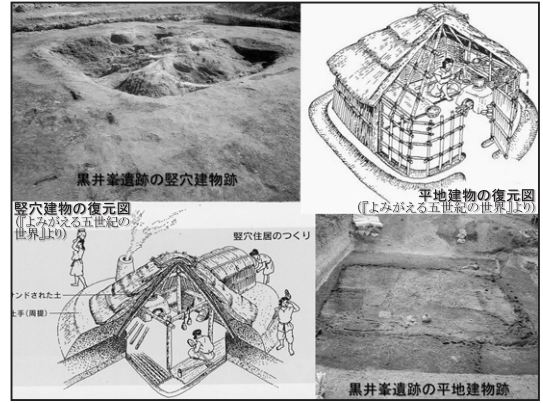
スライド7



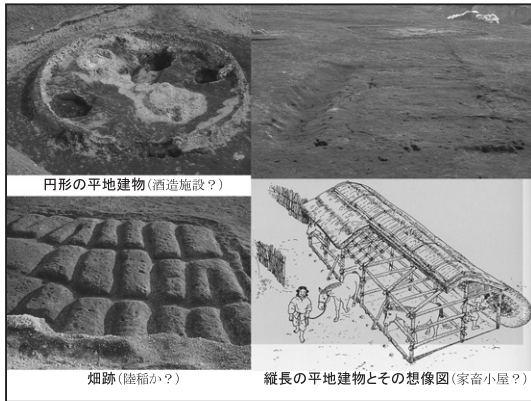
スライド8



スライド9



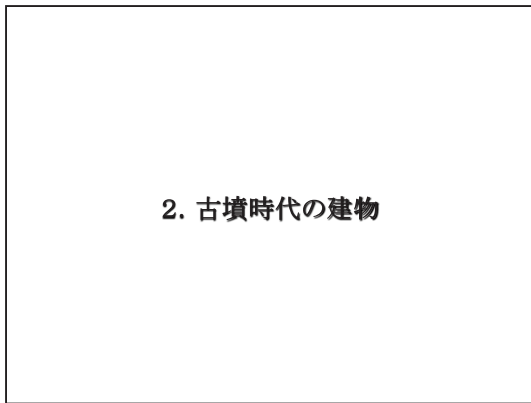
スライド10



スライド11



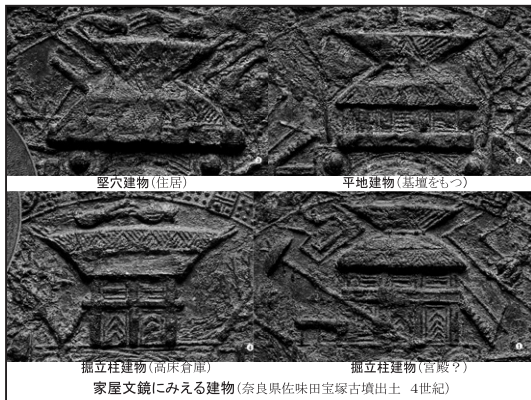
スライド12



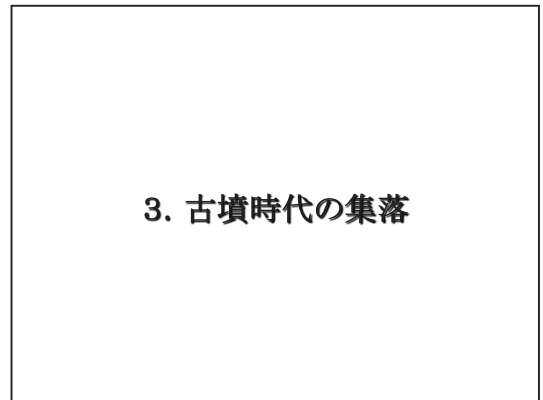
スライド13



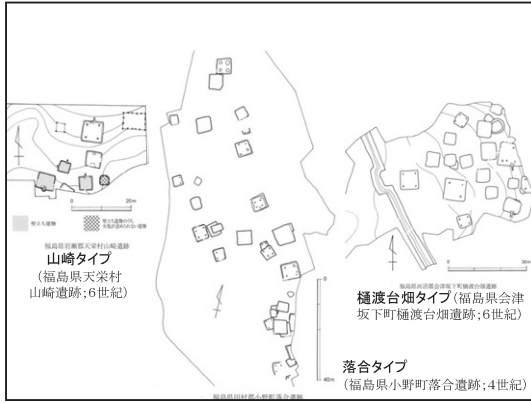
スライド14



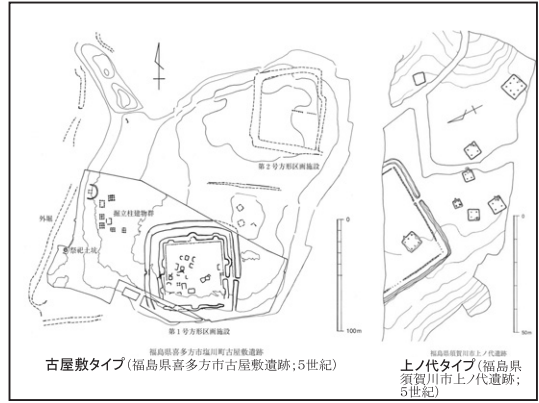
スライド15



スライド16



スライド17



スライド18

4. 豪族居館(首長居館) 群馬県高崎三ツ寺Ⅰ遺跡の成果

スライド19



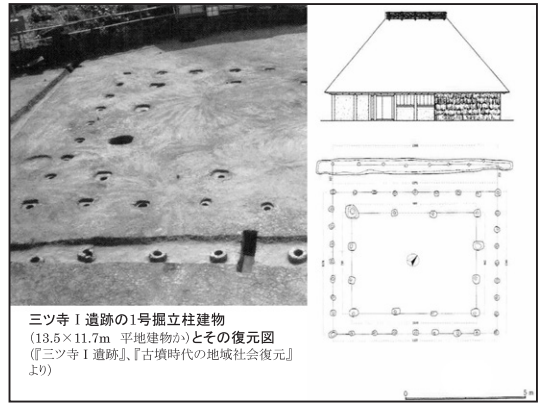
発掘調査中の三ツ寺Ⅰ遺跡(『三ツ寺Ⅰ遺跡』1988より)

スライド20



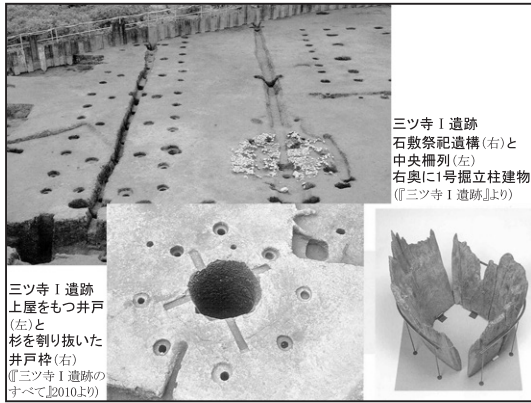
三ツ寺Ⅰ遺跡の検出遺構
『古墳時代の地域社会復元』2004より

スライド21



三ツ寺Ⅰ遺跡の1号掘立柱建物
(13.5×11.7m 平地建物か)とその復元図
『三ツ寺Ⅰ遺跡』、『古墳時代の地域社会復元』より

スライド22



三ツ寺Ⅰ遺跡
石敷祭祀遺構(右)と
中央柵列(左)
右奥に1号掘立柱建物
『三ツ寺Ⅰ遺跡』より

三ツ寺Ⅰ遺跡
上屋をもつ井戸
(左)と
杉を割り抜いた
井戸枘(右)
『三ツ寺Ⅰ遺跡の
すべて』2010より

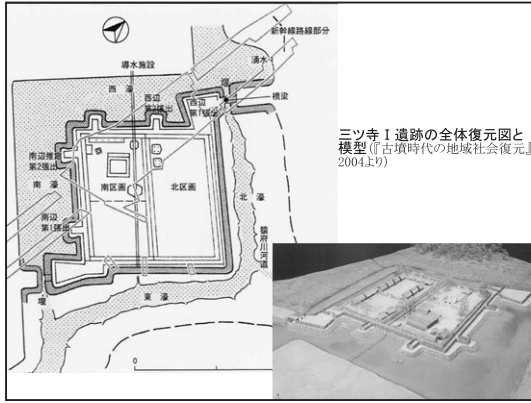
スライド23



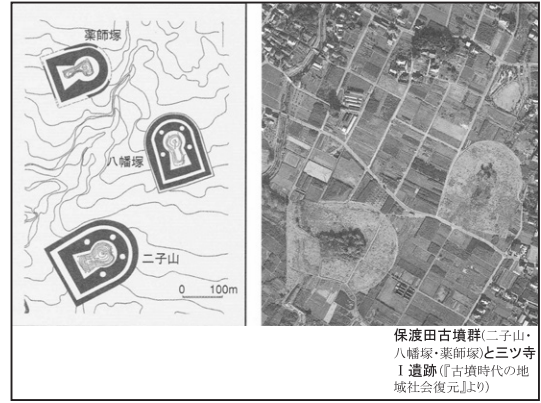
三ツ寺Ⅰ遺跡出土の羽口・埴塙・鉄滓(青銅器
と鉄器の製造を示す。『三ツ寺Ⅰ遺跡のすべて』より)

三ツ寺Ⅰ遺跡出土の石製模造品
『三ツ寺Ⅰ遺跡』より

スライド24



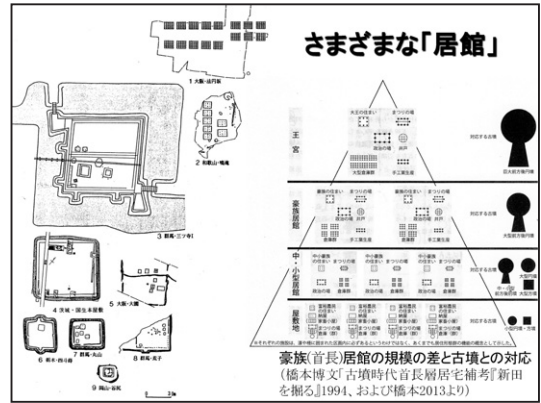
スライド25



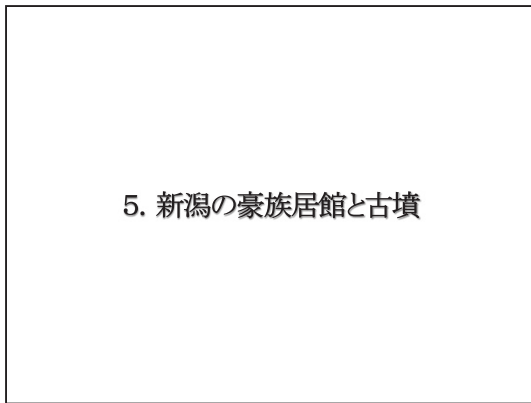
スライド26



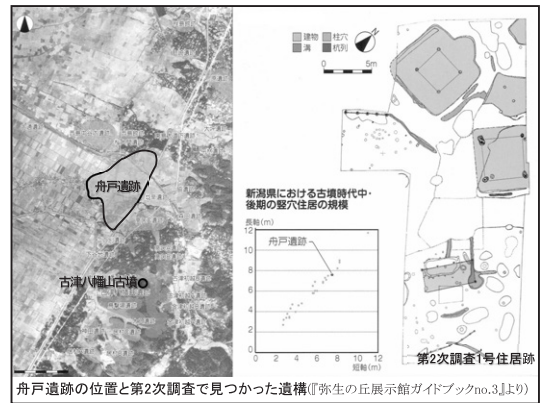
スライド27



スライド28



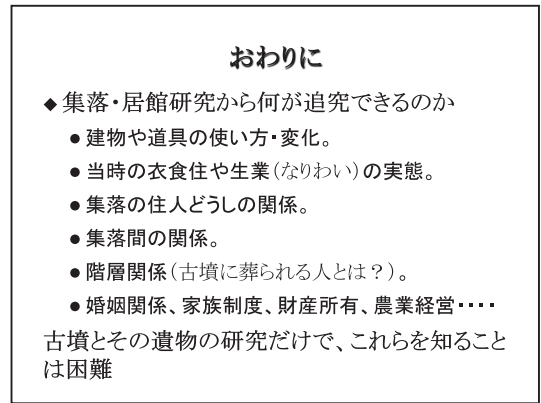
スライド29



スライド30



スライド31



スライド32

図・写真の出典

スライド2：菊地芳朗2010『古墳時代史の展開と東北社会』大阪大学出版会
スライド4、5、6左：Googleマップをもとに作成
スライド6右下：徳江秀夫2013「これが“甲を着た古墳人”だ」『埋文群馬』No.57 公財群馬県埋蔵文化財調査事業団
スライド7：著者撮影
スライド8、9、10左上・右下、11左下：石井克己編1990『黒井峯遺跡発掘調査報告書』子持村教育委員会
スライド10左下・右上、11左上・右上・右下：若狭 徹1999『よみがえる五世紀の世界』かみつけの里博物館
スライド12左：洞口正史編1990『火の山はるな 火山噴火と黒井峯村のくらし』群馬県立歴史博物館
スライド12右：杉井 健2005「古墳時代集落研究序論」『待兼山考古学論集』大阪大学考古学研究室
スライド14左：白石太一郎編1990『古墳時代の工芸』講談社
スライド14右上：著者撮影
スライド14右下：佐味田宝塚古墳現地案内板（河合町・河合町教育委員会作成）を著者撮影
スライド15：白石太一郎編1990『古墳時代の工芸』講談社
スライド17、18：菊地芳朗2001「東北地方の古墳時代集落－その構造と特質－」『考古学研究』第47巻第4号 考古学研究会
スライド20、21右、22左、23上・24右：下城 正・女屋和志雄1988『三ツ寺 I 遺跡』群馬県教育委員会
スライド21左、22右、25、26、27：若狭 徹2004『古墳時代の地域社会復元 三ツ寺 I 遺跡』新泉社
スライド23下・24左：内田真澄2010『豪族居館三ツ寺 I 遺跡のすべて～出土品を総覧する～』かみつけの里博物館
スライド28左：橋本博文1994「古墳時代首長層居宅補考」『新田を掘る』木暮仁一先生古稀記念論集刊行会
スライド28右：橋本博文2013「古墳時代の居住形態群」『古墳時代の考古学』6 同成社
スライド30・31：新潟市文化財センター2013『弥生の丘展示館ガイドブック』No.3

弥生の「鉄」がつなぐ日本海沿岸域の交流

林 大智（公益財団法人 石川県埋蔵文化財センター）

1. はじめに

ただいまご紹介いただきました、公益財団法人石川県埋蔵文化財センターの林と申します。よろしくお願いたします。

皆さん、弥生の丘展示館の鉄の展示をご覧になりましたでしょうか。新潟県の鉄器がこれだけ集まる機会はこれからもきっとあまりないと思いますので、見た方もまだ見られていない方も、今日の話が終わったあとに、林がこんなことを言っとったとか、鉄からこんなことがわかるのか、ということをお願いしながら展示を見に行っていたいただければありがたいと思います。

それでは、話のほうを始めさせていただきます。私のお話としましては、まず「はじめに」ということで、今回の講演の進め方や着目点などについて、概略をお話しさせていただきます(スライド2)。続いて、「弥生鉄器の基礎知識と製作技術」というところで、弥生時代の鉄器を考える上で必要な基礎知識とか、ちょっと難しい製鉄とか、製作技術について、かいつまんでお話させていただきます。続いて、「北陸地域の鉄器普及とその特徴」というところで、弥生時代における北陸地域の鉄器普及の概要を、時期を追って説明させていただきます、その中で、ここ新潟県域の特徴、注目すべき鉄器について、4の「新潟県域の鉄器普及と高地性集落」というタイトルでお話しさせていただきます。そして5番目としまして、弥生時代の北陸地域は玉が特産品で、非常にたくさん作られていたのですが、それと鉄の密接な関係性をご紹介します。6番としまして、それらの背後にあった地域間関係について、複数のものを対象にして、大まかに時期を区切ってご説明していきたいと思います。

まず、日本列島は弥生時代になって鉄製の道具が入ってきました(スライド3)。鉄というのは、社会構造の変化や複雑化などを議論する上で重要な要素として考えられております。現在、鉄器は私たちの暮らしに欠かせない道具として、身の回りにあふれているのですが、当時においても非常に重要な道具

として考えられていたと思います。今回の講演は、北陸地域における弥生時代の鉄器を主な対象とし、鉄器の組成や普及のあり方、各時期の鉄器製作技術などから、弥生時代における北陸地域の鉄器普及の特徴を見出していきたいと思います。その後、鉄器普及の背後にある、日本海沿岸域における地域間交流の実態に迫っていききたいと思います。

先ほど渡邊所長からもお話がありましたけれど、新潟県内は弥生時代の鉄器が少ないと言われていました。ここに日本列島における弥生時代の鉄器出土量を示したのがあります(スライド4)。上の段から、弥生時代の中期初頭から中葉、真ん中が中期の後葉から後期前葉、そして、下段が後期後葉から終末期になります。これを見ていただくと、弥生時代を通じて北部九州で非常にたくさん鉄器が出ていることが理解できるかと思います。そして、弥生時代後期後半から終末期、この時期になると、依然として北部九州が突出して多いですが、日本海側、鳥取や島根県、丹後、京都の北のほうですね、それと福井・石川県などというように、鉄器の多く出土する地域が日本海側に集中するというあり方が見て取れると思います。さながら「日本海弥生鉄器文化圏」とも呼べるような地域になるのですが、ここ北陸地域は、弥生後期に至り鉄器が豊富に出土する地域の東端に位置する地域として捉えられるように思います。確かに北部九州に比べて出土量は非常に少ないのですが、古墳時代に政治・経済の中心となっていく奈良県とか、大阪府あたりと比べても、新潟県で多くの弥生時代の鉄器が出土しており、北陸の中では南西側と比べると多くはありませんが、実は近畿や東海地域などよりも弥生時代の鉄器が多く出土している事実をまず認識いただければと思います。

2. 弥生鉄器の基礎知識と製作技術

続いて「弥生鉄器の基礎知識と製作技術」を見ていきます(スライド5)。鉄は元素記号Feで、地球の内核、マントルの部分の主成分として考えられておりまして、金属として地球上で最もたくさん存在

する物質になります。鉄というのは、中に含まれている炭素などの量によってさまざまな異なる特性を発揮する道具になります。まず鑄鉄（ちゅうてつ）というものは、鉄の中に2.1パーセント以上の炭素を含むものになりまして、非常に硬いのですが、割れやすく脆い性質を持ちます。現在でも鑄物などの材料によく使われる鉄になります。それと鋼（はがね）ですね。これはさまざまな道具として使われている鉄になります。炭素量が0.2から2.1パーセントの鉄であり、実用性の高い鉄で刃物などに用いられます。最後に、その鋼の中で錬鉄（れんてつ）もしくは軟鉄（なんてつ）と呼ばれるものは、炭素量が非常に少なく、軟らかい鉄で、折り曲げや叩き延ばしなどが容易な性質をもつものです。身近なもので言えばクギや針金などがそれに近いようなものになります。

これは砂鉄や鉄鉱石の原料から鉄器をつくり出すまでの工程を示したものになります（スライド6）。この「製錬」と言われている工程はいわゆる製鉄という作業になります。まず製錬という原料を還元し、酸素を取り除く工程により酸化鉄から金属鉄を取り出します。次に同じ「せいれん」ですが、漢字が違うこめへの「精錬」がありまして、製錬で製造された金属鉄の中から不純物を取り除いたり、炭素量を調節する工程になります。製錬によってできた金属鉄から不純物を主成分とする鉄滓（てっさい）を生成させ、分離する工程になります。そのあと、「鍛錬鍛冶」といって、具体的に言いますと精錬よりできた鉄塊から不純物をさらに取り除き、鉄錠（てってい）などの素材鉄をつくり出す工程を経て、最後に、その素材鉄を村の鍛冶屋のイメージなのですが、熱してトンテンカンテン叩いて鉄の道具をつくり出すわけです。

スライドの中段には、日本列島でそれぞれの工程がいつごろから始まったのか、また韓半島、朝鮮半島の南側でいつごろに始まったのかということを示しています。日本列島に鉄器が最初にもたらされたのがおおそ紀元前4世紀くらいになるのですが、韓国も実はそんなに変わらない、紀元前4世紀か、古くても紀元前5世紀くらいに初めて鉄という道具に出会います。ただ、その後の工程が大きく違いまして、朝鮮半島のほうでは原料の鉄鉱石から鉄をつくり出すという作業が、紀元前1世紀頃すでに行われていた可能性が想定される一方で、日本は6世紀にならないと製鉄が始まりません。その背景として

は、恐らく製鉄とか鑄造というような高度な技術の流出については、大陸や朝鮮半島が閉鎖的であった可能性が考えられると思います。

弥生時代前期末から中期初頭に至り、日本列島に初めて鉄器が導入されるのですが、その代表例として愛媛県の大久保遺跡の鉄器を左に挙げています（スライド7）。この図面を見てもらってもどれが何に使われた道具かわからないと思いますが、これらは中国東北部でつくられた鑄造鉄斧の壊れた破片を再利用して作られたもので、その一端を砥石などで研磨して変形させることによって鉄の道具に作り変えているものになります。このように、弥生時代前期末から中期中葉頃までは、大陸からもたらされた鑄造鉄斧、もしくはその鉄斧の破片を磨製石器製作などと同様の技術で再加工した道具が主体になります。ちなみに日本列島内でこの鉄斧が完全な形に遺っていたものは、福岡県比恵遺跡で1例見つかっているだけになります。

その後、弥生時代の中期後葉になると日本列島で鍛冶技術、鉄器の製作技術が確認できるようになります。鍛冶技術の導入は、まず北部九州などで確認できるのですが、北陸ではおおそ後期後半頃から鍛冶技術の普及がみられます（スライド8）。

まずタガネ切りという技法ですが、左下の鉄鏃を見ていただければわかるのですが、こういう平たんな鉄板をタガネでバンバンと断ち切りまして、鉄器の形をつくるという技法になります。村の鍛冶屋のイメージとはかけ離れており、かなり簡易な鉄器製作技術になります。

打ち延ばしは、左中央の鉄鏃の図を見ていただければと思います。棒状の鉄器を素材とし、上部だけバンバン叩いて薄く延ばし、その後、タガネ切りで形を整えて鉄鏃をつくるというやり方になります。タガネ切りに比べるとやや高度な技術で、少し熱を加えてあげたほうが鉄は軟らかくなりますので、そのあとに叩き延ばして鉄器をつくり出すという技術になります。

同じようなレベルの技術としましては、折り曲げ技法があります。右側の袋状鉄斧や鍬・鋤先の図を見てもらえばと思いますが、軟らかくした鉄を型にあてながら折り紙のように折り曲げて鉄器を形作る技術になります。

最後に、古墳時代の前期に始まっているのですが、鍛接という技法があります。これは非常に高い熱で鉄を溶かしたような状態にして、複数の鉄を合わせ

て鉄器を製作する方法になります。現在でも日本刀などを製作する際は、高温で熱した鉄を折り曲げて叩き延ばす作業を何回も繰り返して行いますが、そのような高度な技術は北陸のみならず、全国的にも弥生時代のうちには達成されていません。古墳時代前期前葉の福岡県博多遺跡で高度な鍛冶技術の痕跡が初めて確認でき、その後急速に日本列島に広がるのがわかっております。

3. 北陸地域の鉄器普及とその特徴

それでは北陸地域の鉄器について具体的に見てみたいと思います(スライド9)。まず第Ⅰ段階としまして、弥生時代の後期前葉以前を設定しました。北陸地域には弥生時代中期中葉の古段階、実年代で言いますと紀元前250年前後に鉄器導入が開始されます。これは北部九州を除けば全国的に見ても早い導入になります。第Ⅰ段階の鉄器組成としましては、左図のような鉄鏃、そしてノミ・タガネ、板状鉄斧になります。右下の板状鉄斧は、先ほど愛媛県の大久保遺跡の例で見ました中国産の鑄造鉄斧の破片を再利用したのになります。どうしてわかるかと言いますと、この上の部分が折れ曲がっていますよね。これは鑄造鉄斧の隅を含む部分が再利用されていることを示しています。このように、北陸地域の鉄器普及はノミ・タガネや板状鉄斧など、小型の木工用工具から鉄器化が進行します。なお、4のタガネの基部を見ていただきますと、折り曲げた痕跡が確認できます。ちょうどこれと同じようなものが、鳥取県青谷上寺地遺跡で出土しています。おそらく北陸地域の弥生時代後期前葉以前の鉄器については、日本海沿岸域を通じてもたらされたということが言えるかと思えます。

これらの第Ⅰ段階の鉄器は、各地域の中核的な集落や交通の要衝を占める遺跡から偏在的に出土する傾向がみられ、石川県の南加賀地域で中核的な集落に位置づけられる小松市八日市地方遺跡、JR小松駅前にはひろがる集落遺跡になりますが、この遺跡の昨年度調査で「柄付き鉄製鉈(やりがんな)」が発見されました(スライド10)。この柄付き鉄製鉈ですが、左の写真がその出土した状況になります。鉈は、柄を含めて長さが16.3センチです。ここが鉄の部分になりまして、基部は柄に挟み込まれています。柄はイヌガヤ属の心持ち材を用いた非常に精巧なもので、このグリップ部分にサクラの樹皮が使われているのですが、その樹皮まで完全に残っているなど、大変

残りの良い状態で見つかりました。この鉈の時期は、出土した土層から弥生時代中期中葉、今から約2,300年前の製品になります。おそらく東アジアで最古の木柄が完存する鉄製鉈といえるかと思えます。

これはその鉄製鉈のX線画像になります(スライド11)。鉄鉈の基部をよく見ていただくと少しでこぼこになっていますよね。実はこの鉈は完全な形をしていなくて、折れた鉈を北陸の小松市まで運び、それに合う形状の柄をつけたものになります。木柄は、よく見ていただくとここに白い線が見えるのですが、板を2枚重ね合わせしていることがX線画像からわかりました。具体的に作り方を見ていきますと、まず柄となるイヌガヤ属の木材上部を縦半分に分割します。そして、柄の細部形状や折れた鉄鉈を装着するための段をつくり出します。その後、鉈を柄に挟み込み、ずれないようにしっかりと糸を巻きつけ、グリップ部分にテープ状に加工したサクラの樹皮を巻きつけて完成になります。

実は、これと同じような作り方をしているのが、同じ小松市八日市地方遺跡で出土した把(つか)付磨製石剣です(スライド12)。小松市の発掘調査で石製の剣に把の残っているものが出土しておりまして、「柄付き鉄製鉈」とほぼ同じ製作工程で作られています。このことから、柄付き鉄製鉈については、朝鮮半島から運ばれてきた折れた鉄鉈を使用するため、小松の地で柄を製作し、装着されたことが推測されるわけです。

柄付き鉄製鉈が出てから似たものがないかと全国の調査事例をいろいろ探してみますと、非常に似通ったものが滋賀県の赤野井湾遺跡で見つかったことがわかりました。

また、グリップエンドを丸く作りだすのが柄付き鉄製鉈の特徴なのですが、大阪府鬼鹿川遺跡出土の木製品ではほぼ同じような特徴が見られます。同様の特徴は、兵庫県や岡山県のほうでも類似した資料が見つかっており、おそらく弥生時代中期の西日本で共有された特徴である可能性が指摘できます。

鉈の時期についてももう少し詳しく見ていきますと(スライド13)、紀元前250年前後というと、中国で秦の始皇帝が生まれたころにあたり、この鉄鉈がそのころ小松の地で使われていたことがわかります。

なお、日本列島で鉄器の製作が始まるのが紀元前500年ごろになりますので、この鉄鉈自体は大陸や朝鮮半島から運ばれてきた舶載鉄器ということになるわけです。おそらく、八日市地方遺跡で多数出土し

ている非常に精巧な木製容器や匙などの細部加工や仕上げを行う作業に大きな効力を発揮したのではないかと考えています。

柄付き鉄製鉈の発見が契機となって、八日市地方遺跡に実はもっと多くの鉄器があったのではないかと考えられ始めるようになり、調べていったところ、八日市地方遺跡では多数の鉄器が存在していた痕跡を木製品などで確認できました。遺跡からは、大陸から海を越えてもたらされた鑄造鉄斧、先ほど図面でもご紹介しましたが、その鑄造鉄斧を装着するための柄がたくさん出土しています（スライド14）。小松市と県が調査した両方を合わせますと13点となり、弥生時代中期では国内最多の出土量になります。従来、弥生時代中期に鉄器が多く普及した地域は北部九州にほぼ限定されると考えられていましたが、多数の鉄斧柄の存在はその認識に見直しを迫る、大きな発見となりました。

これらが出土した木柄の図面になります（スライド15）。よく見ると、鉄斧を装着する柄のこの部分の形とか大きさが少しずつ違っているのがわかるかと思えます。この違いは装着される鉄斧の形の違いを示しています。装着部の一番大きなものは、福岡県比恵遺跡で出ているような上部に二条の帯を持つ鑄造鉄斧で、中国の東北部のほうで製作されたものになります。一方、朝鮮半島で多くみられる鑄造鉄斧は袋部の横断面形が台形や長方形で、据え置いたときに袋部の端が斜めになる特徴があります。実は左中央の斧柄も装着基部が真っすぐではなくて少し斜めになっておりまして、恐らくこの八達洞遺跡のような鉄斧を装着するための斧柄と考えられます。そして、最下段の装着部が細長い斧柄については、他の斧柄よりも装着部幅が狭くて薄いという特徴が見られるもので、朝鮮半島の葛洞遺跡で見つかった鉄斧、これも鑄造鉄斧になるのですが、そのような鉄斧がちょうど合うのではないかと考えています。

そして左下は、これが鉄剣の把になります。把に装着される細長い部分、これを茎（なかご）と言うのですが、この部分が長いという特徴がみられます。このような茎の長い鉄剣というのは、同時期の朝鮮半島でもほとんど見つかっていませんので、もしかしたら二条突帯をもつ鑄造鉄斧と同じように中国のほうからもたらされたものかもしれません。

八日市地方遺跡で出土した柄付き鉄鉈や鉄斧などが装着されたであろう木柄から想定される弥生時代中期における北陸の鉄製工具組成としては、まず斧

では、先ほどからよく提示しております二条凸帯を持つ鑄造鉄斧があげられます（スライド16）。また、これに装着部の端が斜めになるものや、細身の鑄造鉄斧と、鑄造鉄斧の再加工品が加わります。そしてノミは袋状鉄ノミが想定され、鉈はスライドで提示しました柄付き鉄製鉈が確認できます。それ以外に小松市八日市地方遺跡からは左下のような鉄片など、長さ1センチにも満たないような青銅と鉄の微細な道具が出ています。写真では分かりにくいと思うのですが、左の青銅器、実は下端に刃が研ぎ出されており、小型のノミだったことがわかっています。弥生時代中期には、石製工具も存在していますが、それを除く鉄製工具の組成については、朝鮮半島の初期鉄器と類似する組成が、弥生時代中期の北陸ですでに達成されていた可能性を指摘でき、北陸地域は、列島内で鉄器生産が始まる前から、バラエティー豊かな鉄製工具組成を持っていたことが明らかになってきました。

弥生時代後期中葉から後期後葉（第Ⅱ－1段階）になりますと、ほぼすべての器種、利器が鉄器化しており（スライド17）、鎌や鋏・鋤先などの農具も出現しています。これら1個1個見ていくわけにはいきませんが、ほとんどの鉄器が長さ10センチ以下の小型品で、鉄板も非常にうすいものが主体となります。中期の鑄造鉄斧は非常に大きい、重厚なものでしたよね。それらと比べると、利器としてはやや退化したように見えるところもあるのですが、一方で、右下の鉄器は三角形鉄片と呼ばれるもので、先ほど製作技術のほうで見たタガネ切りを行ったときに生じる残滓になります。これが出土することで、弥生時代後期中葉頃になりますと、鉄器を製作する鍛冶技術が出現していることを読み取れるわけです。また、中央上の鎌を見ていただくと、茎の部分の厚さと身の部分の厚さが違って、茎が厚くて、身がうすくなっているのが見てとれるかと思えます。これは、身の部分を叩き延ばして鎌をつくっていることを示しています。

この時期は、鉄器の器種が豊富にみられると共に、各器種の形状も、同時期の山陰地域の様相と非常に似通っています。そのため、弥生時代中期と同様、これらの鉄器や鍛冶技術は、日本海沿岸地域を西側からリレー式にもたらされた可能性が高いと考えられます。

また、北陸は、棒状のノミやキリみみたいな鉄器が非常にたくさん出るのが特徴的な地域になるのです

が、これらは弥生時代における北陸地域の特産品であった管玉や勾玉などの石製ビーズを主体としたアクセサリー生産に使われた可能性が指摘されています。一方、これら小型鉄器が主体を占める中で目立って重厚な鉄斧が確認できます。左下は新潟県三条市経塚山遺跡から出土した板状鉄斧になります。身の部分がとても分厚く、縦断面形は紡錘形を呈しています。企画展で実物が展示されているので見ていただければと思いますが、実物は実測図よりもっと分厚く見えると思います。こういう鉄器というのは、打ち延ばしやタガネ切りみたいな簡易な鍛冶技術では製作できませんので、この鉄斧自体はおそらく朝鮮半島から運ばれてきたものといえるでしょう。

弥生時代後期も中期と同じように斧などの木柄が出土しております。中期と違う特徴としましては、柄の種類が多くなり、法量の差もはっきりしてくるところになると思います（スライド18）。

これも装着される鉄器を想像してみますと、下段左右の柄は吉野ヶ里遺跡で見つかった朝鮮半島で製作された鑄造鉄斧が想定されます。上段中央の柄は、同じく吉野ヶ里で見つかったような中型の袋状鉄斧が、そして右上の装着部が短く幅の狭い柄には小型の袋状鉄斧が想定できます。また、下段中央は先ほど見ました経塚山遺跡のような板状鉄斧を挿し込んで使う柄になります。これらを見て明らかのように、斧は大・中・小の法量が明瞭に分化しておりまして、おそらく作業工程により使い分けが行われていたのではないかと思います。

鉈につきましては、先ほどご説明しました柄付きの鉄製鉈から非常に大きく変化します。左上のように、棒の一端に溝状のくぼみをつくりまして、そこに鉈下半の板状部分を落とし込む造りになります。このように、鉄器の増加に対応するように、木製品からも鉄器化がかなり進んできたことが読み解けるのではないかと思います。ただ一方で、この時期には鉄製農具が出現しており、木製農具も多数見つかったのですが、鉄の刃を装着した痕跡がみられる木製農具は弥生時代のうちには確認できません。これら鉄器と木製農具の矛盾については、道具の使用する場所や保有形態が変化した可能性も含めて、現在検討中の課題になります。

さらに、弥生時代後期になりますと、武器の装具、手で握る把の部分や鞘などの出土量が大幅に増加します。これも装着された鉄製武器を推測してみましょう。提示した木製品のほとんどは白江梯川遺跡

のもので、右下のものだけが石川県宝達志水町の萩市遺跡出土資料になります（スライド19）。白江梯川遺跡は、石川県小松市に所在しており、八日市地方遺跡から梯川という河川を少し遡ったところに位置しています。左上は、石川県金沢市岩出うわの遺跡から出土したような短剣を装着するための把、右上は短剣の鞘になります。鞘は内側を浅く削り込んだうすい板材を2枚合わせて、紐などでグルグル巻きにして留めていたものと思われます。また、下段中央・右のような非常に長い刀の鞘も見つかっておりまして、これに対応する刀については、この福井県原目山墳墓群や石川県の七野墳墓群などのお墓に副葬されたものなどが想定されます。当時の日本列島では、このような大きな刀を製作する鍛冶技術がまだ導入されていなかったものと考えられるため、弥生時代後期の北陸には、中国や朝鮮半島から運ばれてきた長大な鉄刀を所有する人々が、集落に存在していたことを示しているものと思われます。

続く弥生時代終末期、紀元後3世紀頃になると、鉄器の出土量はさらに増加して大きなピークを迎えます（第Ⅱ-2段階、スライド20）。特に、金沢市塚崎遺跡では多数の鉄器が出土しています。塚崎遺跡では、特徴的な袋状鉄斧も確認でき（左側中央）、袋部の端部が折り曲げられて二重になっています。その右側は石川県小松市の八里向山遺跡から見つかった袋状鉄ノミで、この時期の北陸地域には、これらの鉄器を製作できるような高度な鍛冶技術はまだ導入されていません。おそらく北部九州で製作され、北陸地域まで運ばれた鉄器になります。すなわち、この時期は、弥生時代後期中葉から後期後葉の資料でも見られた経塚山遺跡出土袋状鉄斧のような遠隔地からもたらされた鉄器が集落の中で増加するという状況が認められます。

また、塚崎遺跡の21号竪穴建物からは、20点程の鉄器が1つの建物からまとまって出土しました。そのようにまとまって鉄器が出土することは前段階には見られなかったもので、鉄器の保有形態のようなものも変化していた可能性が考えられます。しかしながら、木を伐採するときなどに用いられる大型の伐採斧はこの中にありません。それらについては地域内で製作されることはなく、前段階と同じように朝鮮半島などから舶載された輸入品が用いられていたようです。一方でこの頃には、前段階よりも高度な鍛冶技術が普及しているようで、右上2点のような袋状の基部を持つ鉄製利器というのは、他地

域の類例が乏しいので、おそらく北陸地域で製作されたのではないかと考えています。このように、弥生時代終末期になると、小型品であれば立体的な鉄器を製作することも可能になってきました。

この段階に鍛冶技術が普及したことは、鉄鏃の形態からもうかがうことができます(スライド21)。福井県や石川県などの北陸南西部地域から新潟県の西側までのエリアにつきましては、このように頭が三角形で、お尻(茎)の部分が棒状の有茎圭頭式鏃と、茎がなくて頭が三角形の無茎三角形鏃が主体になります。また、新潟県から長野県辺りの中部高地では、茎がなくて頭が三角形の無茎三角形鏃で、身に1・2個の円孔を開けたものが主体を占めます。一方、太平洋側につきましては、頭は三角形で茎のある有茎三角形鏃が主体となります。同じ茎のある北陸南西部とどう違うかという、太平洋側の鏃は、茎部分が板状になっているものが多くみられます。これらの違いは隣接地域との交流関係や鍛冶技術の違いが大きく影響しています。山陰地域などの日本海沿岸域と類似する形態・組成の北陸南西部では、タガネ切りだけでなく、打ち延ばしなどの鍛冶技術を駆使して鉄鏃製作を行っているのに対して、その他の地域は、扁平でうす鉄板を用いており、頭の部分が角張るものが多くみられます。これはタガネ切り主体の簡易な鍛冶技術で鉄鏃が製作されていることを示しており、弥生時代後期以降にそれぞれの地域で小型鉄器の製作が行われた結果、鉄鏃に地域性が現れたものと考えられます。その中で、北陸地域は、鉄器の出土量や器種が豊富であると共に、鍛冶技術も比較的高い技術を持っていたということがうかがえると思います。

また、弥生時代の後期中葉から終末期には、墳墓への鉄器副葬が開始されます(スライド22)。弥生時代後期中葉から後葉には、左下のような劔が副葬鉄器の主体になっていたのですが、終末期になると刀や、把頭に輪っかのついた素環頭刀・刀子などが主体になります。そもそも、これらの素環頭刀は、威信を表象する役割を持つ武器として扱われており、終末期に見られる副葬武器の変化は、大陸の風習、好みが反映されたものと考えています。ただし次で、それらが北陸の人々に完全な形で理解されていないということをご説明するのですが、そのような中国や朝鮮半島で威信を表すような武器もお墓の副葬品として北陸地域まで運ばれているわけです。

これらの副葬鉄器は、集落から出てくる10センチ

に満たないような小型品と比べ、非常に長く重厚なものが多いといった特徴があります。これは、両者が同じ日本海沿岸地域を運ばれてきた鉄器ながら、流通の経緯や過程が異なっていたことを示しているものと考えられます。おそらく副葬鉄器などの重厚な鉄器は首長間の交流などにより、遠隔地から運ばれてきたものである一方で、集落出土の小型鉄器は日本海沿岸を西方からリレー式に渡ってくるため、どうしても東へ向かうに従い、小型品が多くなるという特徴が見られるのではないかと考えています。このように、弥生時代後期後葉から終末期の北陸には、日本海沿岸域の集落をリレー式に運ばれる小型鉄器と、首長層が管理するような遠隔地から直接的に運ばれる重厚な副葬鉄器に示される二重構造の流通システムが存在していた可能性を指摘できます。

先ほどお話ししたように、素環頭刀というのは威信を表すような貴重な武器なのですが、鳥取県などの山陰や北陸地域などの日本海沿岸域では、この重要な情報が欠落した状態で流通してしまったようで、これらの地域では把を装着する際に、環頭の部分が邪魔になるので、これを断ち切って地域独自の把に付け替えるという行為をどうも行っているようです(スライド23)。

4. 新潟地域の鉄器普及と高地性集落

次に新潟地域における鉄器の普及について見てみたいと思います。現在、新潟県で発見されている弥生時代の鉄器は後期後葉以降に限られます。若干前後するかもしれませんが、鉄器が見つかった遺跡の数は14遺跡で、点数は48点です(スライド24)。北陸南西部に比べると確かに出土量は少ないですが、大和などの近畿や東海地域よりも多く、出土総量に対して遠隔地から運ばれてきた重厚な鉄器が多いという特徴がみられます。これら鉄器出土遺跡のうち10遺跡は高地性環濠集落であり、新潟県では、弥生時代の鉄器が高地性集落に偏在して出土する傾向がうかがえます。また、小型鉄器の主な供給元と考えられる北陸南西部地域と隣接する北陸北東部系土器が分布するエリアはもとより、さらに東側の東北系土器が主体となるエリアにも鉄器の出土がみられることは特徴的です。近年、北海道で弥生時代中期の鑄造鉄器再加工品が見つかっておりまして、恐らく新潟県でも近い将来、中期に遡る鉄器が見つかるのではないかと私は考えております。

具体的に見てみましょう。小さい図面になり申し

訳ありませんが、右側に新潟県の弥生時代後期から終末期の鉄器組成と、比較として石川県の組成を並べております(スライド25)。新潟県のほうで針と鍬・鋤先が少し多く、石川県で鍬と鉈が多く見られるといった違いはありますが、どちらの地域も豊富な種類の鉄器を揃える点が類似しています。そして、先ほどもお話ししましたように、遠隔地から運ばれたと考えられる鉄器がみられます。長岡市姥ヶ入南遺跡の袋状鉄斧や三条市経塚山遺跡の板状鉄斧がその代表格で、姥ヶ入南遺跡から出土した中央の鉄剣もおそらく朝鮮半島製と推測されます。このように、鉄器の量は石川県と比べて少ないですが、器種の豊富な点で共通しており、遠隔地から運ばれた鉄器が多く見られることも再確認できます。さらに、東北系土器の影響が色濃い地域、上段中央は村上市山元遺跡で見つかった鉄剣ですが、そのような地域にも、確実に鉄器が運ばれています。

少し範囲を広げて鉄器組成を比べてみたいと思います(スライド26)。少し文字が見づらいですが、色の違いを比べていただければと思います。この赤で示した鍬、黄色の板状鉄斧、うすい黄色の刀子が太平洋側の東海地域周辺で多いのに比べて、北陸では、多種類の鉄器が見られ、また出土量も多いという特徴があるわけです。

ここからは、新潟県内でトピックとなる弥生鉄器をいくつか取り上げていきたいと思えます。これは新潟市の古津八幡山遺跡から出土した鉄剣になります(スライド27)。長さが約20センチ程度で、この辺り、関(まち)というのですが、その部分とこの茎の所に3つ孔があげられています。また、関付近には斜めの線が認められ、その上部にも斜めに帯状の付着物が見られます。これらの痕跡から、鉄剣の茎に鹿角の枝分かれ部分を利用して製作された把が取り付けられており、把縁側には群馬県有馬遺跡と同じような斜めの装具を取り付けていたことが推測できます。このような鹿角製の把を取り付けた鉄剣は、長野県とか群馬県の辺りに多数確認でき、日本海側の北端としてはこの古津八幡山遺跡、そして千葉県とか静岡県などの太平洋側にも分布します。これらが分布するエリアは、ぐるぐる巻きにした鉄製腕輪とか、輪状にした指輪のような鉄器・青銅器が特徴的に見られる地域でありまして、独自の金属器文化圏を形成しているようです。先ほども述べましたが、古津八幡山遺跡はこの金属器文化圏の北端に位置すると共に、日本海沿岸域の東西を結ぶ結節点という

交通の要所を占める遺跡として捉えることができるのではないかと考えております。

続いて、先ほどもご説明いたしました新潟県姥ヶ入南遺跡から出土した袋状鉄斧です(スライド28)。非常に重厚で、袋部の閉じ合わせが密着しており、どこが閉じ合わせかわからないほど丁寧で、非常に高度な鍛冶技術で作られたものになります。企画展で展示しているのでぜひ見ていただきたいのですが、実はこれに類似する資料というのは日本列島内で見つかっておりません。重厚で閉じ合わせが密着し、袋部の横断面形が円形の袋状鉄斧は、同時期の朝鮮半島の東南部辺りで確認できます。この地域というのは、良洞里遺跡のように渦巻状装飾を付ける鉄剣とか、儀礼に使う道具、儀器が顕著に見られる地域としてよく知られているのですが、弥生時代の列島内でこれと類似した資料は、姥ヶ入南遺跡から比較的近い長野県の北側に位置する木島平村の根塚遺跡で見ついています。この根塚遺跡では上部に孔が開けられた「提砥」と呼ばれる砥石が出土しており、やや時代は下りますが、朝鮮半島の三国時代の新羅周辺では、盛装の際にこの提砥の上部に金や銀製の飾り金具をつけて腰にぶら下げて佩用する装身具として取り扱われたものになります。これらがセットで根塚遺跡に運ばれていることは、朝鮮半島と長野県北部まで、直接的な人の移動を介した交流が実はあったのではないかと推測され、新潟県の姥ヶ入南遺跡の袋状鉄斧も流通ルートの途中で類例が確認できないことから、同じく直接的な交流があった可能性が考えられます。

5. 「鉄」と「玉」

続いて、5「鉄」と「玉」という所から始めさせていただきます(スライド29)。ここでは鉄の流通と非常に関係の深い、玉のお話をしていきたいと思えます。北陸地域は、新潟県糸魚川周辺のヒスイ、新潟県佐渡の猿八、石川県小松市滝ヶ原周辺で産出する碧玉など、日本列島の中で質・量ともに抜きん出た、一大産地を近くに持つという地理的な特徴により、縄文時代から盛んな玉作りを行った地域として知られております。

実は柄付きの鉄製鉈や多数の鑄造鉄斧の柄が出土した八日市地方遺跡、そして弥生時代後期から終末期の鉄器が多数出土した石川県金沢市塚崎遺跡は、碧玉製管玉をはじめとする石製ビーズの大規模生産地としても著名な遺跡になります(スライド30)。左

下の写真が八日市地方遺跡から出土した玉類になります。八日市地方遺跡では地元で産出する碧玉や、糸魚川周辺から運ばれてきたヒスイを使用して石製ビーズを大量に生産しています。また、右側は塚崎遺跡の遺構を時期ごとに並べた図になります。上段が後期後葉、下段が終末期になります。赤く塗っているのは鉄器が見つかった堅穴建物を示していて、緑色の印をつけているのはその建物で玉作りを行っていることを示しています。見ていただければすぐに気づかれると思うのですが、玉作りを行っている建物に高い頻度で鉄器が相伴していることが読み取れるかと思えます。

さらに、弥生時代の後期後葉から終末期の北陸では、墳墓の副葬品などに舶載鉄器が増加してきます(スライド31)。舶載鉄器が出土した遺跡は黒丸で示しており、緑色塗りした部分はその時期に玉作り遺跡がまとまって見つかった範囲になります。玉作りをまとまって行っている範囲内に多くの舶載鉄器(黒丸)が出土し、両者の出土地域はほぼ重なることが図からうかがえると思えます。おそらくこれらの地域では、鉄という必需材を獲得するための交換財生産として、玉作りが位置づけられていた可能性を指摘できるかと思えます。

6. 日本海沿岸域の「鉄」をめぐる地域間交流

鉄と玉が交換財として活発に日本海沿岸を行き来していた可能性を指摘しましたが、ここからはそれらの動きに伴って、またその背後で行われた日本海沿岸域の地域間交流の様相を具体的に見ていきたいと思えます。

まず弥生時代中期の玉の流れです(スライド32)。糸魚川周辺のヒスイが八日市地方遺跡をはじめとする北陸の遺跡に運ばれ、勾玉などに加工され、地元でつくられた碧玉製管玉などと合わせて、北部九州まで運ばれていることを示しています。近年、八日市地方遺跡では右下の写真のように、お墓でもない所からヒスイ製の垂飾と碧玉製の管玉で構成されたアクセサリーが連なったままの状態で見つかりました。おそらく北陸から北部九州まで運ばれた「玉」の中には、素材として運ばれたものもあれば、管玉や勾玉成品がまとめて運ばれたもの、あるいは写真のように連にしてアクセサリーの状態で運ばれたものなどがあつたのではないかと考えられます。それらの玉と交換して、北陸が獲得したものの中に柄付きの鉄製鉈の鉄部分が含まれていたのではないかと

考えているわけです。

同じく中期後葉には、信州方面との交流も活発に行われていました(スライド33)。長野県の松原遺跡や榎田遺跡などで重量のある、機能性の高い磨製石斧がまとまって製作されているのですが、この石斧が地元の土器様式である栗林式土器に伴って南東側の関東地域周辺や、日本海沿岸地域の東西など、非常に広範囲に運ばれました。その流通の拠点となったのが、埼玉県の北島遺跡と、日本海側では新潟県上越市の吹上遺跡になります。特に吹上遺跡は、佐渡で盛んに製作された赤い鉄石英製の管玉や、日本海沿岸域を運ばれた鉄や青銅器などを関東方面に流通させるような重要な役割を担っていたのではないかと考えられます。

同時期の日本海沿岸域の交流は、骨や鹿の角などの骨角器の道具からもうかがえます(スライド34)。右は八日市地方遺跡から出土した鹿の角で作られたアワビオコシと呼ばれる道具で、岩に貼り付いた貝などを採集する道具と考えられています。類似するものは、鳥取県青谷上寺地遺跡などの山陰、そして朝鮮半島南部の靉島遺跡など、日本海沿岸の集落で出土しています。おそらく、内陸の村に住む人々がりレー式に物資を交換する交流以外に、漁労民による海を介した飛び地的な交流があつたことを、この資料は具体的に示しているのではないかと思えます。

先ほどから、流通の拠点として八日市地方遺跡や吹上遺跡という遺跡名をあげてきましたが、交換や交流を継続的に進めていくためにはルールとか基準というものが必要になってきます。考古学では非常に解明しづらい分野になるのですが、実はその謎を解く鍵となる遺物の研究が近年進んできています。それがこの「権(錘)」です(スライド35)。上部を吊り手状に加工して、孔を開けているものが棹秤の錘で、円筒状のものは天秤ばかりの錘ではないかと考えられています。この権というのは、現在までに全国各地の名だたる拠点の、中核的な遺跡から顕著に出土しておりまして、新潟県を代表する吹上遺跡ではこの棹秤の石錘、私が住んでいる石川県を代表する八日市地方遺跡ではこの天秤ばかりの錘と考えられる石製品が出土しています。

続いて弥生時代の後期から終末期になりますと、日本海沿岸域の玉の流通も少し変化していくようです(スライド36)。北部九州に向かう玉はこの島根県の花仙山産のものが主体となりまして、北陸産のヒ

スイや碧玉のまとまった流通は北部九州においてはあまり認められません。一方、北陸では玉の石材が碧玉からもう少し軟質の緑色凝灰岩という石材へと変化し、玉作りに鉄製工具の利用も始まるなど、大量生産を志向した玉作りが行われ始めます。そのような中、北陸南西部地域で生産された玉は丹後や山陰地域に、北陸北東部のほうで生産されたものは中部高地や関東地域周辺に運ばれていたと考えられています。

実は弥生時代後期という時期は、それまでにないくらい北陸の南西部地域と山陰地域で密接な交流が見られる時期であります。左図には花卉形の模様が彫られた極めて精巧な木製高杯の分布図、右側には木製桶の図面を提示しており、上が石川県の事例、下が島根県の姫原西遺跡から出土したのですが、高杯と桶のどちらも、並べるとどちらの地域で出土したのか区別ができないくらいに似通っています(スライド37)。さらに、この両地域は、同時期の木製品全体の組成や、器種ごとに用いられる木材の樹種も似通っている点で、頻繁な人・物資の往来があったことを推測できます。

もちろん、これら物資の動きから見た交流というのは、遺物の種類によって異なる特徴や様相を見せ、交流の実態把握を困難にする要因になったりします。ここでは、右上に四隅突出型墳丘墓という弥生時代後期後葉から終末期頃のお墓の分布、下は弥生時代後期後葉頃の土器の分布で、左下が高杯、右下が装飾豊かな壺の分布を示したものになりますが、これらを見てみると、この装飾性の高い壺が山陰地域と北陸の南西部地域に分布しており、円柱状の脚を持ち、環状の取手がつく高杯は、北陸南西部よりも少し東側のエリアと丹後のほうに集中する状況が見てとれ、なおかつ両者が排他的に存在するという事も読み取れそうです(スライド38)。

弥生時代中期のアワビオコシで見られたような遠隔地間の交流は鉄器以外でも見出すことができます。北部九州系の土器は、先ほど見た山陰系の装飾壺や丹後系の高杯が、北陸の中でまとまった地域に集中していたのとは異なり、日本海沿岸地域に点在しています(スライド39)。図上に黒丸で示したものが北部九州系の土器が出土した遺跡で、東端は新潟県柏崎市の開運橋遺跡にまで到達しています。特徴としましては、煮炊きに用いる甕ではなくて壺が多いということがあげられます。これと同じような分布を示すものとして、九州型大形石錘があげられま

す。三角形で示したものがその出土地になります。九州型大形石錘は、下端が平坦な糸島形と、それ以外の紡錘状や、下端が少し丸みを帯びる博多湾形に大きく区別され、この博多湾形が、南は鹿児島県、東は北陸地域にまで拡散する状況が見てとれます。北陸では福井県から富山県にドットが落ちていますが、先ほど渡邊所長さんとお話をしていたところ、新潟市内に多くみられることを教えていただき、図面も見せてもらいました。どうも複数の遺跡でたくさん見つまっているようです。今後、新潟の方で研究を進めていただけると、九州型大形石錘が北部九州の次に多く出るのは新潟県ということになるかもしれません。これらから読み取れる交流は、地域を単位とした継続的なものではなくて、日本海を東西に往来していた「海人」、漁労民などを介した遠隔地間の交流の存在を裏づけるものと考えられます。

また、従来は山陰型甕として山陰を中心に特徴的な分布を示す土製品があったのですが、近年、朝鮮半島で同時期の資料が増加してきたことで土製の煙突という評価が定まってきました(スライド40)。朝鮮半島の出土例と非常によく似たものが島根県の勝負遺跡などの山陰地域に存在しており、それらから派生したであろうものが北陸だとか広島のほうに分布しておりますので、朝鮮半島のものがまず山陰地域に導入され、そこから周辺地域に拡散していく様子を読み取ることができます。

さらに、より朝鮮半島と直接的な交流を示す可能性がある木製品が、良將里遺跡で出土しています。この木製品は、韓国の研究者の方が農具とされているものなのですが、実はそれとすごく似通った木製品が、石川県小松市の漆町遺跡と新潟県糸魚川市の笛吹田遺跡で見ついています(スライド41)。右下が漆町遺跡出土のもので、これは木製の釣瓶、井戸から水をくむ釣瓶と考えられていまして、先ほど紹介したような土製煙突とかこの木製釣瓶などは、交易品というよりもより生活に密着した道具であると考えられますので、姥ヶ入南遺跡出土の袋状鉄斧で想定できたような人の移動を伴う直接的な交流の存在も、このような資料で裏づけられるのではないかと考えております。

7. まとめ

最後に、これまでのお話を簡単にまとめますと(スライド42)、北陸地域は北部九州や山陰と連動した鉄器普及がみられる日本海弥生鉄器文化圏の東端に位

置づけられ、バラエティー豊かな鉄器普及が見られる地域とご紹介しました。その中でも、新潟県域は弥生時代後期後葉以降の高地性環濠集落に鉄器が集中するという特徴的な分布が見られます。そして、副葬鉄器を主体に遠隔地から運ばれた鉄器が顕著に見られるのも北陸の特徴ということがわかりました。これは集落をリレー式に運ばれる小型鉄器に対して、副葬鉄器は非常に重厚であることから、首長間レベルなど、小型鉄器とは異なる要素に起因する広域な地域間交流でもたらされたものと考え、同じ日本海沿岸域を流通経路としながらも、流通システムが二重構造であった可能性を指摘しました。

また、器物の種類によりさまざまなレベルの交流が存在しますが、その中でも姥ヶ入南遺跡で見つかった袋状鉄斧や笛吹田遺跡で出土した木製釣瓶などのように、朝鮮半島と直接的な交流が存在した可能性を示す資料も指摘できたように思います。すなわち北陸地域は、弥生時代を通じて日本海沿岸地域の東西や中部高地などをつなぐ交流拠点として機能していた地域と考えることができ、今回のお話でその実態に若干迫れたのではないかと考えております。

以上で私のお話を終わらせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

平成30年度 史跡古津八幡山弥生の丘展示館企画展3
「鉄-弥生-古墳時代の鉄器-」関連講演会

弥生の「鉄」がつなぐ 日本海沿岸域の交流

公益財団法人 石川県埋蔵文化財センター
林 大智

スライド 1

講演内容

- 1 はじめに
- 2 弥生鉄器の基礎知識と製作技術
- 3 北陸地域の鉄器普及とその特徴
- 4 新潟県の鉄器普及と高地性集落
- 5 「鉄」と「玉」
- 6 日本海沿岸域の「鉄」をめぐる地域間交流
- 7 まとめ

スライド 2

1 はじめに

- ・「鉄器」-弥生時代の日本列島に導入が開始
※社会構造の変化や複雑化などを議論するうえで重要な要素と考えられる。
- ・北陸地域における弥生時代の鉄器を主な対象
 - ◎鉄器の組成や普及のあり方
 - ◎各時期の鉄器製作技術

※弥生時代における鉄器普及の特徴見いだす

↓

鉄器普及の背後にある日本海沿岸域における地域間交流の実態に迫る。

スライド 3

弥生時代を通じて北部九州の出土量多い

スライド 4

2 弥生鉄器の基礎知識と製作技術

- ・「鉄」:元素記号Fe
地球内核の主成分と考えられており、地球上に広く多量に存在する。
- 「**铸铁**」:2.1%以上の炭素含む。硬いがもろい性質をもつ。铸造の素材に用いられる。
- 「**鋼(鍛鉄)**」:0.2~2.1%の炭素含む。実用性の高い鉄で、刃物などに用いられる。
- 「**錬鉄(軟鉄)**」:鋼のうち炭素量が少ないもの。軟らかく展延性に富む。

スライド 5

【製鉄や鑄造】高度な技術必要

↓

大陸や朝鮮半島が開鎖的だった可能性

スライド 6

弥生時代前期末～中期初頭に鉄器の導入開始
舶載された鑄造鉄滓破片の再加工品が主体

スライド 7

弥生時代の鉄器製作技術

- a 鑄造鉄滓破片の再加工
- b タガネ切り
- c 打ち延ばし
- d 折り曲げ
- e 鍛接

↓

高温加熱処理を要する「鍛接」は弥生時代のうちに達成されない

スライド 8

3 北陸地域の鉄器普及とその特徴

〔第I段階：弥生時代後期前葉以前〕

- ・弥生時代中期中葉（古）までに鉄器導入が開始
- ・地域の中核的な集落や交通の要衝を占める遺跡から偏在的に出土。

木工用工具から鉄器導入

1 鐵 2-ヒタダギ・ノミ 3-6 板状鉄斧
 1 石川橋 宇氣原遺跡 2 石川橋 杉野チノノボタケ 3 石川橋 西全・南新保
 4 石川橋 籠橋 5 石川橋 吉崎・次場 6 石川橋 高田

弥生時代後期前葉以前の集落出土鉄器組成 (縮尺 1/3) 鳥取県青谷上寺地遺跡の鉄器 (縮尺 1/3)

スライド9

「柄付き鉄製鉋（やりがんな）」の発見！

石川県 八日市地方遺跡 細部加工に用いる鉄製工具の存在裏付け

最古の
木柄付き鉄製鉋

- ・弥生時代中期中葉（約2,300年前）
- ・イヌガヤ風の心持ち材を利用

スライド10

「柄付き鉄製鉋」の構造と製作工程

- ① 柄となる木材（イヌガヤ属）の上部を縦方向に分割
- ② 鉄製鉋の装着部に段を作出
- ③ 鉄製鉋を柄に挟み込み、ずれを防ぐために糸で固定
- ④ テープ状に加工した椶の樹皮紐を装着部に巻き付けて固定
- ⑤ 「柄付き鉄製鉋」の完成！

X線透過画像

スライド11

「柄付き鉄製鉋」の関連資料

・「把付磨製石剣」と構造に共通点
 ※滋賀県赤野井湾遺跡で類似資料（中期後葉）

第2回 把付磨製石剣の把付成方法案 (福井県産) 小松市教育委員会2016
 「八日市地方遺跡調査報告書」より

1. 滋賀県 赤野井湾遺跡
 2・3. 大阪府 貝鹿川遺跡

※すべてイヌガヤ属 10mm

スライド12

「柄付き鉄製鉋」の使われ方と年代

・精妙な木製容器・匙などの細部加工や仕上げに効力を発揮。

小松市八日市地方遺跡

時代	入出地域	船内	八日市地方	近畿地方	中国・朝鮮半島	中国	東洋
弥生前期	0						
弥生中期	1	100					
	2	400					
	3	100					
	4	100					
	5						
弥生中期末	6	300					
弥生後期	7	500					
	8	200					
	9	100					
	10	100					
	11	100					
	12	100					
	13	100					
	14	100					
	15	100					

「柄付き鉄製鉋」の時期と関連年表 (小松市教育委員会 2016 「八日市地方遺跡」より作成)

スライド13

八日市地方遺跡の木柄からみえる鉄器組成

・弥生中期では国内最多

13 点の 鑄造鉄斧柄が出土

撮影：田邊朋宏

スライド14

装着が想定される鉄器

・長茎の剣 - 朝鮮半島で稀少

八日市地方遺跡出土の鉄器最長最厚木柄 (縮尺 1/4)

スライド15

推定される八日市地方遺跡の鉄製工具組成

弥生時代中期の鉄製工具組成

- ・斧：二条凸帯付き鑄造鉄斧、鑄造梯形斧 + 袋状鉄斧 ※鑄造鉄斧再加工品
- ・鋸：袋状鉄鋸（除柄含む）
- ・鉋：柄付き鉄製鉋 ※小型の鉄片の存在

列島内で鉄器生産が始まる前から「ラエティー」豊かな鉄製工具組成

石川・小林2012

スライド16

〔第Ⅱ-1段階：弥生時代後期中葉～後期後葉〕

・ほぼ全ての器種が出揃うー利器の鉄器化

- ・集落出土鉄器 小型でうすい造りのものが目立つ
- ・三角板鉄片 「タガネ切り」による簡易な鍛冶
- ・山陰と鉄器形態や組成が類似

↓

日本海沿岸域を西方からリレー式に流入した可能性

1～9 銅 10～11 銅 12 鉄製 13～14 銅 15 鉄製 16～21 アガタ 22～23 銅 24 アガタ 25～26 銅 27～29 銅・鉄 30～32 銅製
 1 石川 宇野 2 アサヒ 13 19～21 23 25 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100
 弥生時代後期中葉～後葉の鉄器組成 (縮尺 1/3)

スライド17

弥生時代後期の工具柄と装着が想定される鉄器

・佐賀県 吉野ヶ里
 ・石川県 高松/ノカド
 ・新潟県 経塚山
 ・鉄斧法量の多様化

スライド18

弥生時代後期の武器装具と装着が想定される鉄器

・石川県 若出づの
 ・福井県 原白山
 ・鉄製武器の増加と刀の出現
 ・石川県 七野

スライド19

〔第Ⅱ-2段階：弥生時代終末期〕

- ・鉄器出土量の増加
- ・遠隔地からの鉄器が顕在化 ※大型の伐採斧はすべて遠隔地からの搬入品
- ・鉄器をまとめて保有する遺構出現
- ・(高温)加熱処理による鍛冶導入

1 銅 2～4 銅 5 鉄製 6 アガタ 7 銅 8 銅 9 銅 10 銅 11 銅 12 銅 13 銅 14 銅 15 銅 16 銅 17 銅 18 銅 19 銅 20 銅 21 銅 22 銅 23 銅 24 銅 25 銅 26 銅 27 銅 28 銅 29 銅 30 銅 31 銅 32 銅 33 銅 34 銅 35 銅 36 銅 37 銅 38 銅 39 銅 40 銅 41 銅 42 銅 43 銅 44 銅 45 銅 46 銅 47 銅 48 銅 49 銅 50 銅 51 銅 52 銅 53 銅 54 銅 55 銅 56 銅 57 銅 58 銅 59 銅 60 銅 61 銅 62 銅 63 銅 64 銅 65 銅 66 銅 67 銅 68 銅 69 銅 70 銅 71 銅 72 銅 73 銅 74 銅 75 銅 76 銅 77 銅 78 銅 79 銅 80 銅 81 銅 82 銅 83 銅 84 銅 85 銅 86 銅 87 銅 88 銅 89 銅 90 銅 91 銅 92 銅 93 銅 94 銅 95 銅 96 銅 97 銅 98 銅 99 銅 100
 弥生時代終末期の鉄器組成 (縮尺 1/3)

スライド20

鉄鏃などの形態に小地域差

ー各地域に鍛冶技術が普及した可能性

鉄鏃の形態からみた地域差

スライド21

弥生時代後期後葉～終末期の副葬鉄器

- ・後期中葉から墳墓への鉄器副葬が開始
- ・終末期には副葬武器の主体が、剣から刀、素環頭刀、刀手に転換
- ・副葬鉄器は大型で厚重な造りのものが多い ※集落の鉄器と大きな差異

↓

日本海沿岸地域の鉄器流通に二重構造のシステムが存在していた可能性

1 銅 2 銅 3 銅 4 銅 5 銅 6 銅 7 銅 8 銅 9 銅 10 銅 11 銅 12 銅 13 銅 14 銅 15 銅 16 銅 17 銅 18 銅 19 銅 20 銅 21 銅 22 銅 23 銅 24 銅 25 銅 26 銅 27 銅 28 銅 29 銅 30 銅 31 銅 32 銅 33 銅 34 銅 35 銅 36 銅 37 銅 38 銅 39 銅 40 銅 41 銅 42 銅 43 銅 44 銅 45 銅 46 銅 47 銅 48 銅 49 銅 50 銅 51 銅 52 銅 53 銅 54 銅 55 銅 56 銅 57 銅 58 銅 59 銅 60 銅 61 銅 62 銅 63 銅 64 銅 65 銅 66 銅 67 銅 68 銅 69 銅 70 銅 71 銅 72 銅 73 銅 74 銅 75 銅 76 銅 77 銅 78 銅 79 銅 80 銅 81 銅 82 銅 83 銅 84 銅 85 銅 86 銅 87 銅 88 銅 89 銅 90 銅 91 銅 92 銅 93 銅 94 銅 95 銅 96 銅 97 銅 98 銅 99 銅 100
 弥生時代後期後葉～終末期の副葬鉄器組成 (縮尺 1/3)

スライド22

素環頭刀の改変

- ・環頭の断ち切り、把を装着
- ー日本海沿岸域で特徴的

富山県 杉谷 A 遺跡
 福井県 乃木山古墳
 長岡市奈良崎遺跡出土鉄器と関連資料 (縮尺：1/6)

スライド23

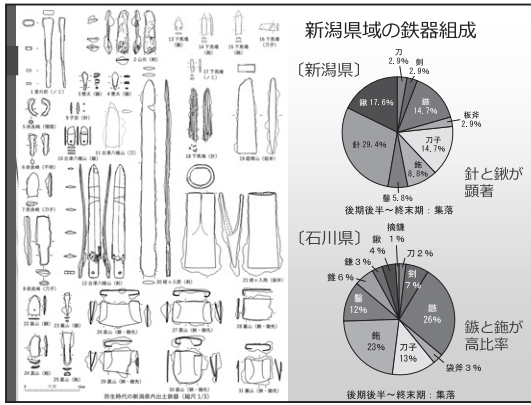
4 新潟県域の鉄器普及と高地性集落

- ・弥生時代の鉄器は、14遺跡 48点の出土を確認
- ・そのうち10遺跡は、高地性(独立丘陵上)の環濠集落 ※偏在的な出土傾向
- ・出土総量に比して、遠隔地から運ばれた厚重な鉄器が顕著
- ・三条市経塚山遺跡、長岡市樽ヶ入南遺跡など
- ・北陸北東部系土器の分布域を越えて鉄器が流通

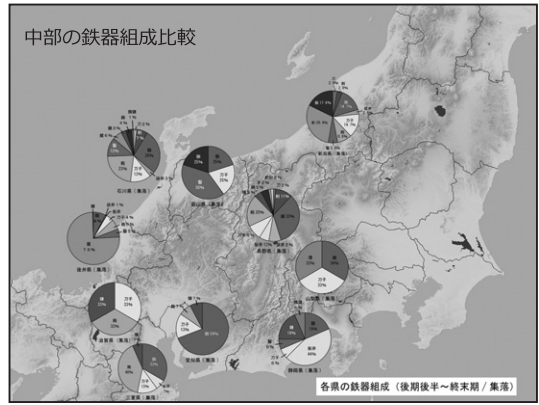
遺跡名	所在地	出土鉄器の種類	出土数
経塚山	三条市	鉄製武器	10
樽ヶ入南	長岡市	鉄製武器	8
...

新潟県内の鉄器出土状況 (調査年度：1971～1980)

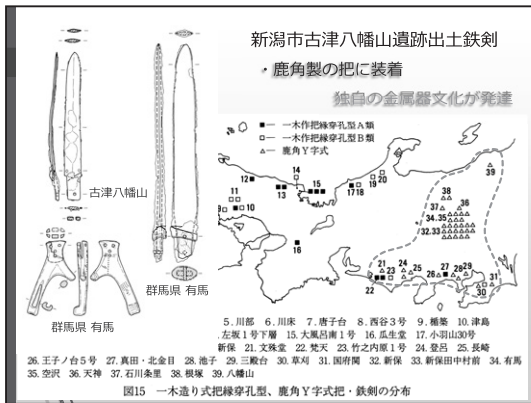
スライド24



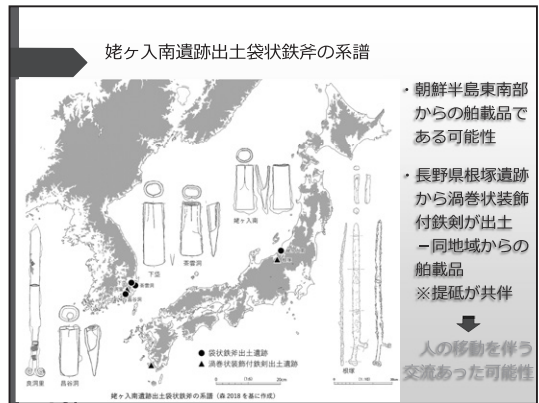
スライド25



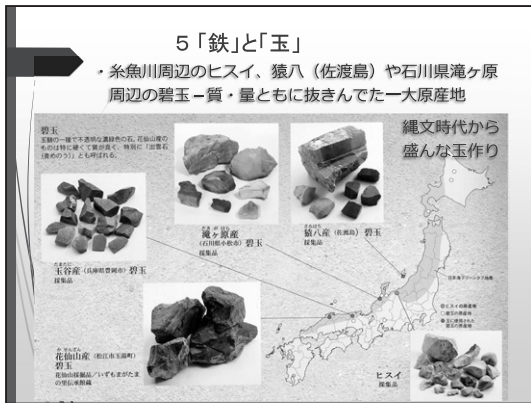
スライド26



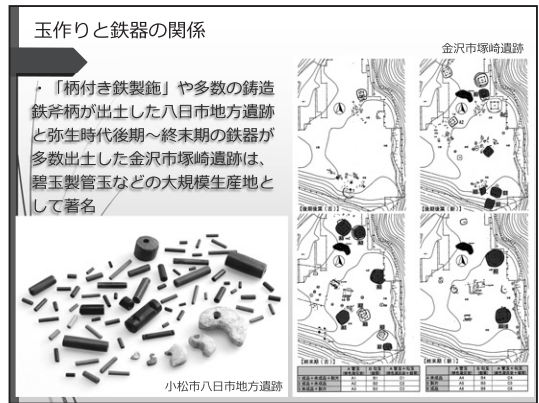
スライド27



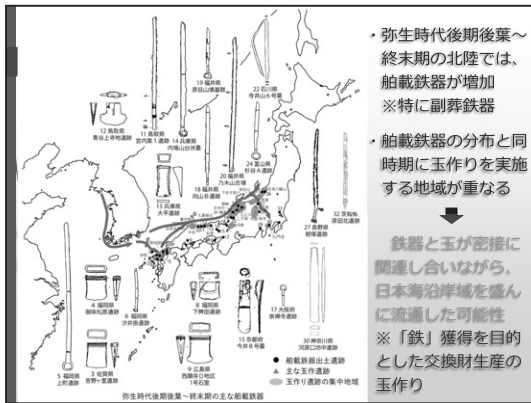
スライド28



スライド29



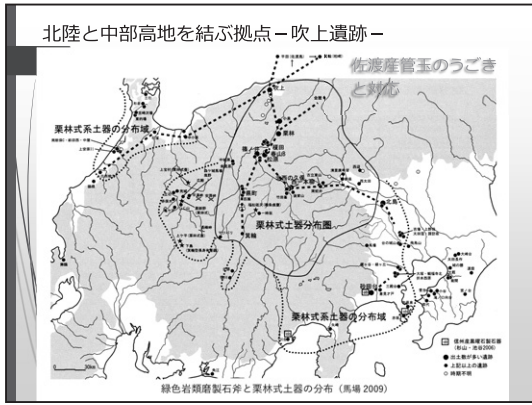
スライド30



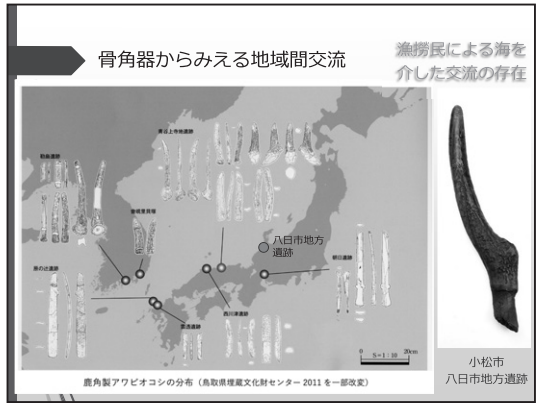
スライド31



スライド32



スライド33



スライド34



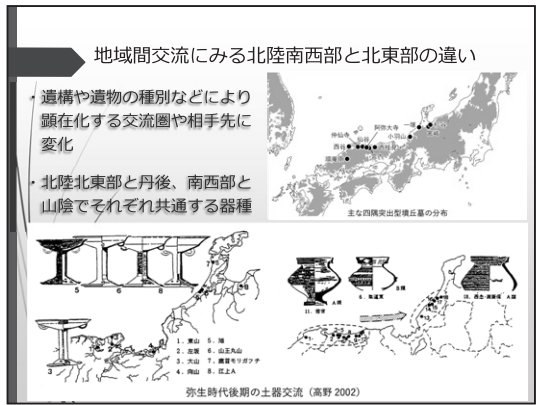
スライド35



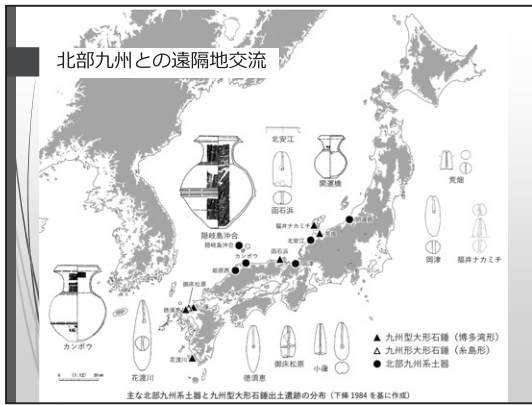
スライド36



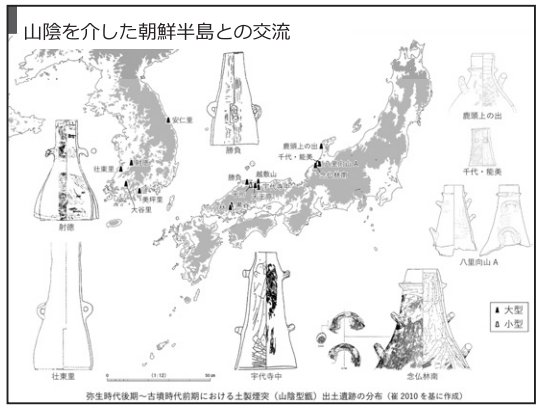
スライド37



スライド38



スライド39



スライド40

朝鮮半島との直接的な交流の可能性

・八日市地方遺跡の鉄製鉈、姥ヶ入南遺跡出土袋状鉄斧などが直接的流入の可能性

良野里
漆町（白江念仏堂）

木製約瓶出土遺跡の分布

スライド41

7 まとめ

- ・北陸地域は「日本海弥生鉄器文化圏」の東端に位置づけ
※北部九州や山陰に運動した鉄器普及みられる
- ・新潟県域は弥生時代後期後葉に鉄器が増加
※高地性（独立丘陵上）の環濠集落に集中
- ・副葬鉄器を主体に遠隔地から運ばれた鉄器が顕著
※集落をリレー式に運ばれる小型鉄器・素材
首長間レベルの広域流通でもたらされる重厚な鉄器

↓

二重構造の流通システムが存在
器物などの種別によりさまざまなレベルの交流存在
一直接的な朝鮮半島との交流もあった可能性

○北陸-弥生時代を通じて日本海沿岸域の東西および中部高地をつなぐ交流拠点として機能

スライド42

図・写真の出典

- スライド4：野島 永2008「5. 弥生・古墳時代における鉄器文化」『弥生時代における初期鉄器の舶載時期とその流通構造の解明』平成17～平成19年度科学研究費補助金 基盤研究(C) 研究成果報告書
- スライド6：藤尾慎一郎2013『弥生文化像の新構築』吉川弘文館を一部改変
- スライド7左：柴田昌晃2008「弥生時代の遺構・遺物に関する若干の考察」『大久保遺跡(大久保・竹成地区・E地区)、大開遺跡、松ノ丁遺跡(1次・2次)』第3分冊(自然科学分析・考察)財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター
- スライド7右：村上恭通1998「鉄器普及の諸段階」下條信行(編)『日本における石器から鉄器への転換形態の研究』(平成7年度～平成9年度科学研究費補助金(基盤研究B) 研究成果報告書)
- スライド8上：上記(村上1998)を基に作成
- スライド8下：佐々木勝2001「北陸地域を中心とした鉄製品の生産と流通」『生産と流通』(第3回例会発表要旨集)中部弥生時代研究会を一部改変
- スライド9左・17・19・20・22：各遺跡発掘調査報告書等掲載図より作成
- スライド9右：水村直人(編)2011『青谷上寺地遺跡出土品調査研究報告6 金属器』(鳥取県埋蔵文化財センター調査報告39)鳥取県埋蔵文化財センター
- スライド10・11左上・スライド13左・30左・32右下・34右：石川県埋蔵文化財センター提供
- スライド11：本人作成
- スライド12左：下濱貴子(編)2016『八日市地方遺跡Ⅱ 第7部補遺編』小松市教育委員会
- スライド12中央：阿刀弘史ほか1998『赤野井湾遺跡 第2分冊』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会
- スライド12右：才原金弘ほか1988『鬼虎川遺跡調査概要Ⅰ 遺物編 木製品』財団法人東大阪市文化財協会、芋本隆裕ほか1987『鬼虎川の木質遺物-第7次発掘調査報告書 第4冊-』財団法人東大阪市文化財協会
- スライド13右：上記(下濱(編)2016)を基に作成
- スライド14：小松市埋蔵文化財センター提供(撮影：田邊朋宏)
- スライド15：李 昌熙2014「韓半島における初期鉄器の年代と特質」『国立歴史民俗博物館研究報告』(第185集)国立歴史民俗博物館ほか、各遺跡発掘調査報告書掲載図より作成
- スライド16：石川岳彦・小林青樹2012「春秋戦国期の燕国における初期鉄器と東方への拡散」『国立歴史民俗博物館研究報告』(第167集)国立歴史民俗博物館
- スライド18：村上恭通1992「吉野ヶ里遺跡における弥生時代の鉄製品」『吉野ヶ里(本文編)』(佐賀県文化財調査報告書第113集)佐賀県教育委員会ほか、各遺跡発掘調査報告書等掲載図より作成
- スライド21：林 大智2007「弥生鉄器からみた中部地域の地域間交流」『中部弥生時代研究のこれから-例会からの課題と展望』(当日資料集)中部弥生時代研究会を一部改変
- スライド23：佐々木勝2002「福井県の鉄製品の様相-北陸地域の墳墓出土資料を中心として-」『鉄器の導入と社会の変化』(平成13年度環日本海交流史研究集会発表レジュメ集)財団法人石川県埋蔵文化財センターを基に作成
- スライド24：滝沢規朗(編)2009『県内遺跡発掘調査報告書Ⅰ 山元遺跡』(新潟県埋蔵文化財調査報告書第199集)新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- スライド25：滝沢規朗2015「越後・佐渡における鉄器と青銅器-伝来の系譜と性格-」『古代文化』(第66巻第4号)公益財団法人古代学協会を一部改変
- スライド26：上記(林2007)を一部改変
- スライド27：豊島直博2010『研究論集16 鉄製武器の流通と初期国家形成』(奈良文化財研究所学報第83冊)独立行政法人奈良文化財研究所より構成
- スライド28：森 貴教2018「長岡市島崎川流域における弥生時代鉄器の基礎的研究」『新潟考古学談話会発表レジュメ』を基に作成
- スライド29：古代歴史文化協議会(編)2018『玉-古代を彩る至宝-』ハーベスト出版
- スライド30右：林 大智2009「北陸における弥生時代の生産と流通」『中部の弥生時代研究』中部の弥生時代研究刊行委員会に一部加筆
- スライド31：林 大智2005「日本海沿岸域の「鉄」が北陸にもたらした変革」『北陸の玉と鉄 弥生王権の光と影』大阪府立弥生文化博物館を一部改変
- スライド32・36：河合章行(編)2013『日本海を行き交う弥生の宝石-青谷上寺地遺跡の交流をさぐる-』(青谷上寺地遺跡フォーラム2013)鳥取県埋蔵文化財センター
- スライド33：馬場伸一郎2009「磨製石斧の「流通」と「交易」」『中部の弥生時代研究』中部の弥生時代研究刊行委員会
- スライド34左：鳥取県埋蔵文化財センター2011『弥生・骨角器サミット-青谷上寺地遺跡の交流をさぐる-』(青谷上寺地遺跡フォーラム2011)に一部加筆
- スライド35：武末純一2018「全体の趣旨説明と課題」『新・日韓交渉の考古学-弥生時代-』新・日韓交渉の考古学-弥生時代-研究会を一部改変
- スライド37左：水村直人(編)2012『海を渡った鏡と鉄-青谷上寺地遺跡の交流をさぐる-』(青谷上寺地遺跡フォーラム2012)鳥取県埋蔵文化財センター
- スライド37右上：宮本哲朗(編)1983『金沢市西念・南新保遺跡』金沢市・金沢市教育委員会
- スライド37右下：足立克巳1999『姫原西遺跡』建設省松江国道工事事務所・鳥根県教育委員会
- スライド38：高野陽子2002「弥生後期における丹後地域の土器様式とその受容限界」『土器様式(型式)と空間的境界』(第4回例会発表要旨集)中部弥生時代研究会
- スライド39：下條信行1984「弥生・古墳時代の九州型石錘について-交界灘海人の動向-」『九州文化史研究所紀要』(第29号)九州大学九州文化史研究施設、常松幹雄1994「本州島域における北部九州の壺形土器」『福岡考古』(16号)福岡考古懇話会を基に作成
- スライド40：崔 榮柱2010「三國・古墳時代における土製煙突研究-韓半島と日本列島を中心に-」『立命館大学考古学論集刊行会』を基に作成
- スライド41：金 度憲2014「韓国の三國時代農器具」『武器・武具と農具・漁具-韓日 三國・古墳時代資料-』韓日交渉の考古学-三國・古墳時代-研究会を基に作成

第2章 企画展の概要と企画展関連講座・講演会アンケート結果

平成30年度は史跡古津八幡山 弥生の丘展示館で企画展を3回催した。また、企画展の期間中に、外部から講師をお招きするなどし、関連講座・講演会(第1章に収録)を実施したほか、市文化財センター企画展担当職員による展示解説を行った。

なお、各講演会では参加者を対象にアンケートを実施した。

以下では、企画展及び関連講座・講演会の概要と、関連講座・講演会のアンケート結果について記す。

(1) 平成30年度「史跡古津八幡山 弥生の丘展示館」企画展の概要

(A) 企画展

企画展1「古代の祭祀」

開催期間 平成30年4月24日(火)～7月29日(日)

会場 史跡古津八幡山 弥生の丘展示館

概要 飛鳥時代の7世紀は、東アジア諸国との緊張関係を背景に古代国家の枠組みが急速に整っていった時代といえる。地方は「国」や「評」といった行政単位に編成され、地方豪族の多くは官人となっていった。祭祀においても、701年に成立した「大宝令」で、公的・国家的な祭祀についての規定が示され、飛鳥時代から平安時代を中心に行われた古代律令祭祀の形態が整備されたと考えられている。

本企画展では、いわゆる古代律令祭祀が完成していく過渡期の飛鳥時代を前後する時期、古墳時代から平安時代を対象に、越後平野の主な祭祀関連遺跡や遺物を紹介・展示しながら、時代による祭祀具の変化や、同じ時代でも遺跡や遺構によって祭祀具が異なる背景などについて考えた。

展示解説 平成30年6月23日(土)・7月8日(日)

13:30～ 市文化財センター職員

企画展2「豪族居館—王の暮らす屋敷—」

開催期間 平成30年8月7日(火)～12月2日(日)

会場 史跡古津八幡山 弥生の丘展示館

概要 地域の古墳時代像を明らかにしていくためには、古墳に加え、古墳をつくった豪族の屋敷である豪族居館、さらには一般集落の動向や様相について検討していく必要がある。しかし、豪族居館や集落で全面的な発掘調査が行われている事例は少なく、豪族居館の実態や古墳との関係などを明らか

にし、当時の古墳時代像を復元していく作業は今後の大きな課題となっている。

新潟市内には県内最大の古津八幡山古墳をはじめ、8基の古墳が確認されている。これら古墳をつくった豪族の居館について確実なものはまだ見つかっていないが、舟戸遺跡(秋葉区)や御井戸遺跡(西蒲区)など、いくつかの遺跡が候補として挙げられる。本企画展では、東日本の主な豪族居館やこれまでの調査・研究成果などを概観するとともに、市内の豪族居館候補の遺跡について紹介・展示した。

展示解説 平成30年11月10日(土)

13:30～ 市文化財センター職員

企画展3「鉄—弥生・古墳時代の鉄器—」

開催期間 平成30年12月11日(火)～平成31年4月

14日(日)

会場 史跡古津八幡山 弥生の丘展示館

概要 古津八幡山遺跡で見ついている鉄器は3点しかないが、石器が少ないことや鉄器用に使われた砥石が多数出土していることから、当時使われていた道具の主体は鉄器だったと考えられる。

本企画展では、古津八幡山遺跡と同時代の新潟県内出土の弥生時代から古墳時代前期の鉄器を集成し、紹介・展示した。

また、当時貴重品だった鉄器が新潟県内にどのようにもたらされたのかを解明するため、古津八幡山遺跡で出土した鹿角装鉄剣と長野県木島平村根塚遺跡の渦巻文装飾付鉄剣や、新潟県糸魚川市の姫川産の翡翠で作られたヒスイ製勾玉、京都丹後地域で多く出土しているガラス玉、柏崎市開運橋遺跡から出土した北部九州系弥生土器などの動きをヒントに、日本海を介した朝鮮半島からの鉄の流通ルートについて検討した。

展示解説 平成30年12月23日(日)・平成31年

2月17日(日)・3月17日(日)

13:30～ 市文化財センター職員

(B) 企画展関連講座・講演会

企画展1 関連講座

演題 律令祭祀の基礎知識・越後平野における古代の祭祀関連遺跡とその様相

演者 金田拓也(市歴史文化課)・相田泰臣(市

文化財センター)
 日時 平成30年5月27日(日) 13:30~15:30
 会場 市文化財センター研修室
 38名

企画展2 関連講演会

演題 古墳時代の集落と豪族居館
 - 東日本を中心に -
 演者 菊地芳朗氏(福島大学行政政策学類教授)
 日時 平成30年10月14日(日) 13:30~15:30
 会場 市文化財センター研修室
 41名

企画展3 関連講演会

演題 弥生の「鉄」がつなく日本海沿岸流域の
 交流
 演者 林 大智氏
 (石川県埋蔵文化財センター専門員)
 日時 平成28年10月22日(日) 13:30~15:30
 会場 市文化財センター研修室
 91名

平成30年度 史跡古津八幡山 弥生の丘展示館 企画展

豪族居館

企画展2
 一王の暮らす屋敷一

2018年8月7日(火)~12月2日(日)

会期中休館日 8/20・27・9/3・10・18・25
 10/1・9・15・22・29・11/5・12・19・26

関連講演会 古墳時代の集落と豪族居館 - 東日本を中心に -

観覧無料

次回企画展予告 企画展3 鉄 - 弥生・古墳時代の鉄器 - 会期 2018年12月11日(火)~2019年4月14日(日)

企画展2 ポスター

平成30年度 史跡古津八幡山 弥生の丘展示館 企画展

古代の祭祀

企画展1

2018年4月24日(火)~7月29日(日)

会期中休館日 5/7・21・28, 6/4・11・18・25, 7/2・9・17・23

関連講演会 越後野の古代律令祭祀の様相と展開

観覧無料

企画展1 ポスター

平成30年度 史跡古津八幡山 弥生の丘展示館 企画展

鉄

企画展3
 弥生・古墳時代の鉄器

2018年12月11日(火)~2019年4月14日(日)

会期中休館日 12/17・25・28~1/3・15・21・28
 2/4・12・18・25, 3/11・18・22・25, 4/1・8

観覧無料

関連講演会 弥生の「鉄」がつなく日本海沿岸流域の交流

演者 林大智氏(石川県埋蔵文化財センター専門員)
 日時 2019年2月10日(日) 13:30~15:30
 会場 新潟市文化財センター 研修室
 申込 30名(先着順) 新潟市文化財センター 025-272-2200

展示解説 2018年12月11日(火)~2019年1月17日(水) 3月11日(火)~3月17日(月)

申込 30名(先着順) 新潟市文化財センター 025-272-2200

企画展3 ポスター

(2) 企画展関連講座・講演会アンケート結果

アンケートは各講座・講演会ごとに実施した(64頁)。3回分の講座・講演会のアンケート結果を合計した表・グラフは63頁に掲載した。

年齢 講演会参加者の年齢構成は、60代が最も多く、次いで70代、50代、80代と続く。これまでの年齢構成とおおむね同じであり、昨年度に続いて20代の参加が見られたものの、10代からの参加がなくなった。次世代を担う若年層への普及・広報活動は今後の重要な課題である。

住まい 参加者の居住エリアは、昨年度に引き続き市外からの参加者が最も多かった。市外・県外を合わせた参加者は全体の約3.5割を占め、関心のある方は多少遠方でも足を運ぶことがうかがえる。

市内参加者では、講演会場の新潟市文化財センターが所在する西区が多く、以下、中央区、西蒲区と続く。これまで少なかった南区・東区からの参加者が増加した一方、展示会場の秋葉区からの参加者が少なかった。

交通手段 交通手段はこれまで同様、自家用車が9割以上を占める。

情報入手先 ポスター・チラシが全体の約5割を占め、有効な広報手段であることがうかがえる。次の

で新聞、まいぶんナビとどちらも約1割で続く。昨年度に比べ新聞の割合が増加した。

講演会について 講座・講演会については、開催時期に不満・大変不満が見られた。これは1回が雪の日にあたったためと考えられる。内容のわかりやすさについては概ね好評であった。

また、今後検討すべき貴重なご意見も多く頂いた。以下に主なものを箇条書きで示す。今後の検討課題としたい。なお、昨年度「前に人がいるとスクリーンの下が見えづらい」という意見があったため、今年度は映写機の角度を少し上向きに変えた。

周辺施設の利用 様々な施設を利用しているが同じ分野の県埋蔵文化財センターの利用者が多い。

講演内容についての要望

- ・ 図面や年表などで小さくて見えにくいものがあったので、できればもっと拡大して欲しい。
- ・ 内容が豊富であるが、早すぎて追いつかない。スライドで話している図などが、配布資料にあるのかないのか、ある場合はどこにあるのかを示してもらえるとありがたい。

会場についての要望

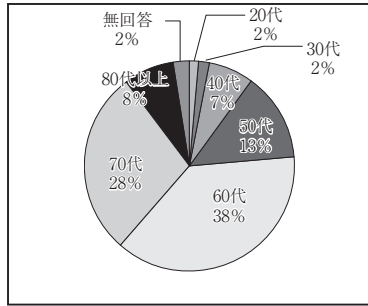
- ・ 案内標識などが少なく、会場の場所が分かりにくい。

史跡 古津八幡山遺跡 弥生の丘展示館 企画展〇関連講演会 アンケート																																																																																																																								
<p>お越しの皆様へ</p> <p>本日は史跡古津八幡山遺跡弥生の丘展示館企画展〇関連講演会 「〇〇〇〇〇〇〇〇」にお越しいただき、誠にありがとうございます。弥生の丘展示館の活動について今後の参考とさせていただきます。ご意見をください。</p> <p>ご協力をお願いします。</p> <p>* 開催日：平成〇〇年〇月〇日(〇)</p>																																																																																																																								
<p>1 あなたのこと(お客様のプロフィール)を教えてください。</p> <table border="1"> <tr> <td colspan="2">次のそれぞれの質問で、あてはまる項目を1つだけ選び、○で囲んでください。</td> </tr> <tr> <td>①年齢は</td> <td>20歳未満 20代 30代 40代 50代 60代 70代 80代以上</td> </tr> <tr> <td>②性別は</td> <td>男性 女性</td> </tr> <tr> <td>③職業は</td> <td>小学生 中学生 高校生 大学生(短大・専門学校含む) 会社員 公務員 自営業 教職員 主婦 無職 その他()</td> </tr> <tr> <td>④お住まいは</td> <td>北区 東区 中央区 江南区 秋葉区 南区 西区 西蒲区 市外(市・町・村) 県外(都・道・府・県 市・町・村)</td> </tr> <tr> <td>⑤こちらへの主な交通手段は</td> <td>自家用車 自転車・バイク 徒歩 タクシー 路線バス・バス JR その他()</td> </tr> <tr> <td>⑥弥生の丘展示館へ行かれたことはありますか</td> <td>ない 1回 2~5回 6~9回 10回以上</td> </tr> <tr> <td>⑦弥生の丘展示館で開催中の企画展「〇〇〇〇〇〇〇〇」をご覧になりましたか。</td> <td>はい いいえ ※いいえの方に質問です。これからご覧になる予定はありますか。</td> </tr> <tr> <td>⑧講演会情報の入手先</td> <td>ポスター・チラシ 市報 その他広報紙 テレビ・ラジオ 新聞 雑誌・情報誌 インターネット 市ホームページ まいぶんナビ 人から聞いて 弥生の丘展示館を利用して その他()</td> </tr> </table> <p>※質問は表・裏の両面にあります。 【ウラ面に続きます】</p>		次のそれぞれの質問で、あてはまる項目を1つだけ選び、○で囲んでください。		①年齢は	20歳未満 20代 30代 40代 50代 60代 70代 80代以上	②性別は	男性 女性	③職業は	小学生 中学生 高校生 大学生(短大・専門学校含む) 会社員 公務員 自営業 教職員 主婦 無職 その他()	④お住まいは	北区 東区 中央区 江南区 秋葉区 南区 西区 西蒲区 市外(市・町・村) 県外(都・道・府・県 市・町・村)	⑤こちらへの主な交通手段は	自家用車 自転車・バイク 徒歩 タクシー 路線バス・バス JR その他()	⑥弥生の丘展示館へ行かれたことはありますか	ない 1回 2~5回 6~9回 10回以上	⑦弥生の丘展示館で開催中の企画展「〇〇〇〇〇〇〇〇」をご覧になりましたか。	はい いいえ ※いいえの方に質問です。これからご覧になる予定はありますか。	⑧講演会情報の入手先	ポスター・チラシ 市報 その他広報紙 テレビ・ラジオ 新聞 雑誌・情報誌 インターネット 市ホームページ まいぶんナビ 人から聞いて 弥生の丘展示館を利用して その他()																																																																																																					
次のそれぞれの質問で、あてはまる項目を1つだけ選び、○で囲んでください。																																																																																																																								
①年齢は	20歳未満 20代 30代 40代 50代 60代 70代 80代以上																																																																																																																							
②性別は	男性 女性																																																																																																																							
③職業は	小学生 中学生 高校生 大学生(短大・専門学校含む) 会社員 公務員 自営業 教職員 主婦 無職 その他()																																																																																																																							
④お住まいは	北区 東区 中央区 江南区 秋葉区 南区 西区 西蒲区 市外(市・町・村) 県外(都・道・府・県 市・町・村)																																																																																																																							
⑤こちらへの主な交通手段は	自家用車 自転車・バイク 徒歩 タクシー 路線バス・バス JR その他()																																																																																																																							
⑥弥生の丘展示館へ行かれたことはありますか	ない 1回 2~5回 6~9回 10回以上																																																																																																																							
⑦弥生の丘展示館で開催中の企画展「〇〇〇〇〇〇〇〇」をご覧になりましたか。	はい いいえ ※いいえの方に質問です。これからご覧になる予定はありますか。																																																																																																																							
⑧講演会情報の入手先	ポスター・チラシ 市報 その他広報紙 テレビ・ラジオ 新聞 雑誌・情報誌 インターネット 市ホームページ まいぶんナビ 人から聞いて 弥生の丘展示館を利用して その他()																																																																																																																							
<p>2 講演会について</p> <table border="1"> <tr> <td colspan="7">次のそれぞれの質問で、あてはまる答えを1つだけ選び、数字を○で囲んでください。</td> </tr> <tr> <td colspan="7">※答えられない質問は、記入する必要はありません。</td> </tr> <tr> <td>①講演会：時期</td> <td>大変満足</td> <td>満足</td> <td>普通</td> <td>不満</td> <td>大変不満</td> <td></td> </tr> <tr> <td>②講演会：場所</td> <td>大変満足</td> <td>満足</td> <td>普通</td> <td>不満</td> <td>大変不満</td> <td></td> </tr> <tr> <td>③講演会：内容のわかりやすさ</td> <td>大変満足</td> <td>満足</td> <td>普通</td> <td>不満</td> <td>大変不満</td> <td></td> </tr> <tr> <td>④施設全般：映像、照明、空調、バリアフリー</td> <td>大変満足</td> <td>満足</td> <td>普通</td> <td>不満</td> <td>大変不満</td> <td></td> </tr> <tr> <td>⑤職員対応：言葉づかい、マナー、対応、説明</td> <td>大変満足</td> <td>満足</td> <td>普通</td> <td>不満</td> <td>大変不満</td> <td></td> </tr> <tr> <td>⑥有観物：わかりやすさ</td> <td>大変満足</td> <td>満足</td> <td>普通</td> <td>不満</td> <td>大変不満</td> <td></td> </tr> <tr> <td>⑦全体の満足度</td> <td>大変満足</td> <td>満足</td> <td>普通</td> <td>不満</td> <td>大変不満</td> <td></td> </tr> <tr> <td>⑧次回の講演会に参加したいですか?</td> <td>ぜひ参加したい あまり参加したくない</td> <td>できたら参加したい 参加しない</td> <td colspan="4"></td> </tr> <tr> <td>⑨弥生の丘展示館周辺施設を利用されたことはありますか?</td> <td>古津八幡山遺跡歴史の広場 フラワーランド 新潟美術館 県立植物園 県埋蔵文化財センター 石油の世界館(石油遺産関係) 中野原記念館 ビジターセンター その他()</td> <td colspan="5"></td> </tr> <tr> <td colspan="7">※今後の会場の場所についてのご希望をお書きください。</td> </tr> <tr> <td colspan="7">・現在の場所で満足 ・別の場所を希望(場所：)</td> </tr> <tr> <td colspan="7">※今回の講演会についてご自由にお書きください。</td> </tr> <tr> <td colspan="7">※ご希望のイベント・講演会等がございましたらお書きください。</td> </tr> <tr> <td colspan="7">※弥生の丘展示館へのご意見・期待することなど、ございましたらご自由にお書きください。</td> </tr> <tr> <td colspan="7">ご協力ありがとうございました</td> </tr> </table>		次のそれぞれの質問で、あてはまる答えを1つだけ選び、数字を○で囲んでください。							※答えられない質問は、記入する必要はありません。							①講演会：時期	大変満足	満足	普通	不満	大変不満		②講演会：場所	大変満足	満足	普通	不満	大変不満		③講演会：内容のわかりやすさ	大変満足	満足	普通	不満	大変不満		④施設全般：映像、照明、空調、バリアフリー	大変満足	満足	普通	不満	大変不満		⑤職員対応：言葉づかい、マナー、対応、説明	大変満足	満足	普通	不満	大変不満		⑥有観物：わかりやすさ	大変満足	満足	普通	不満	大変不満		⑦全体の満足度	大変満足	満足	普通	不満	大変不満		⑧次回の講演会に参加したいですか?	ぜひ参加したい あまり参加したくない	できたら参加したい 参加しない					⑨弥生の丘展示館周辺施設を利用されたことはありますか?	古津八幡山遺跡歴史の広場 フラワーランド 新潟美術館 県立植物園 県埋蔵文化財センター 石油の世界館(石油遺産関係) 中野原記念館 ビジターセンター その他()						※今後の会場の場所についてのご希望をお書きください。							・現在の場所で満足 ・別の場所を希望(場所：)							※今回の講演会についてご自由にお書きください。							※ご希望のイベント・講演会等がございましたらお書きください。							※弥生の丘展示館へのご意見・期待することなど、ございましたらご自由にお書きください。							ご協力ありがとうございました						
次のそれぞれの質問で、あてはまる答えを1つだけ選び、数字を○で囲んでください。																																																																																																																								
※答えられない質問は、記入する必要はありません。																																																																																																																								
①講演会：時期	大変満足	満足	普通	不満	大変不満																																																																																																																			
②講演会：場所	大変満足	満足	普通	不満	大変不満																																																																																																																			
③講演会：内容のわかりやすさ	大変満足	満足	普通	不満	大変不満																																																																																																																			
④施設全般：映像、照明、空調、バリアフリー	大変満足	満足	普通	不満	大変不満																																																																																																																			
⑤職員対応：言葉づかい、マナー、対応、説明	大変満足	満足	普通	不満	大変不満																																																																																																																			
⑥有観物：わかりやすさ	大変満足	満足	普通	不満	大変不満																																																																																																																			
⑦全体の満足度	大変満足	満足	普通	不満	大変不満																																																																																																																			
⑧次回の講演会に参加したいですか?	ぜひ参加したい あまり参加したくない	できたら参加したい 参加しない																																																																																																																						
⑨弥生の丘展示館周辺施設を利用されたことはありますか?	古津八幡山遺跡歴史の広場 フラワーランド 新潟美術館 県立植物園 県埋蔵文化財センター 石油の世界館(石油遺産関係) 中野原記念館 ビジターセンター その他()																																																																																																																							
※今後の会場の場所についてのご希望をお書きください。																																																																																																																								
・現在の場所で満足 ・別の場所を希望(場所：)																																																																																																																								
※今回の講演会についてご自由にお書きください。																																																																																																																								
※ご希望のイベント・講演会等がございましたらお書きください。																																																																																																																								
※弥生の丘展示館へのご意見・期待することなど、ございましたらご自由にお書きください。																																																																																																																								
ご協力ありがとうございました																																																																																																																								

アンケート用紙(表・裏)

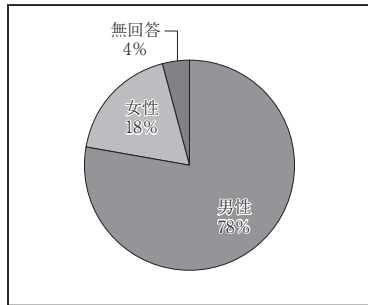
1. 年齢

20歳未満	0
20代	2
30代	2
40代	9
50代	17
60代	48
70代	36
80代以上	10
無回答	3
計	127



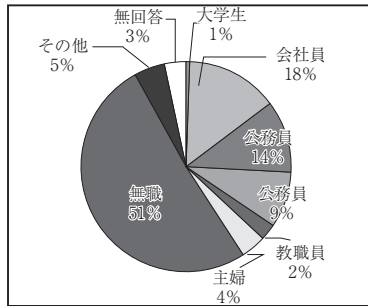
2. 性別

男性	99
女性	23
無回答	5
計	127



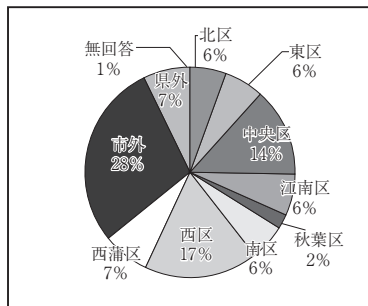
3. 職業

小学生	0
中学生	0
高校生	0
大学生	1
会社員	18
公務員	14
自営業	11
教職員	3
主婦	5
無職	65
その他	6
無回答	4
計	127



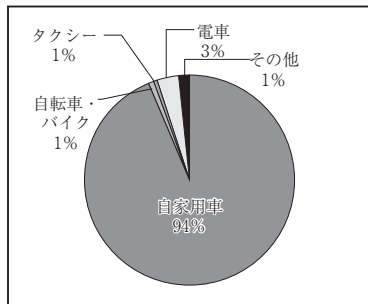
4. 住まい

北区	7
東区	8
中央区	17
江南区	8
秋葉区	3
南区	7
西区	22
西蒲区	9
市外	36
県外	9
無回答	1
計	127



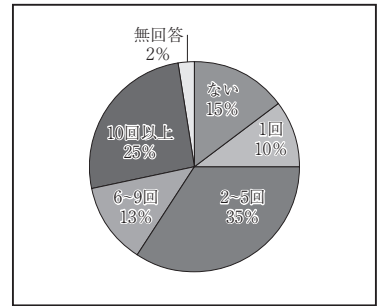
5. 交通手段

自家用車	119
自転車・バイク	1
徒歩	0
タクシー	1
バス	0
電車	4
その他	2
計	127



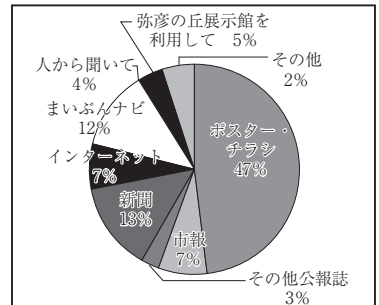
6. 弥生の丘展示館来館回数

ない	19
1回	13
2～5回	44
6～9回	16
10回以上	32
無回答	3
計	127



7. 講演会情報入手先 (複数回答あり)

ポスター・チラシ	71
市報	11
その他広報誌	4
テレビ・ラジオ	0
新聞	20
雑誌・情報誌	0
インターネット	10
市ホームページ	0
まいぶんナビ	18
人から聞いて	6
弥生の丘展示館を利用して	7
その他	3
計	150

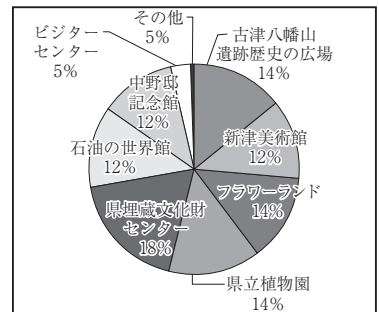


講演会満足度

	大変満足	満足	普通	不満	大変不満	無回答	計
時期	26	58	33	4	1	5	127
場所	23	56	36	7	0	5	127
内容のわかりやすさ	25	55	30	6	0	11	127
施設全般：照明、空調、バリアフリー	21	68	26	2	0	10	127
職員の対応：言葉づかい、マナー、対応、説明	30	60	25	1	0	11	127
印刷物：わかりやすさ	18	55	32	12	0	10	127
全体の満足度	26	58	28	2	0	13	127

8. 弥生の丘展示館周辺施設の利用 (複数回答あり)

古津八幡山遺跡歴史の広場	78
新津美術館	67
フラワーランド	74
県立植物園	78
県埋蔵文化財センター	101
石油の世界館	68
中野邸記念館	64
ビジターセンター	16
その他	3
無回答	2
計	551



アンケート結果一覧 (3回分の講座・講演会の合計)

アンケート結果一覧（講座・講演会別）

		項目	第1回	第2回	第3回	計
プロフィール	年齢	20歳未満	0	0	0	0
		20代	0	2	0	2
		30代	0	1	1	2
		40代	1	0	8	9
		50代	3	4	10	17
		60代	5	16	27	48
		70代	9	5	22	36
		80代以上	2	4	4	10
		無回答	0	0	3	0
		計	20	32	75	127
	性別	男性	17	28	54	99
		女性	3	3	17	23
		無回答	0	1	4	5
		計	20	32	75	127
		職業	小学生	0	0	0
	中学生		0	0	0	0
	高校生		0	0	0	0
	大学生		0	1	0	1
会社員	3		3	12	18	
公務員	1		4	9	14	
自営業	1		2	8	11	
教職員	0		1	2	3	
主婦	0		1	4	5	
無職	12		18	35	65	
その他	1		2	3	6	
無回答	2		0	2	4	
計	20		32	75	127	
住まい	北区	3	1	3	7	
	東区	1	2	5	8	
	中央区	5	2	10	17	
	江南区	1	2	5	8	
	秋葉区	0	0	3	3	
	南区	1	2	4	7	
	西区	2	7	13	22	
	西蒲区	1	2	6	9	
	市外	4	11	21	36	
	県外	2	3	4	9	
	無回答	0	0	1	1	
	計	20	32	75	127	
	交通手段	自家用車	19	28	72	119
自転車・バイク		0	1	0	1	
徒歩		0	0	0	0	
タクシー		0	0	1	1	
バス		0	0	0	0	
電車		1	2	1	4	
その他		0	1	1	2	
計		20	32	75	127	
講演会情報 入手先 (複数回答あり)	ポスター・チラシ	12	17	42	71	
	市報	4	1	6	11	
	その他広報誌	1	2	1	4	
	テレビ・ラジオ	0	0	0	0	
	新聞	1	0	19	20	
	雑誌・情報誌	0	0	0	0	
	インターネット	2	4	4	10	
	市ホームページ	0	0	0	0	
	まいぶんナビ	1	10	7	18	
	人から聞いて	0	0	6	6	
	弥生の丘展示館を利用して	2	2	3	7	
	その他	1	1	1	3	
	計	24	37	89	150	

		項目	第1回	第2回	第3回	計
時期 (無回答あり)	大変満足	6	8	12	26	
	満足	7	17	34	58	
	普通	7	5	21	33	
	不満	0	0	4	4	
	大変不満	0	0	1	1	
	無回答	0	2	3	5	
	計	20	32	75	127	
場所 (無回答あり)	大変満足	4	5	14	23	
	満足	8	15	33	56	
	普通	6	9	21	36	
	不満	2	1	4	7	
	大変不満	0	0	0	0	
無回答	0	2	3	5		
計	20	32	75	127		
内容のわかりやすさ (無回答あり)	大変満足	6	6	13	25	
	満足	7	14	34	55	
	普通	6	7	17	30	
	不満	0	0	6	6	
	大変不満	0	0	0	0	
	無回答	1	5	5	11	
計	20	32	75	127		
施設全般： 映像、照明、 空調、バリアフリー (無回答あり)	大変満足	5	5	11	21	
	満足	8	19	41	68	
	普通	5	4	17	26	
	不満	0	0	2	2	
	大変不満	0	0	0	0	
	無回答	2	4	4	10	
計	20	32	75	127		
職員の対応： 言葉づかい、マナー、 対応、説明 (無回答あり)	大変満足	6	7	17	30	
	満足	6	17	37	60	
	普通	5	4	16	25	
	不満	0	0	1	1	
	大変不満	0	0	0	0	
	無回答	3	4	4	11	
計	20	32	75	127		
印刷物： わかりやすさ (無回答あり)	大変満足	7	2	9	18	
	満足	5	13	37	55	
	普通	5	9	18	32	
	不満	2	4	6	12	
	大変不満	0	0	0	0	
無回答	1	4	5	10		
計	20	32	75	127		
全体の満足度 (無回答あり)	大変満足	8	6	12	26	
	満足	3	17	38	58	
	普通	7	5	16	28	
	不満	0	0	2	2	
	大変不満	0	0	0	0	
無回答	2	4	7	13		
計	20	32	75	127		
次回講演会 に参加 したいか	ぜひ参加したい	9	14	40	63	
	出来たら参加したい	10	12	31	53	
	あまり参加したくない	0	0	0	0	
	参加しない	0	0	0	0	
	無回答	1	6	4	11	
計	20	32	75	127		
今後の会場 (無回答あり)	現在の場所でよい	13	14	44	71	
	別の場所がよい	2	7	5	14	
	無回答	5	11	26	42	
	計	20	32	75	127	

		項目	第1回	第2回	第3回	計
企画展・企画展示会場 (弥生の丘展示館) などについて	来館回数	ない	2	2	15	19
		1回	1	2	10	13
		2～5回	5	14	25	44
		6～9回	5	4	7	16
		10回以上	7	10	15	32
		無回答	0	0	3	3
計	20	32	75	127		
開催中の企画 展を見た (無回答あり)	はい	7	14	19	40	
	いいえ	12	15	54	81	
	無回答	1	3	2	6	
計	20	32	75	127		
開催中の企画 展を見る 予定 (無回答あり)	ある	9	11	36	56	
	ない	0	4	11	15	
	無回答	4	3	9	16	
	計	13	18	56	87	
弥生の丘展 示館周辺 施設 (無回答・ 複数回答 あり)	古津八幡山遺跡歴史 の広場	11	20	47	78	
	新津美術館	16	19	32	67	
	フラワーランド	10	14	50	74	
	県立植物園	11	17	50	78	
	県埋蔵文化財センター	18	27	56	101	
	石油の世界館	9	14	45	68	
	中野邸記念館	10	14	40	64	
	ピジターセンター	4	2	10	16	
	その他	1	1	1	3	
	無回答	0	2	0	2	
計	90	130	331	551		

講師略歴

金田 拓也（かねだ たくや）
新潟県阿賀野市（旧水原町）出身
新潟市文化スポーツ部歴史文化課

相田 泰臣（あいだ やすおみ）
新潟県三条市出身
新潟市文化スポーツ部歴史文化課文化財センター

菊地 芳朗（きくち よしお）
宮城県仙台市出身
独立行政法人福島大学行政政策学類教授



林 大智（はやし だいち）
石川県河北郡津幡町出身
公益財団法人石川県埋蔵文化財センター専門員



平成30年度
史跡古津八幡山 弥生の丘展示館
企画展関連講座・講演会 記録集

編集・発行 新潟市文化財センター
〒950-1122 新潟市西区木場2748-1
TEL 025-378-0480 FAX 025-378-0484
発行日 平成31年3月30日
印刷 株式会社ハイングラフ
〒950-2022 新潟市西区小針1丁目11番8号
TEL 025-233-0321

